

a983-25a  
\*00137942 \*

983  
a  
25a



始





狂 人 日 記

他 三 篇

ゴ ー ゴ リ 作  
米 川 正 夫 譯

世 界 文 學 社

135841



983  
25a



N. V. Gogol (1809-1852)

Izbrannye Proizvedeniya



137942

目次

解 説	ネー フスキイ通	狂 人 日 記	昔 氣 質 の 地 主 達	ク リ ス マ ス の 前 夜
.....	.....	.....	.....	.....
259	191	143	95	1



ク  
リ  
ス  
マ  
ス  
の  
前  
夜



クリスマスはいよいよ明日といふこの日も遂に暮れて行つた。冴え渡つた冬の夜が訪れ、星がちらちら瞬き出した。\*コリヤードを歌つて、基督をたたへる善男善女の心を浮き立たせようと、月はしづしづと大空へさしのぼつて、世界を照しはじめた。寒さは朝より厳しくなつた。が、その代りひっそり閑と静まり返つて、凍つた雪の靴に軋む音が半露里も先きに聞えるほどである。若者たちの群はまだこの窓下にも現はれない。ただ月が窓の中をそつとさし覗いて、おめかしをした娘たちに、早く雪をきしきし鳴らしながら駈け出しておいで、と呼び招き顔に見えるばかり。とある家の煙突からけむりがもくもくと立ち昇つて、黒雲と紛ふばかりに空に擴つてゐる。その煙とともに、箒に、跨つた魔女が浮びあがつた。

\* われ／＼の地方でコリヤードと云ふのは、クリスマスの前夜に家々の窓下でうたふ歌のことである。コリヤードを歌ふ人々の袋には、必ずその家の主婦なり主人なり、又は留守居のものなりが、腸詰、パン、銅錢など、思ひ思ひのものを投げ込んでやる。言ひ傳へによると、昔コリヤードといふ馬鹿があつて、みんなから神様と思ひ違ひされたので、これが祝ひ歌の起りとなつたとのことであるが、眞偽のほどは我々凡人の云々すべきことではない。去年神父オシップが人々を諭して、コリヤードは悪魔を喜ばす行爲であると云つて、この風習を禁じようとした。が本當のところ、この祝ひ歌にはコリヤードなる男のことなど一言も觸れてゐない。おもに基督の誕生のことを歌ひ、終りに主人夫婦、子供たちを始め、一家の息災を祈るだけである。(一) 蜜蜂飼註)



もしもその時、槍騎兵風に拵へた羊の毛皮帽を被り、黒い仔羊皮の裏をつけた青い外套を着込み、物凄い編方をした革の鞭を振り廻して馭者を急ぎ立てる癖のあるソローチンツイの陪審員が、三頭立の櫓に乗つて通りかかつたら、必ずやこの魔女を見つけたにちがひない。と云ふのは、この世のいかなる魔女といへども、ソローチンツイの陪審員の目を通れることは出来ないからである。何分にもこの男は、どこの女房の飼つてゐる豚が何匹子を生んだか、どこの女房は長持の中に麻の布を何丈しまつてゐるか、また今度の日曜にどこの亭主が、自分の家の衣類なり世帯道具なりの中から何を持ち出して、居酒屋へ曲げ込んでしまふかと云つたやうなことを、悉くそらで知つてゐるのである。ところが、ソローチンツイの陪審員はこのとき通りかからなかつた。それに第一、この男にとつては他所のことなど何も構つたことはないのだ、——ちやんと自分の預つてゐる區域があるのだから。

とかくしてゐる中に、魔女はすんすんと高く昇つて行つて、上の方にただちらりと黒い汚點のやうに見えるばかり。しかし、この汚點が近寄るが早い、忽ち空の星が一つづつ姿を消して行くのであつた。間もなく魔女は袂に一杯星を集めてしまつたが、それでもまだ三つ四つは空に瞬いてゐた。

不意に反対の方から、もう一つ別の汚點があらはれて、次第々々に大きくなり、擴がつていつ

て、今ではもう汚點ではなくなつた。近視の人間は眼鏡の代りに、お役人の馬車の轍を二つ鼻の上に載つけて見ても、一體なにが何やら見分けがつかなくなつたに相違ない。前の方から見ると真正銘の獨逸人で、のべつひくひく動いて、何でも手當り次第に嗅ぎまはす尖つた鼻の面は、丁度この國の豚とおなじやうに、先つちよが五コペイカ玉よろしくの恰好をしてゐる。脚は思ひ切つて細く、もしヤレスコフの町長がこんな足をしてゐたら、コサツク踊の最初のステップでへし折つてしまふだらうと思はれるほどである。しかしその代り、後ろから見ると、紛れもない制服を一着に及んだ縣廳の代言人である。と云ふのは、當世風の上衣の裾にそつくりの、尖つた、長い尻尾をぶら下げてゐるからで。ただ頃の下の山羊鬚と、頭におつ立つてゐる小さな角と、體ぢゆうが煙突掃除人のやうに眞黒なので、これが獨逸人でもなければ、縣廳の代言人でもなく、ただの悪魔にすぎないと云ふ推察がつくのである。もう世界中をうろつき歩いて、善男善女を咬して罪をつくらせるのも、今夜ひと晩しかない。あす朝祈禱を知らせる鐘の第一聲が響き渡るや否や、忽ち尻尾を巻いて、あとをも見ずに自分の巢へ駆け込まなくてはならないのだ。

その中に、悪魔はそつと月の方へ忍び寄つて、早速ひつ掴まうと手を差し伸べたが、突然、ま

\* 我々の地方では外國から來た人間は、フランス人であらうと、オーストリア人であらうと、スウェーデン人であらうと、誰でも彼でも獨逸人と云ふのである。



るで焼傷でもしたやうにその手を引つ込めて、指を口の中へ入れ、片足をばたばたさせた。それから今度は反対の側へまはつて見たが、又ぞろばつと飛び退いて、手を引つ込めた。ところが狡猾な悪魔は、かうした度々の失敗にもめげず、その悪企みを思ひ切らうとはしなかつた。いきなりさつと駆け寄つて、両手で月をひつ掴んだと思ふと、顔をしかめたり、息を吹きかけたりしながら、丁度素手で煙草の火を爐から取り出した百姓のやうに、片手から片手へ月を投げ移すのであつた。とどのつまり、あたふたとポケットの中へ隠すと、何くはぬ顔をしてまた走つて行つた。

チカンカでは、悪魔が月を盗んだのを、誰一人として氣のつくものがなかつた。もつとも、村役場の書記が四つん這ひになつて居酒屋から出て来る拍子に、月が何のきつかけもなく大空で踊り出したのを見て、神様にかけて誓ひながらそのことを村中へ吹聴したが、村の連中はたゞ不審さうに小首を捻るばかりで、結局お笑草にしてしまつた。ところで、悪魔がかうした不法を働かうと決心した理由は、そもそも何にあるのか？ ほかでもない、彼は裕福なコサツクのチュニブが補祭のところへ蜜飯に招ばれたのを知つてゐたからである。その席に集る人々は、まづ第一に村長、次にはわざわざ町からやつて來た補祭の親戚、これは僧正附合唱團に所屬してをり、一ばん低いバスを出すのが得意の、青い上衣を着た男。それからコサツクのスウェルブイグーズに、

なほそのほか誰彼のものが招かれてゐた。御馳走は祝儀ものの蜜飯を別にして、蜜酒、サフラ  
ツ入のヲートカ、その他さまざまな夥しい料理である。

ところで、村一番の美女と噂の高いチュニブの娘は家で留守番をするが、その娘のところへは、必ず鍛冶屋がやつて來るに相違ない。これは何處へ出しても恥かしくない天晴れな男振をした力持で、悪魔にとつてはコンドライト神父のお説教よりも苦手の若い衆。鍛冶屋は仕事の合間々々に繪を描いて、この界限きつての腕利きといふ評判をとつてゐる。まだその當時達者でゐた百人長のLでさへもが、わざわざこの男をボルタヴへ呼び出して、家のまはりの板塀に模様を描かせたほどである。チカンカのコサツク達がボルシチ（肉入スープ）用に使つてゐる深皿は、みんな鍛冶屋の描いた模様で飾られてゐる。鍛冶屋は信心ぶかい男なので、よく聖者達の御像を描いた。今でもI教會に、彼の描いた福音の使徒ルカの像を見ることが出来る。しかし彼の藝術の眞の勝利とも云ふべきものは、教會の玄關の右側の壁を飾る畫面であつて、そこには鍵を手にして地獄から悪靈を追ひ出してゐる最後の審判の日の聖ペトロが描かれてゐる。己れの破滅を豫感した鬼が慌てふためいて右往左往してゐると、それまで閉ぢ籠められてゐた罪びと共は、鞭、薪ざつぼうなど、手當り次第のもので打ちのめし、追ひ廻してゐる。畫家がこの繪に精根を打ち込んで、大きな板に描きつけてゐる時、悪魔は一生懸命にそれを邪魔しようとして、目に見えぬ手で



鍛冶屋の腕を突ついたり、鍛冶場から灰を取つて来て繪の上に振り撒いたりしたものである。しかしそれにも拘らず、仕事はたうとう完成して、繪は教會へ運び込まれ、玄關の壁に嵌め込まれた。それからと云ふもの、悪魔は鍛冶屋に仇討をしようと誓つたのである。

この世界を天下晴れて横行できるのも、今夜ひと晩きりとなつた。今夜こそ何かで鍛冶屋に腹癒せをしてやらうと、百方てだてを考へた。そのために悪魔は月を盗まうと肚を決めたのである。つまり、チューブ老人が物ぐさで尻が重いところへもつて来て、補祭のところまではさほど近くなく、おまけに道は村はずれの水車場や墓地のわきを通つて、谷のふちをぐるりと廻るやうになつてゐる。まだしも月の夜ならば、蜜酒やサフラン酒がチューブを誘き出す力を持つてゐたかも知れないが、こんな眞暗がりでは恐らく誰が行つても、チューブを臥煖爐の上から引き下ろし、家の外へつれ出すことは出来ないだらう。ところで、前からチューブと仲のよくない鍛冶屋は、いかに腕つぶしが強いからとて、親父がゐるのに娘のとこへ押しかけて行く勇氣はあるまい、といふのが悪魔の魂膽であつた。

かういつた次第で、悪魔が月をポケットへ隠すが早いか、とつぜん世界中が眞の闇となつて、補祭のところは愚か、居酒屋へさへ道を迷はないで行くと云ふことは、十人が十人、誰でも出来る業ではあるまいと思はれるほどであつた。急にあたりが暗くなつたのを見て、魔女はあつと叫

び聲を立てた。そのとき悪魔はちよちよこと駈け寄つて、魔女と腕を組み合せ、早速その耳にひそひそと囁き出した。それは普通、人が女性にむかつて囁くやうなことであつた。さてもこの世の中は不思議に出来てゐるもの！そこに生きとし生けるものは何から何まで、お互同志の眞似をし、癖を取らうと懸命になつてゐるのだ。もとミルゴロドの市まちで、冬、毛皮を裏にした羅紗の外套を着て歩いてゐたのは、ただ判事と市長だけで、下つぱの役人どもはただの革外套を着用したものだが、今では陪審員、町會議員も、レンニチーロフ産の仔羊皮を裏にした羅紗の外套を新調するといふ始末である。一昨年あたり小役人や郡役所の書記などが、革の支那織を一アルシン六十コペイカで買つたものだ。寺男は南京木綿の廣ズボンと、縞の毛織のチョッキを拵へた。一口に云へば、猫も杓子も人並の眞似をしたがるのだ！いつたい何時になつたら、この人間といふやつは齷齪とこせつかないやうになるのだらう？私は賭でもしておくが、御同様に人眞似をはじめた悪魔を見たら、大抵のものは奇妙きてれつに思ふに相違ない。ところで何よりも忌々しいのは、先生たしかに自分のことを天晴れ好男子とうぬ惚れてゐるらしいが、その實ひと目見てさへ此方がきまり悪くなる位な恰好なのである。その面ときたら、フォマー・グリゴリエヰチが云つたやうに、へどが出さうな御面相なのだが、それでも當人は色事の一つもしようとかかつてゐる！しかし天上も下界もすつかり暗くなつてしまつて、その先き二人の間がどうなつ



たやらとんと見分けがつかなくなつた。

「ぢや、何かね、お前はまだ補祭の新家へ行つたことがないのかい？」とコサックのチューブは我家の戸口を出ながら、短い毛皮外套を着た、瘡せてかさかさの、背の高い男に話しかけた。相手の男は頤鬚をもしやもしや生やしてゐるところを見ると、もう二週間も顔を當つたことがないらしい。この邊の百姓は普通剃刀をもつてゐないので、鎌の折れつ端で顔を剃るのであつた。「あそこぢや今夜さぞ飲んで騒ぐことだらうな！」とチューブはにやりと笑つて言葉を續けた。「俺達も遅れないやうにしなければ！」

かう云ひながらチューブは、外套の上からきつちり締つてゐる帯を直し、帽子をすつぽりと深く被り、うるさい犬どもにとつて恐怖の的となつてゐる杖を手にぎゆつと握りしめた。けれども、ふと空をふり仰いで、足を停めた。

「こりや何ちふ不思議なこつた！ 見なさい！ パナス、ちよつと見なさい……！」

「どうしたんだ？」と相手は云つて、おなじく頭を空へむけた。

「どうしたもかうしたもあるもんか？ お月様がなくなつた！」

「おやおや！ ほんとにお月様がなくなつた。」

「さうなんだよ、なくなつたんだよ。」相手が相も變らず平氣な顔つきをしてゐるのを見て、チューブは幾らか忌々しさうな調子で云つた。「お前はどうかやら、とんとお構ひのなささうな様子だな。」

「わしにどうしようがあるもんか？」

「どこの畜生か知らないが、」とチューブは袖で口髭を拭きながら續けた。「朝のヲートカが飲めないやうにして貰ひたいと云ふのかい！ 餘計なとこへしやしやり出やつて！……本當に、まるで人をからかつてやがらあ……俺は家にゐる時、わざわざ窓の外を覗いて見たんだが、その時はそれこそ素晴らしい夜だつたつけ！ 一面に明るくつて、雪が月の光にきらきらして、何もかも晝のやうに見渡せたもんだに、一足そとへ出るか出ないかに、どうだ、一寸さきも分りやしない！ 忌々しい、こつこつの蕎麥餅でも嚙つて、齒を一本のこらず折つてしまひやがれ！」

チューブはまだ長いことぶつぶつ云つたり、悪態をついたりしてゐたが、しかしそれと同時に一體なんとしたものかと思案するのであつた。彼は補祭のところへ行つて、四方山の話がしたくて堪らなかつた。そこにはもうてつきり疑ひなく、村長も來てゐれば、僧正附合唱團のバスもをり、タール屋のミキータもゐるに相違ない。この男は二週間おきにポルタヴの競り市へ行つて來



るので、村中のものが腹を抱へて笑ひこぼるやうな洒落を連發させるのだ。チューブは早くも卓の上に置いてある蜜酒を目のあたり見る思ひであつた。それやこれやは、確かに心ひかれるものであるが、この夜の暗さはすべてのコサツクに共通の物ぐさ癖を懐かしく想ひ起させる。足をすくめて臥煖爐の上に臥ころがり、悠々とパイプを吹かせながら、窓の下に群がる若い衆や娘つこどものコリヤードを、陶然と夢うつつの中に聞いてゐるのは、どんなにいい心持か知れやしない！もしこれが一人きりだつたら、彼はそれこそもう間違なく、居残りと決めたに相違ないのだ。しかし今は二人づれなので、暗い夜道をゆくのもさして退屈でもなければ、恐ろしくもない。それに何と云つても、みんなから物ぐさだとか、臆病だとか思はれたくなかつた。悪態を一わたり済ますと、彼はまた相手に話しかけた。

「どうだ、おい、お月様がなくなつたら？」

「なくなつた。」

「奇態だ、全く！　ときに、ちよつと煙草を嗅がせてくれないか！　いやあ、これは大した煙草だ！　どこで買ふんだい？」

「何が大したもんかい！」と相手は一面に模様の彫つてある白樺皮の煙草入れの蓋をしながら答へた。「甲羅へた雞ならこんな煙草ぢや噓もしやせんわい！」

「忘れませんが、」とチューブは依然たる調子で續けるのであつた。「亡くなつた居酒屋の亭主のズーリヤが、いつかネージンから煙草を買つて来てくれたが、いや、あれこそ本當の煙草だつた！　いい煙草だつたよ！　ところで、どうだ、お互に何としたもんだらう？　何しろ外は眞暗だが。」

「ぢや、その、このままここにゐるとするかな？」と相手は戸の把手とてを握つてから云つた。

もし相手がこんなことを云はなかつたら、チューブは確かに居残りと決めた筈なのだが、かう云はれて見ると、何だか逆に出たいやうな氣があるのであつた。

「いや、出かけよう！　いけないよ、そりや、行かんと悪い！」

さう云つてしまつてから、こんなことを口に出した自分が、我ながら忌々しくなつた。こんな夜とぼとぼ歩いて行くのは嫌で堪まらなかつたが、しかしこれは自分から云ひ出したことであつて人に勧められてしたことではないのだ、さう思ふと心が慰むのであつた。

相手は、家にじつとしてゐるやうが、それとも外をのこのこ歩かうが、どつちだつて一向にお構ひはないと云はんばかりに、露いささか忌々しさうな様子を顔に表はさず、あたりを見廻して、杖の尖で肩をちよつと搔いた。——かうして二人の相棒は出かけて行つた。



さて今度は、ただ一人うちに残つた縹緖よしの娘が何をしてゐるか、様子を見ることにしよう。オクサーナは十七になるかならないかに、デカンカのあちらでもこちらでも、殆ど界限一圓にかけて、この娘の評判で持ち切るやうになつた。若い衆たちは異口同音に、あれ以上の娘は今までこの村になかつたし、又これから先も出て来ないだらうと決めてしまつた。オクサーナは自分の噂は何から何まで残らず知つてゐたので、すべての美女の例に洩れず我儘であつた。もし彼女が普段の毛織上衣や毛織袴でなく、カポートか何かを着て歩いたら、村の娘たちは顔色なしだつたに違ひない。若い衆達は群をなして彼女の跡をつけ廻したが、つひには痺れを切らしてしまつて、次第々々にこの我儘娘に見切りをつけ、さほど甘やかされてゐないほかの娘に宗旨を變へるのであつた。ただ一人鍛冶屋だけは強情を張つて、オクサーナの尻を追ふことをやめなかつた。と云つて、彼女のあしらひがほかの男達に對する素振より、些かなりとも優しいわけではなかつたのだ。父親が出ていつた後で、オクサーナはまだ長いこと、錫のふちに入つた小さな手鏡の前でお洒落をしながら、いつまでも自分の顔に眺め飽きないのであつた。

「いつたい世間の人は、何と思つてあたしのことを綺麗だなんて囃し立てるんだらう？」と彼女は云つたが、それはただ何か獨り言を云つて見るためでもあるやうな、ぼんやりした調子だつた。「そんなこと嘘だわ、あたし綺麗でも何でもありませんわ！」

けれども鏡の中に映つた、まだ子供つぼさの抜けない若々しい、水の垂れさうなほど生々とした顔、輝かしい黒い瞳、人の心を焼くやうな得も云はれず快い微笑みは、突如、全く反對のことを證明するのであつた。

「一體この黒い眉や眼は、」と美女は鏡を手から放さず言葉をつづけるのであつた。「この世に比べるものがないほど美しいのだらうか？ こんな上を向いた鼻の一體どこがいいんだらう？ それにこの頬？ この唇？ 本當にあたしの黒い髪が素的なのかしら？ こんなもの、もし晚ひよつこり出會つたら、ぎよつとしさうなもんだわ。まるで長い蛇みたいに、あたしの頭のまはりにぐるぐる絡みついてるんだもの。今つくづく見ると、あたしはちつとも美人ぢやありませんわ！」それから、ちよつと鏡を離してみ、叫ぶやうに云つた。「いいえ、あたしは美人なのだ！ ああ、何て美しいんだらう！ 素晴らしいわ！ あたしが奥さんになつて上げたら、その人はどんなに嬉しいか知れやしない！ その人はどんなにあたしに見惚れることだらう！ きつと嬉しくつて嬉しくつて、夢中になつてしまふに相違ない！ 息がつまつて死にさうなほど接吻するにちがひないわ。」

「素晴らしい娘だ！」と、こつそり入つて來た鍛冶屋は呟いた。「それに自惚れ方だつてまだ足



らない位だ！ 小一時間も鏡と睨みつくらしをしても、まだ見飽きないんだからなあ、そして口に出してまで自分で自分に感心してゐる！」

「ねえ、村の若い衆さん達、一體あたしがあんた達に吊り合ふとでも思つてるの？ まあ、一寸あたしを見てごらんさいよ。」と可愛い阿娜者は言葉をつづける。「あたしの歩きつぷりはしとやかぢやなくつて？ あたしの肌著は赤の絹糸で刺繍がしてあるのよ。それから頭髪のリボンはどう？ これ以上贅澤な金糸銀糸は、あんた達一生かかつたつて見られやしなくつてよ！ これはみんなうちのお父さんが、あたしに世界中で一番の立派なお婿さんを持たせようと思つて、買つて下すつたんだわ。」さう云ひながらにつこり笑つて、くるりと後ろを振り向いた拍子に、鍛冶屋の姿が目に入つた……

思はずあつと叫んで、こはい顔をしながら男の前に立ち止つた。

鍛冶屋はすつかり氣後れしてしまつた。

この美女のやや浅黒い顔が如何なる表情を呈してゐたか、それはなかなか言葉にはつくせない。そこには嚴めしい影も見えたが、その嚴めしさを透かして、何かしら當惑顔の鍛冶屋をからかふやうなところもあつた。同時に漸くそれと知られる忌々しさの色も、ほんのり顔に擴がつてゐるのであつた。さうしたものが何もかも一緒になつて、筆にも口にも盡せぬほど可愛く、千遍

も萬遍も吻づけしてやりたい位、——その場合これより上の望みはないやうに思はれた。

「あんた何しにここへ來たの？」とオクサーナはこんな風に切り出した。「一體あたしにシヨベルで戸の外へ追ん出してもらひたいの？ あんた達はみんな隙を狙ふ名人だわねえ。お父さんが家にゐない時をすぐに嗅ぎつけるんだもの。えええ、あたしよく分つてるわ、あんた方のするとは！ どうなの、あたしの長持は出來て？」

「すぐ出来るよ、オクサーナ、お祭がすんだらすぐ出来るから。あの長持でどれくらゐ骨を折つたか、それをお前に分つて貰へたらなあ。一夜といふもの仕事場から出なかつたんだよ。その代り、どこのお寺のお嬢さんだつて、あれだけの長持はもつてやしないから。あんな鐵帯は、ポルタヴへ仕事に行つた時、百人長の馬車にだつてつけたことがない位だよ。それにどんな模様を描くと思ふ！ まあ、その可愛い足でこの近在を残らず歩き廻つてごらん、又と二つ見つかりやしないぜ！ 全體の地に赤や青の花を散らすつもりだ。まるで燃え立つやうに綺麗になるから、さう怒らないでくれ！ せめて一こと話をさしておくれ、せめて一寸の間お前を眺めさせておくれ！」

「誰もいけないつて云やしないわよ。勝手に話をして眺めたらいいわ！」

さう云ひながら床几に腰を下ろし、又もや鏡に見入つて、頭に巻きつけた編髪を直しにかかつ



た。それから頸筋に目をやつて、絹の刺繡をした新しい下着を見ると、満足の色がその唇にも、みづみづした頬にも仄かに浮び、瞳の中にも反射を見せた。

「俺にもその傍に坐らせてくれないか！」と鍛冶屋は云ひ出した。

「坐つたらいいわ。」とオクサーナは満ち足りたらしい眼の中にも唇にも、相變らず同じ氣持を浮べたまま、かう云ふのであつた。

「素晴らしいオクサーナ、世にも美しいオクサーナ、ちよつとお前に接吻さしておくれ！」と鍛冶屋は勢を得てこんなことを云ひながら、接吻を盗み取らうと女を抱き寄せた。けれどもオクサーナは、鍛冶屋の唇からもう僅かしか離れてゐなかつた自分の頬をつと外らして、男を押し退けた。

「まあ、何を云ひ出すんだらう？ この人つたら、蜜を見せると、もう匙をよこせなんて云ふんだからねえ！ あつちい行つて頂戴、あなたの手つたら、鐵よりもつと固いんだもの。おまけに體つたら煙くさいぢやないの。きつとあたしの體ぢゆうに煤を塗りたくつたに相違ないわ。」

さう云つて、彼女は手鏡を取り上げ、またもやおめかしを始めた。

『この女は俺を好いちやゐないんだ！』と鍛冶屋は悄然と首垂れながら、心の中で考へた。『この娘に取つちや、なんでもみんな玩具なんだ。それなのに、俺は阿呆みたいにぼんやり突つ立つ

て、眼も離さずに見とれてるんだからなあ。全く、何時までも何時までも立つてゐて、一生涯あの姿から眼を離さずに見たい位だ！ 素晴らしい娘！ いったい誰を好いてゐるのか、あの娘の心の中を知るためなら、俺はどんなものでも惜しくないや。ところが本當はさうぢやなくて、御當人どんな男にも用はありやしない。あの娘はただ自分で自分に見惚れてゐるんだ。そして可哀さうなこの俺を苦しめてるんだ。お蔭で俺はお天道さまの光も見えないほどくよくよしてゐるつて譯さ。俺があんな娘に惚れてゐるその惚れやうと云つたら、世界中のどんな男だつて今までこんな惚れ方をしたものはありやしない、又これから先だつてありつこなしだ。』

「あなたのお母さんが魔女だつてのは本當？」とオクサーナは云つて、笑ひだした。すると鍛冶屋も、肚の底からぐつと笑ひが込み上げて來るのを感じた。その笑ひは胸の中にも、靜かに慄へ出した血管の中にも、一どきに木魂するやうな按配であつたが、それと同時に、あの可愛い笑顔を思ふ存分接吻が出来ないのだと思ふと、忌々しさに業が煮えるのであつた。

「俺はお母どころぢやありやしないよ。俺にとつてはお前が母親でもあれば、父親でもあり、この世で大事な一切のものなんだからな。もし王様が俺をお召し寄せになつて、鍛冶屋のブクラー、わしの國ぢゆうで一番いいものを何なりと無心するがよい、わしは何でもその方にくれてやる。わしはその方のために黄金の鍛冶場をつくるやうに命令しよう、さうしたらその方は銀の金槌で



仕事をやるやうになるのだ。』と仰しやる。すると俺は王様に、<sup>△</sup>いやでございます。』と申し上げるのだ。<sup>△</sup>寶石も、黄金の鍛冶場も、それどころかあなた様のお國全體も、何にも要りませぬ、それよりオクサーナを下さいます。』とな。

「まあ、なんて人でせう！ でもね、うちのお父さんも油断のならない人だからね、見ててごらん、ひよつとあなたのお母さんをお嫁にしないとも限らないからね！」とオクサーナは狡さうにやりと笑つてかう云つた。「それにしても娘さん達はどうして來ないのか知ら……一體どうしたつて云ふんだらう？ もう疾づくにコリヤーダが始まる時分なのに、あたしつまんないわ。」

「あんな連中なんか打つちやつといたらいいのさ、オクサーナ！」

「さういふ譯には行かなくてよ！ 若い衆たちも屹度いつしよに來るに相違ないわ。さうしたら踊がはじまるんだ。さぞ色んな面白いお話が澤山出ることですえねえ！」

「ぢや、お前はあの連中と一緒にゐた方が面白いのかね？」

「ええ、そりやもうあなたと一緒にゐるよか面白いわ。あら！ 誰か戸を叩いてるわ。きつと娘さん達が若い衆と一緒に來たんだわ。」

『このうへ俺は何を待つことがあるんだ？』と鍛冶屋は獨りごつのであつた。『この女は俺をなぶりものにしてるんだ。俺なんかこの女にとつて、錆びた蹄鐵ほどの値打しかないんだからなあ。』

だが、それにしたつて、俺はほかの男に自分をなぶりものにさせやしないぞ。とにかく俺は、誰が一番あの娘のお氣に召してゐるか、しかと見届けて思ひ知らせてやるんだ……』

戸口を叩く音と、凍てた空氣の中に鋭く響く「開けろ！」といふ聲が、彼のもの思ひを妨げた。

「ちよつと待つた、俺が自分で開けてやらあ。」と鍛冶屋は云ひ、入口の間へ出て行つた。先づ一番に入つて來る男の肋骨をへし折つてやらうといふ目算で。

寒氣は次第に募つて、高いところは堪まらないほどの寒さになつたので、悪魔は蹄の生えた兩脚を交みにびよんびよんさせ、拳骨に息を吹きかけた、かじかんだ手をいくらかでも暖めようと云ふのである。尤も、ここで悪魔が凍えるのは無理からぬ話である。何分にも地獄は周知のごとくロシアの冬とちがつてさほど寒くないのだが、その地獄を朝から夜明まであちこちし、正真正銘の料理人然とした頭巾を被つて爐の前に頑張り、よく百姓の女房がクリスマスの用意に腸詰を烙る時と同じくらゐる楽しさうに、罪人どもを火烙りにしてゐた身の上なのだから。

魔女の方も、随分ぬくぬくと着込んでゐたものの、やつぱり寒くなつて來た。で、兩手を差



し上げて、片足を後へひき、スケートでもするやうな姿勢をとつて、手足の節一つ動かさないで氷つた坂でも走るやうに空中を滑走し、まつすぐに煙突へ飛びこんだ。

悪魔も同じ要領でその後につづいた。ところがこの悪魔なる動物は、いかなる長靴下を穿いた伊達者よりも敏つこいので、煙突の入口のところであ人の頸に見事馬乗りになつたのも、敢えて驚くほどのことではない。かうして兩人は廣々とした煖爐の中、壺と壺のあひだに姿を現はした。

魔女はそろつと煖爐の蓋を開けて、息子のブクラーが家へ客でも呼び込んではないかと覗いてみた。が、部屋のまん中に轉がつてゐる袋のほか誰もゐないのを見定めると、煖爐の中から這ひ出して、暖い裘をぬぎ棄て、身づくろひをした。すると、ほんの一寸まへ箒に乗つて飛びまはつたなどとは、もう誰が見ても想像がつかない程になつた。

鍛冶屋ブクラーの母親はまだ四十にはなつてゐなかつた。彼女は美人でもなければ醜女でもなかつた。又この年に美人であることは出来ない相談ではないか。けれども、彼女は分別盛りのコサック達（序でに斷わつておくが、さう云ふ連中に縹緞などどうでもよいのだ）を惹きつける不思議な腕を持つてゐた。彼女のそこへは村長も、補祭のオシップ・ニキーフオロギッチも（勿論細君が留守のときに限るのだが）、コサックのコレニイ・チューブも、コサックのカシヤン・スヴェルブイグーズも通つてゐる。しかも、彼女の名譽のために云つておかなければならないが、彼

女はいとも巧みにこの連中をあやなしてゐたので、彼等の誰一人として、自分に競争者があらうなどとは夢にも思はなかつたのである。例へば、頭巾附の外套を着た百姓なり貴族なりが（コサック達は貴族と自稱してゐた）、日曜日に教會へ出かける時か、それとも雨降りならば居酒屋通ひの途中など、後家のソローハの家へ立ち寄つて、酸乳つきの脂つこい麥團子を御馳走になり、暖い部屋の中で話好きの如才ない主婦と一と喋りするの、何の不思議があらう？ で、貴族どのはそのために、居酒屋へ辿りつく前にわざわざ大迂りして、それを途中ちよつと立ち寄ると稱してゐるのであつた。

ところで、日曜や祭日にソローハが派手な上衣を着込み、南京木綿の下袴の上に口髭の恰好をした金糸の繡ひ模様のある青いスカートを穿いて教會へ出かけ、いきなり右側の唱歌隊席のそばに陣取ると、補祭は必ずやえへんと咳拂ひして、思はずその方へむかつて眼を細める。村長は口髭を捻つて、一束の毛を耳のうしろへ挟みながら、そばに立つてゐる隣人に『いやあ、中々ええ女ぢや！ 凄いな女ぢや！』と云ふ。ソローハは一人々々の男に會釋する。すると一人々々の男は自分だけが會釋してもらつたやうに思ひ込むのだ。

しかし人のことに嘴を入れたがる連中は、ソローハが一ばん愛想よくするのはコサックのチューブだといふことに、さつそく氣づいた筈である。チューブは男やもめであつた。彼の家の前に



はいつも麥の禾堆が八つも並んでゐるし、逞ましい牡牛が四頭、いつも編壁づくりの納屋から往來へ首を突き出して、小母さん——牝牛——や小父さん——肥った牡牛——が通るのを見かける。もうもうと啼き立てるのだ。頤鬚を生やした山羊は屋根の上まで攀ぢのぼつて、そこからさながら市長様よろしく、ひびの入つたやうな聲でけたましく啼き立てながら、背戸を歩きまはる七面鳥どもをからかつてゐるが、悪戯小僧の姿を見つけると、くるりと尻を向けてしまふ。これは山羊君にとつては不具戴天の仇敵で、いつもその頤鬚をなぶりものにするのである。チュープの家の長持には麻布や、長上衣や、金糸のついた古風な羽織などがしたま詰まつてゐる。亡くなつた女房がお洒落だつたので。菜園には芥子、玉菜、向日葵などが生えてゐるほか、毎年二枚の畑に烟草が蒔きつけられる。ソローハはこんなものがすつかり自分の世帯へ一緒にされたら悪くならうと思ひ、いよいよ自分の手に移つたらどういふ風に始末したものかと、とらぬ狸の皮算用に餘念なく、そこでチュープ老人に特別の好意を見せるのであつた。

ところで、どうかしてひよつと息子のブクラーがチュープの娘を口説き落して、何もかも我が手の中におさめてしまつたら大變である。その時は母親などに何一つ口出しさせないに決つてゐる。そこで彼女はすべて四十女の使ふいつもの手段に訴へることにした、——つまり、チュープと鍛冶屋をなるべくしよつちう喧嘩させることなのである。恐らくこのために彼女のめぐらす悪

企みや様々な魂膽が因となつたのであらう、何處かでみなが集まつて賑やかに一杯のんだ時など、村の年寄り達がソローハは確かに魔女だと云ひ出すやうになつた。やれ若い衆キジャコルペンコがあゝの女の後ろに、紡錘くらゐな大きさの尻尾が下つてゐるのを見つけたとか、やれ先々週の木曜にあいつが黒猫になつて道切りをしたとか、やれお寺の奥さんのところへあるとき豚が一匹走つて来て、雄雞のやうな聲でときを作つたと思ふと、住持のコンドラートの頭に帽子をすつぽり被せて、そのまま逃げて行つたとか……

ちやうど年寄達がそんな噂をしてゐる折も折、テイミーシ・クロスチャーティとかいふ牛飼がやつて来て、早速ぬかりなくこんな話をした。この夏ペトロフキ（六月二十九日ペトロ祭前の精進期）の前に、彼が牛小屋で藁を枕にして横になつたところ、髪をおつさばいた襦袢一枚の魔女が、牛の乳を搾つてゐるところをまざまざと見た。けれども、すつかり呪ひをかけられてしまつたので、身じろぎすることも出来ないのだ。魔女に何かしら胸くその悪いものを唇に塗られたため、彼はその後いちんち、ぺつぺつと唾ばかり吐いてゐた、と云ふのである。しかし、これはどうも頗る眉唾ものと云はなければならぬ。何故なら、魔女を見ることが出来るのはソローチンツイの陪審員よりほかにないからである。さういふわけで、れつきとしたコサック達はそんな話を聞くと、誰も彼も手を振つた。『女どもが愚にもつかんことを云ふとるわ！』これが普通彼等の挨拶



夢であつた。

煖爐から出て身づくろひすると、ソローハは世帯持のよい主婦らしくそこら邊を片づけて、それぞれみんな決つた場所へ置いた。が、袋だけには手をつけなかつた。『これはグクラーが持つて来たんだから、あれが勝手に持つて行くがいいんだ!』ところで悪魔は、さつき煙突へ飛び込むとき、ふと何氣なく後ろを振り返つた途端に、まだ家から大分離れたところを、相棒と手に手を取つて歩いて来るチューブの姿が目に入つた。で、忽ち彼は煖爐から跳び出すが早い、二人の行く手の道を切つて、凍つた雪の塊りを掴んで、四方八方へ投げ散らしはじめた。雪あらしが起つた。天地はみるみる眞白な網を張りつめたやうになつた。雪は縦横に飛びちがつて、道ゆく人の眼も鼻も耳も塞いでしまふかと思はれた。悪魔は、もうこれでチューブも相棒と一緒に我家へ引つ返すにちがひない、そのとき鍛冶屋が娘のそこへ来てゐるのを見て、したたかな目に遭はせ、當分繪筆を手にとつて、俺を馬鹿にしたおどけ畫など描けなくするだらう、とかう心から思ひ込んで、又ぞろ煙突の中へ飛び込んだ。

案の定、吹雪がはじまつて、風が容赦なく目つぶしを食はせ出すが早い、チューブはもう家

を出たことを悔むやうになつた。そして頭巾をなほも目深に被りながら、自分にも、相棒にも、悪魔にも、悪口雑言を浴せかけるのであつた。チューブは吹雪がはじまつたのを却つて心から喜んだ。補祭のときまでは、今まで来た道のりよりもまだ八倍も遠いのだつた。二人はあとへ引つ返した。風は頸筋へびうびう吹きつけるし、物凄い雪あらしで何一つ見分けがつかなかつた。

「おい、一寸待たないか!俺達はどうか道の間違へたらしいぞ。」とチューブは少し離れて聲をかけた。「家なんか一軒も見えやしない。やれやれ、何ちふ吹雪だ!お前、ちよつとわきの方へ寄つて見んか、道がめつかるかも知れんからな。その間に俺はこつちの方を捜してみるわ。くそ忌々しい、こんな吹雪の中をうろうろせにやならんとは!道が目つかつたら、忘れないで呶鳴つてくれよ。ちえつ畜生、眼の中にこんな雪の塊りが飛び込みやがつた!」

それでも、道は結局見つからなかつた。わきの方へ離れて行つた相棒は、深い長靴を引きずりながらあちこちと彷徨ひ歩いたが、とどのつまり居酒屋にぶつ突かつた。このめぐり合せにはすつかり大満悦で、たちまち何もかも忘れてしまひ、體の雪を拂ひ落して、外に残つた仲間のことなどには一向に頓着なく、ずんずん中へ入つて行つた。とかくする中に、チューブはどうやら道を見つけたやうな氣がしたので、立ちどまつて、ありつたけの聲で喚きにかかつた。けれども、相棒が姿を現はしさうもないのを見て、勝手に一人で行くことに肚を決めた。暫くゆくと、自分



の家が目に入った。雪の吹き溜りは家の周りばかりか、屋根の上にも堆高かつた。外の寒気に凍え切つた両手を打ち合せながら、彼は戸を叩いたり呶鳴つたりしはじめた、娘に戸を開けると命じるので。

「一體ゼンたい何用だ？」と鍛冶屋は中から出て、怖い聲で訊ねた。

鍛冶屋の聲と氣がついて、チューブは思はずたじたと後へすさつた。

『やつ、ちがふ、こりや俺の家ぢやないぞ。』と彼は肚の中で考へた。『俺の家へ鍛冶屋なんかふらふらやつて来るはずがない。ところがそれにしても、よく見てみると、鍛冶屋の家でもないぞ。一體これは何處の家だらう？ はてな！ どうも見分けがつかんぞ！ ああこいつは近頃若い女房を貰つた跛のレフチェンコの家だ。俺んとこと似てるのはあいつの家だけだからな。道理で初めから少々變てこに思はれたんだ、あんまり早く家へ歸りついたものな。だがしかし、レフチェンコはいま補祭のここに行つてる筈だ、それは俺がちゃんと承知しとる。それなのに何だつて鍛冶屋なんか來てるのかな？……ははん、なるほど、やつはこの若女房のここへ忍んで來てるのだ。さうか！ 分つた！ 今こそ何もかも合點が行つたわい。』

「貴様はいつたい何者だ、なんだつてよその戸口をうろろしてやがるんだ？」と鍛冶屋は前よりもつと怖い聲で問ひかけながら、じりじりと詰め寄つた。

『いや、何者か云はずにおかう。』とチューブは考へた。『さもないと、あの暴れものめ、俺を撲りつけないとも限らんからな！』

で、聲を變へて答へた。

「わしは別に怪しい人間ぢやないよ！ お前さんとこの窓の下でコリヤーダを歌つて、御祝儀を上げてようと思つて來たんだよ。」

「手前のコリヤーダなんか眞平だ、とつと何處なと失せやがれ！」とブクラーは突慥貪に答へた。「何だつて突つ立つてやがるんだ？ 聞えないのか！ すぐにきりきり失せやがれ！」

チューブの方でも自分から、さうするのが上分別だといふ氣があつたのだ。けれども、鍛冶屋風情の命令を聽くことになるのが癪なやうに思はれた。何かしら悪魔が彼の脇腹を突つついて、相手に逆らふやうなことを云はせたらしい。

「本當に何だつてお前さうぎやんぎやん喚き立てるんだね？」と彼は前と同じ調子で云つた。「俺はただコリヤーダを祝はうと思つただけ、ただそれだけなんだよ！」

「ちえつ！ どうも貴様は口で云つただけや音なく引つ込みさうもないな！」

この言葉と同時に、チューブは肩をしたたかぶん撲られたのを感じた。

「ふん、それぢやお前はどうかやら、喧嘩をはじめるともりだな！」と彼は後へさりながらかう



云った。

「失せろ、失せろ！」と鍛冶屋はチューブにもう一と突きお見舞しながら呶鳴った。

「まあどうだ、えらい力みやうぢやないか！」と一人戸外に取り残されたチューブは呟いた。「ふん、手がつけられやしない！ 本當になんてやつだ！ 何ちふお豪方だらう。一體お前は裁きを受けないで済むと思つとるのか？ なあに、俺あ行つて訴へてやるぞ、いきなりお目附のところへ行つてやるんだから。その時こそ思ひ知るがいい！ 貴様が鍛冶屋で繪かきだからつて、そんなことに俺あ頓着しやあせんぞ。だが、一つ背中や肩を見てみなくちや。きつと青い打ちみが方方に出るに相違ない。あの畜生、随分ひどくぶん撲りやがつたから。しかし、どうも残念ながら、かう寒くちや毛皮の外套をぬぐ気がせんて。まあ待つてるがいい、鍛冶屋の畜生野郎め、今に悪魔が貴様をぶちのめして、貴様の鍛冶場も叩きつぶしてしまふんだから、そのとき泣きつ面をかかんがいい！ ちよつ、忌々しい悪黨め！ だが、待てよ、今やつは家にをらんのだから、きつとソーハが一人で留守番してるといふわけだ。ふむ……道もここから遠くないしと、——一つ出かけるかな！ 今は時刻も時刻だから、二人でゐるところへ誰も押しかけて来るものもあるまい。ひよつとしたらあれも出来るかも知れないぞ……ちよつ、忌々しい鍛冶屋め、なんて小つびどくぶん撲りやがつたんだらう！」

そこで、チューブは背中をちよいと搔いて、方角を變へて歩き出した。先の方で待ち受けてゐる媾曳の楽しみは幾らか痛みを紛らし、吹雪の唸りにも消されることなく、通りといふ通りに牙え返つてゐる寒さすら感じさせなかつた。情容赦もなくお客の鼻を引つ掴む理髮人とこやよりも手早く、吹雪は彼の口髭や頤髭を眞白に塗つてしまつたが、その隙間から時々彼の顔に半ば甘つたるい思ひ出し笑ひが浮んだ。もし吹雪が縦横無盡に眼の前を荒れ狂はなかつたら、チューブが時をり足を停めては、『忌々しい鍛冶屋め、小つびどくぶん撲りやがつた！』と云つては、またとぼとぼと歩き出すのが、まだまだ長いあひだ見透かされた筈なのである。

例の山羊鬚を生やし尻尾をぶら下げた素ばしつこい伊達者が、煙突から飛び出してはまた煙突へもぐり込んでゐる間に、盗んだ月を隠してあつた腰の巾着が、ふとしたはずみで煖爐に引つかつて口を開けた。すると月はこの機逸すべからずとばかり、ソーハの家の煙突から飛び出して、ゆらゆらと空へ昇つて行つた。天地は急にぱつと明るくなつた。吹雪などはまるで氣けもなかつたかのやう。雪は廣々とした野に銀を漲らし、一面にきらきらと細かい星を撒きちらした。寒



さもいくらか弛んだやうに思はれる。手に手に袋をもつた若い衆や娘が姿をあらはした。歌聲がひびき始め、ほとんど何處の家の前にもコリヤーダを祝ふ人々の影が見受けられた。

月の光のなんと素晴らしいことか！このやうな夜、笑ひさざめき歌ひ囃す若い男や女の間を練り歩くのが如何にこころよいものか、所詮言葉には盡せない。人々は愉しげに微笑んでゐる夜景色にそそのかされて、どんな洒落でも思ひつきでもやつて退けかねない勢である。毛皮外套をしつかり身に纏つてゐれば、別に寒いことはない。凍つた空氣のために頬は餘計にかつかと火照る。いたづらや悪巫山戯は、まるで悪魔が後ろから突つついてでもゐるやうに、あとからあとからと際限がない。

袋を持つた娘たちの一團が、チューブの家へどやどやと押し入つて、オクサーナを取り巻いた。叫び、高笑ひ、話しごゑ、鍛冶屋は耳ががんとする思ひであつた。一同は先を争つて何かしら耳新しいことをこの美女に話して聞かさうとした。そして、早くコリヤーダ歌で貰ひ集めた夥しい平麩パリエニツクや、腸詰や、麥團子を袋から取り出して、自慢し合ふのであつた。オクサーナはさも嬉しうな大満悦の體で、あの娘この娘と交るがはる何やら喋りあつては、やみ間なしにきやつきやつと笑ひ興じてゐた。

鍛冶屋は何か忌々しいやうな、羨ましいやうな氣持で、人々の楽しげな様を眺めてゐた。そし

て今度ばかりはコリヤーダが呪はしく思はれるのであつた、その癖ふだんは夢中になる程コリヤーダが好きだつたので。

「まあ、オダールカー！」とオクサーナは浮々した調子で一人の娘に話しかけた。「あんたは新しい靴を穿いてるのねえ。まあ、なんて素的なんでせう！おまけに金までついて！あんたはいいわねえ、オダールカー、何でも買つてくれる人があつて。あたしなんか誰もこんな素ばらしい靴を買つてくれる人ありやしないわ。」

「さうくよくよすることはないさ、可愛いオクサーナ！」と鍛冶屋がひき取つた。「今に俺がお邸のお嬢さん方でも滅多に穿いてゐないやうな靴を買つて上げるから。」

「あんたが？」とオクサーナはその顔を見ながら、高慢ちきな調子で早口に云つた。「まあ、あたしがこの足に穿けるやうな靴を何處からあんたが手に入れるか、一つ見てみませうよ。ぢや、あんたは女王様のお穿きになる靴をあたしに持つて来てくれる？」

「ああら、なんて望みをおこしたんだらうねえ！」と娘達の群れは笑ひ聲とともに叫んだ。

「ええ、さうよ！」と美女は誇らかに言葉をつづけた。「ねえ、あんた方みんな證人になつて頂戴、もし鍛冶屋のブクラーが女王様の穿いてらつしやる靴を持つて來たら、あたし誓つて云ふわ、すぐその場であの人のお嫁になるから。」



娘達は氣紛れの美女と一緒に外へつれ出した。

「笑ふがいい！ 笑ふがいい！」と一同のあとから出て行きながら鍛冶屋は獨りごちた。「俺も自分で自分を笑つてるんだからな！ ああ、幾ら考へても、俺の分別がいつたい何處へ行つちまつたのか考へつけないや。あの娘は俺を好いちやゐない、——ふん、どうぞ御勝手にだ！ この世に女はオクサーナ一人つきりぢやあるまいし。有難いことに、あれのほかにも可愛い娘は幾らでも村にゐるからな。一體オクサーナがどうしたつて云ふんだ？ あれは決していい世帯持になれつこなしだ、あれはお洒落よりほか能なしなんだからなあ。いや、もう澤山だ！ 馬鹿な眞似はそろそろいい加減にやめていい頃だ。」

しかし、鍛冶屋がきつぱり肚を決めようとした途端に、悪魔が彼の目の前にオクサーナの笑顔をちらつかせた。娘は嘲るやうに、『さあ、ヅクーラ、女王様の靴を取つておいで、あんたのお嫁になつて上げるから！』と云つてゐる。彼の心はまた波立つてきた、彼はもうオクサーナのことしか考へなかつた。

コリヤーダを祝ふ人々の群れは、若い衆と娘達と別々になつて、通りから通りへ急いで行つた。けれど、鍛冶屋はとぼとぼと歩みを運ぶのみで、何一つ目には入らなかつた。前には人一倍好きだつたこの楽しい行事に、自分も加はらうとはしないのであつた。

その間に、悪魔はもう本腰を据ゑてソローハにいちやついてゐた。ちやうど陪審員がお寺の奥さんの前でして見せるのと同じやうな御面相をしながら、女の手を接吻したり、胸に手を當てたり、溜息をついたりしながら、もしお前さんがわしの戀を叶へてくれなかつたら、いはゆる思ひを遂げさせてくれなかつたら、わしは何をしでかすか分りはしない、身投げして死ぬか、それともいきなり魂を地獄の火に抛り込むか……ソローハも別にさう情なくはしなかつた。それに周知のごとく、悪魔とは仕事のお仲間同志である。それに彼女は男だちにぞろぞろ後を追ひ廻されるのが好きで、相手なしでゐることは滅多になかつた。しかし今夜はとにかく一人で過すつもりでゐた。といふのは、村の重立つた連中がみんな補祭のところへ蜜飯をよばれに行つてゐたからである。けれども、すつかり思はくが違つてしまつた。悪魔が自分の要求を提出するかしないかに、突然村長のどら聲と戸を叩く音が聞えた。ソローハは戸を開けに駈け出し、悪魔は素ばやくそこに轉がつてゐる袋の中へもぐり込んだ。

村長は帽子の雪を拂ひ落し、ヲートカの杯をソローハの手から受け取つて飲み干すと、吹雪が持ち上つたので補祭のところへ行くのをやめ、この家の灯影が目に入つたのから思ひついて、今



晩はソローハと二人で過すつもりで、こちらへやつて来た次第を物語つた。

村長がそれだけのことを云ひ終るか終らないかに、戸口を叩く音がして、補祭の聲が聞えた。

「わしを何處かへ隠してくれ。」と村長は囁いた。「いま補祭と顔を合せたくないから。」

ソローハは、このでつぶりした客人を何處へ隠したものかと、長いこと思案してゐたが、とどのつまり炭の入つてゐる一番大きな袋に決めた。炭を樽の中へうつしてしまふと、頑丈づくりの村長は髭も、頭も、帽子も一緒に、袋の中へもぐり込んでしまつた。

補祭は咳をし、手をこすりながら入つて来て、誰もお客がやつて来なかつたので、これこそ勿怪の幸ひと、吹雪をもともせず一寸遊びに来たのだと云つた。さてそれから近々と女の傍へ寄つて、一つ咳拂ひをし、にたりと笑つて、長い指で女の露はな肉附のいい腕に觸つて、

「これは一體なんだね、美しいソローハさん？」と云つたが、その顔つきは狡猾な氣持と自己満足をあらはしてゐた。さう云つておいて、彼は少し後ろへ飛びのいた。

「なんだねつて、なんのことですか？ 腕ぢやありませんか、オシツプ・ニキーフオロキツチ！」とソローハは答へた。

「ふむ！ 腕か！ へへへ！」まづ皮切りは巧く行つたと大恐悦で、補祭は部屋の中を歩き廻りにかかつた。

「ところで、これは何だね、大事なソローハさん？」やはり例のごとき顔つきで、又もや傍ちかく寄つて来て、軽く女の襟首をつまみ、また前と同様にちよつと跳び退きさま、彼はかう云つた。

「まるでこれがお見えにならないやうですね、オシツプ・ニキーフオロキイチ！」とソローハは答へた。「襟首ですよ、襟首に頸飾がかかつてるんですよ。」

「ふむ！ 襟首に頸飾か！ へへへ！」と補祭は揉手しながら、また部屋の中を一と廻りした。

「ところで、これは何だね、素晴らしいソローハさん？……」色好みの補祭が例の長い指で、今度は何に觸らうとしたのか知らないが、そのとき突然戸を叩く音がして、コサツクのチューブの聲が聞えた。

「やつ、大變、邪魔が舞ひこんだ！」と補祭はぎよつとして叫んだ。「さあ、どうしたもんだらう、もし見つかつたら、わしのやうな特別の職にあるものが……コンドライト住持の耳に入らうものなら……」

しかし、補祭の心配は別な種類のものであつた。彼は何よりも第一、自分の配偶に知られるのが怖かつたのである。何分この女房はそれでも物凄い腕つぶしで、亭主の長髪を掴んで引き廻すのだから、さしにも多かつた毛もしよぼしよぼになつてしまつた。



「後生だ、心のやさしいソローハさん！」と彼は全身を慄はせながら云ふのであつた。「お前さんの心根のやさしさと云つたら、ルカ傳の第十三……第十三章にもある通り……戸を叩いてる、本當に叩いてる！ ああ、どこぞへ隠しておくれ。」

ソローハはもう一つの袋から炭を樽へうつした。補祭はあまり幅のない體を袋の中へもぐり込ませ、一ばん底に鎮座したが、その上にはまだ袋半分くらゐの炭を入れることが出来さうだつた。

「今晚は、ソローハ！」とチューブは中へ入りながら挨拶した。「お前、まさか俺が來ると思つてなかつたかも知れないな、え？ 本當に思つてゐなかつたらう？ もしかしたら、お邪魔だつたかも知れないな？……」とチューブは顔に楽しい意味ありげな表情を浮べて、言葉をつづけたが、その表情たるや、自分の鈍い頭を一と拵りして、何か面白い皮肉な洒落を吐いて見せるぞ、といふ前觸れなのであつた。

「もしかしたら、お前はここで誰かと巫山戯てたんぢやないかな！……もしかしたら、もうちやんとお前誰かを匿したんぢやないかな、え？」かう云ひながら、自分の皮肉に有頂天になつて、チューブはからからと笑ひ出した。が、その實ところの中では、ソローハに實意を捧げてもらつてゐるのは乃公一人だぞと、大得意なのであつた。「おい、ソローハ、ここで一つフォートカを出

して貰はう。あの忌々しい凍てのお庇で、喉が凍つてしまつたやうな氣がする。クリスマスの前夜だといふのに、神様もひどい荒天を授けて下すつたもんだよ！ どうだつた、あの荒れやうは、え、ソローハ、あの荒れやうはどうだつた……そら、手がこちこちにかじかんで、外套の釦もはづせやしない！ いやはや、えらい吹雪だつた……」

「開けてくれ！」といふ聲が、戸を叩く音と一緒に戸外から聞えてきた。

「誰か戸をたたいてる。」とチューブは手を止めて云つた。

「開けてくれ！」と前より更に烈しい勢で叫ぶ。

「あれは鍛冶屋だ！」とチューブは帽子に手をかけながら云つた。「おい、ソローハ、俺をどこかへ始末してくれ。あの忌々しい悪黨と金輪際顔をあはせたくないんだ。ええ、あの悪魔の申し子め、やつの方の眼の下に禾堆ほどの大きさの腫れものが飛び出してくれるといいんだ！」

ソローハは自分からもう吃驚仰天して、氣でも狂つたやうに慌て出した。そして夢中になつてしまつて、もう補祭の入つてゐる袋の中へもぐり込むやうにと、チューブに合圖した。不運な補祭は、重たい大男がほとんど自分の頭の上に載つかつて、こちこちに凍つた長靴が両方のこめかみに當つても、咳一つ呻き聲一つ立てて痛みを表明する勇氣がなかつた。

鍛冶屋は一ことも物を云はずに入つて來た。そして帽子もぬがないで、ほとんど倒れんばかり



に床几の上へ腰をおろした。彼がひどく不機嫌なのは、ありありと目に見えてゐた。

ソローハが彼の入つた後の戸締りをしようとした丁度その時、又もや誰か戸を叩く音がした。それはコサツクのスヴェルブイグーズだつた。この男に至つては、もう袋の中へ匿すわけに行かなかつた。そんな袋はどこにも見つからないからで。彼は村長よりも肥つてゐるし、チューブの相棒より背が高いのである。そこでソローハは彼を菜園へつれ出して、云分をとつくり聞くことにした。

鍛冶屋は遙かに聞えて来るコリヤードの歌に時をり耳を傾けながら、わが家の隅々をぼんやりと見廻してゐたが、その中にふと袋に目が止つた。

『何だつてあんなところに袋がごろごろしてるんだ？ もう疾づくに片づけておかなけりやらない筈だつたのに。あの馬鹿げた色戀三昧で、俺はすっかり腑抜けになつちまつた。明日はお祭だつていふのに、家の中にやまだ色んなものがごてごて置きつ放しになつてるなんて。鍛冶場の方へ持つて行つとかうー』

さう云つて、鍛冶屋は大きな袋のそばに蹲み、しつかりと縛り直して、肩に擔ぐ身構へをした。しかし、彼の心が何處とも知れず彷徨つてゐるのは、一目して明らかであつた。さもなければ、袋を縛つた紐が頭の毛に食ひ込んだとき、チューブがしゆつと云ふやうな聲を立て、頑丈づ

・くりの村長がかなりはつきり吃逆をしかけたのが、鍛冶屋の耳に入つたはずなのである。

「一體あのやくざなオクサーナのことが、俺は頭ん中から叩き出せないのか？」と鍛冶屋は獨りごちた。「あんなやつのは考へたくないのに、どうも考へられて仕方がない。まるでわざと意地悪みたい、あれのことばかり考へられるのだ。物思ひつてやつは人に逆らつて胸に浮んで来るが、これは一體どうしてだらう？ ええ、忌々しい！ なんだか袋が前よか重くなつたやうだぞ！ こん中にやきつと炭のほかに、まだ何か入つてるに違ひない。俺もいい阿呆だわい！ 今は何もかも前より重い氣がするのを、俺はとんと忘れてゐた。以前は五コペイカ銅貨でも馬蹄鐵でも片手で曲げて、また伸すことが出来たもんだが、今ぢや炭袋さへ持ち上げられないなんて。その中にやがて風に吹かれても倒れるやうになるだらうよ……。」

「いや、」暫く無言の後、元氣をふるひ立てて、彼は叫んだ。「俺はいつたい女の腐つたのか！ 誰にだつて俺を馬鹿にするやうな眞似はさせないぞ！ こんな袋なんか、よしんば十あつたつてみんな引つ擔いでみせる。」と彼は大の男が二人かかつてもち上りさうもない袋を、勢よく肩に載せた。「ついでにこゝも持つて行け。」と小さい方の袋も持ち上げながら、彼は獨りごとをつづけた。その袋の底には、悪魔が丸く蹲まつて隠れてゐたのである。

「こん中にや、たしか商賣道具を入れておいたつけ。」



さう云つて、彼は口笛で小唄を歌ひながら家を出て行つた。

わしは女房を可愛がれない因果もの

通り通りの歌、高笑ひ、叫び聲は、いよいよかしましく響きわたつた。群集の雑踏は、近在の村々から出て来た人々を加へて、ますますひどくなつて行つた。若い衆どもは思ふ存分ふざけたり暴れたりした。コリヤーダの間々には、よく何かしら新しい歌が聞かれた。それは若いコサツクの誰彼が即興につくつたものである。時には不意に群集の中からコリヤーダの代りに、<sup>\*</sup>シチエドロフカを持ち出して、喉も張り裂けんばかりに歌ひ出した。

シチエドロフカ、ヴェドロフカ

麥の團子を頂きやせう

<sup>カシヤ</sup> 粥をほんのぼつちりと

腸詰をちよいと一とつ切れ

崩れるやうな笑聲がこの飄輕者の勞に酬いた。小窓が開いて瘠せた老婆の手がぬつと差し出され（いま家に残つてゐるのはかうした老婆や、貫祿を守る老人ばかりだつた）、腸詰や肉饅頭が布施されるのであつた。若い衆や娘たちは我おくれじと袋をさし出しては、獲物を争ふのであつた。ある所では、若い衆達が四方八方から狙ひ寄つて、娘の群れを取り圍んでしまつた。どつと起る叫び聲、騒がしいもの音。雪の塊りを投げつけるものもあれば、ありとあらゆるもの詰まつてゐる袋を引つたくるやつもある。又ある所では、娘達を通りがかりの若い衆に足を出して躓かせる、すると男は袋もろともすつてんころりとつんのめる。かうしてみんなは、一晚中ぶつ通しに浮かれ騒ぎかねない有様だつた。しかもその夜は、まるで詭へたやうに晴れわたつてゐるではないか！ 雪の反射で月光が一入あかるく思はれる！

鍛冶屋は例の袋を擔いだまま歩みを停めた。彼は娘達の群の中にオクサーナの聲と、やさしい笑ひが聞えるやうに思はれた。すると、體ぢゆうの筋が慄へおののいた。彼は袋を地べたへ抛り出して（その勢があまり烈しかつたので、袋の底にゐた補祭は思はず唸り聲を立てるし、村長は遠慮會釋なしに大きな吃逆りをした）、小さな袋一つだけ肩に載せ、娘達の群れの後を追ふ若い衆達に交つてふらふらと歩き出した。娘達の群れからはオクサーナの聲が聞えて來るのであつた。

\* 大晦日の晩に歌つて菓子その他のものを貰ふ習慣がある。



『ああ、あれがさうだ！　まるで女王様のやうにすつと立つて、黒い眼をきらきら光らせてゐる。誰か様子のいい若い衆が、何やらあれに話をしてゐる。あれが笑つてるところを見ると、きつと面白いことに相違ない。もつとも、あれは何時も笑つてゐるがな。』

鍛冶屋は何時しか我ともなしに群集を押し分けて、オクサーナの傍へ寄つて行つた。

「あら、ヅクーラ、あんたそこにゐたの！　御機嫌よう！」と美女はいつもの笑顔で聲をかけた。この笑顔を見ると、ヅクーラは危く気が狂ひさうになるのであつた。「どう、コリャーダの貰ひ物はたくさんあつた？　あら、まあ、何て小さな袋でせう！　ときに、女王様のお穿きになる靴は手に入つて？　手に入れて頂戴、ほんとにお嫁さんになるわよ……」さう云つて高々と笑ひながら、娘達の群れと一緒に走つて行つた。

鍛冶屋は釘づけにされたやうに、じつと一つところに立つてゐた。

「だめだ、やれきれない、これ以上我慢出来ない……」到頭かれはかう云つた。「しかし、どうも、はや、何て美しいんだらう、あの女は、凄いくらゐるだ！　あの眼附、あの物の云ひよう、何から何まで素ばらしい、俺の胸を焼くやうだ、いや、本當に焼くんだ……いや、もう意地にも我慢が出来ない。もういい加減けりをつけなくちやなるまい。一と思ひに死んでやれ！　氷穴<sup>\*</sup>へ行つて飛び込んぢまはう、さうしたら萬事おさらばだ！」

そこで、彼は決然たる足どりでぐんぐんと歩き出した。娘達の群れに追ひつくと、オクサーナと肩を並べながら、しつかりした聲で云つた。

「さよなら、オクサーナ！　誰でも好きな人を探してお婿さんにするがいい、誰でも氣に入つた男を玩具にするがいい。俺はもうこの世でお目にかからないからな。」

美女はびつくりしたやうな顔つきで、何か云ひたさうにしたが、鍛冶屋は片手を振つて、駈け出した。

「何處へ行くんだい、ヅクーラ？」と若い衆達は駈けゆく鍛冶屋を見て、大きな聲で問ひかけた。

「みな衆、さよなら！」と鍛冶屋はそれに應へて叫んだ。「縁があつたら又あの世で會はうよ。この世ぢやもう一緒に遊ぶわけに行かないんだ。さよなら！　どうか悪く思はないでくれよ！　それから住持のコンドラトさまに、罪深い俺の魂を弔つてお經の一つも讀んでほしいと云つてくんな。奇蹟の聖者ニコライ様と聖母マリヤ様のお像にお供へする蠟燭の様子は、申譯ないことだが、俗世の用事に紛れてつい描けなかつた。俺の長持に藏つてあるものは、そつくりお寺へ寄進してくれ。ぢや、あばよ！」

\* 川の氷を割つて、水を汲むために設けた穴



これだけのことを云つてしまふと、鍛冶屋はまた袋を肩にして駈け出した。「やつめ氣がふれたんだ！」と若い衆達は云つた。「もうあれは命がないよ！」と通りかかりの老婆が恭しい聲で呟いた。「行つてみんなに話してやりませう、鍛冶屋が首を縊つて死んだいきさつを！」

その間にブックラは、通りを幾つか駈け抜けると、息をつぐために足を停めた。

『だが、それにしても、俺は何處へ夢中になつて飛んでつてるんだらう？』と彼は考へた。『まるで何もかも駄目になつてしまつたみたいにさ。もう一つ手だてがあるわけだ、試してみよう。ザポロ<sup>\*</sup>ージェエから来たどん腹のパツニークんとこへ行つてみよう。あの男は悪魔といふ悪魔を知つてゐて、思ふことを何でも呷へてくれるつて云ふ話だ。よし、行つてやらう、どつちにしたところで俺の魂はどうせ破滅なんだから！』

その時、長いあひだ身動きもせず袋の中におとなしくしてゐた悪魔は、嬉しさのあまり雀踊りした。けれども鍛冶屋は、何かの拍子に手で袋に觸つて、それで袋が動いたものと思ひ込み、遅ましい手で袋をぽんと叩き、肩の上に揺り上げて、どん腹のパツニークのもとへ赴いた。

このどん腹のパツニークは、曾ては紛れもないザポロージェエ・コサツクであつたが、そこから追つ拂はれたのか、それとも自分から逃げ出したのか、その邊のところは誰も知つたものがない。もう久しい以前から、ものの十年、あるひは十五年も、このチカンカに住んでゐる。初めのうち、彼は、彼も真正銘のザポロージェエらしい生活振りをしてゐた。仕事といつては何一つせず、一日の四分の三は寝てくらし、草刈人夫六人前くらゐのものを食べ、一度にかれこれ一升酒をべろつと飲むのだ。尤も、それ位のものを入れる場所は充分にあつた。何故なら、パツニークは背こそ高くなかつたけれども、幅の方はかなりづんぐりしてゐたからである。おまけに思ひ切つてだぶだぶした廣ズボンを着いてゐるので、どんなに大股に歩いても足が見えない程で、まるで酒樽が町を轉がつて行くやうであつた。恐らくこれがために、どん腹といふ綽名を頂戴することになつたのだらう。彼が村へ來てから幾週間も経たない中に、早くもこの男が魔法使だといふことを誰知らぬものもないやうになつた。ちよつと誰か病氣すると、早速パツニークが呼ばれる。そして、パツニークが何かくしゃくしゃと口の中で唱へると、忽ち病氣は拭つたやうに癒つてしまふのだつた。たまたま何處かの貴族が、腹を空かして魚をががつ食べたために、小骨を喉に立てるやうなことがあると、パツニークが上手に背中をとんと叩く。すると小骨は、貴族殿の喉を

\* ドネーブル河の早瀬の南方に當る地域、中世ザポロージェエ・コサツクの勢力圏であつた。



いささかも痛めることなく、行くべきところへ行つてしまふ。近頃あまり何處にも彼の姿を見かけないやうになつた。それは彼の物臭のせゐかも知れないが、あるひは戸口に身を潜らせるのが年々困難になつて来るからかも知れない。さういふ譯で、村人はもし彼に用事があつたら、こつちから推参しなければならぬのであつた。

鍛冶屋はいくらか氣隠れしながら扉を開けた。と、床の上に胡座をかいてゐるパツニークの姿が目に入つた。その前には小さな樽が据ゑてあり、その上には小麥團子の皿が載つてゐた。この皿は丁度かれの口と同じ高さになるやうに置かれてあつた。彼は指一本うごかさな、ちよつと首を皿の方へ傾けて、ちよつと汁を啜り、時には唇で團子を唾へるのであつた。

『いやあ、』とヅクーラは肚の中で考へた。『この先生はチューブよかもつと物臭だ。チューブは少くとも匙で食べるが、この先生ときたら手を上げるのさへ大儀なんだからな!』

パツニークはすつかり小麥團子に氣を取られてゐたと見え、鍛冶屋が入つたのに一向こころづかないのであつた。ヅクーラは鬨を跨ぐか跨がないかに、いとも慇懃な會釋をした。

「パツニークさん、一つ折入つての願があつて参りました!」とヅクーラはもう一度お辭儀をしながら云つた。

肥つちよの。パツニークは頭を上げて、又もや小麥團子を食べはじめた。

「あなたは、その、お腹立ちになつては困りますが……」と鍛冶屋は元氣を揮ひながら云ひ出した。「私がこんなお話を持ち出したのは、決してあなたに失禮をしようなどと云ふ下心があるからではございませんが、——あなたは幾らか悪魔と親類同志に當られるのではないでせうか。」

かう云つてしまつてから、ヅクーラは些かぎくつとした。自分の云ひ方は結局やはり露き出し過ぎて、亂暴な言葉が大して和らげられもしなかつたと思つて、いささかぎよつとした。そして、パツニークがいきなり前の樽を皿ごと自分の頭へ投げつけるに相違ないと覺悟して、一寸わきの方へ身を躲し、小麥團子の熱い汁が顔へはねかゝらぬやうに袖屏風をした。

しかしパツニークはじろりとこちらを見たりで、又小麥團子を食べにかかつた。

これに元氣づいた鍛冶屋は、思ひ切つてあとを續けた。

「パツニークさん、さういふわけでお邪魔に上つたのです。どうかあなた、パンにしろその他の營養物にしろ、何不自由なく裕かにお暮らしますやう。(鍛冶屋は時々話のあひだに最新流行の言葉を挟むのに妙を得てゐた。これは彼が百人長の擧に模様を描きに行つた折、ポルタヅで習ひ覺えたのである)。私は罪の深い人間ですから、身の破滅の時がやつて來たのでございませす! もうこの世で何一つ私を助けてくれるものはありません! かうなれば、なるやうになれと云ふ氣になつて、悪魔にでも加勢を頼まうと肚を決めましたんで。どうでせう、パツニークさ



ん、」相手がいつまで経つても黙りこくつてゐるのを見て、鍛冶屋は問ひかけるのであつた。「いつたい私はどうしたものでございませう？」

「悪魔に用があるのなら、悪魔のそこへ行つたらいいぢやないか！」と相手には目もくれないで、相變らず小麦團子を片づけながら、パツニュークは答へた。

「つまり、それだからこそこちらへ伺つたわけで。」と鍛冶屋はぺこぺこお辭儀をしながら云つた。「あなたを措いては、やつのところへ行く道を知つたものはあるまいと思ひまして。」

パツニュークは一ことも物を云はないで、残つた小麦團子を平らげてゐる。

「どうかお願です、パツニュークさん、どうか否だと仰しやらないやうに！」と鍛冶屋は迫つた。

「豚肉でも、腸詰でも、蕎麥粉でも、それから麻布でも、黍でも、そのほか何であらうとも、もしお入り用でしたら、決して物惜しみはしません……かういふ場合、普通よくやることですからね。せめて、その、なんですな、やつのところへ行く道筋をあらまし教へて下さるだけでも。」

「悪魔を自分の肩に背負つてる人間が、何もさう遠方まで御足勞には及ぶまいて。」とパツニュークは位置を變へないで、平然とかう云つた。

ヅクローラは眼を圓くして相手を見つめた、まるでその顔に今の言葉の説明でも書いてあるかのやうに。『この男いつたい何を云つてるんだ？』と彼の顔は聲もなくこんな疑問を發してゐた。

そして半分あいた口は相手の最初の一言を、小麦團子のやうに呑み込まうと構へてゐるやうであつた。

しかし、パツニュークは黙りだつた。

その時ふとヅクローラが気がついて見ると、パツニュークの前には小麦團子も樽もなくなつて、その代り床の上に木の大皿が二つ置いてあつた。一つは肉入團子がいっぱい盛つてあり、いま一つには酸乳が入つてゐた。鍛冶屋の眼も頭脳もこの二皿に集中されたのである。『一つ見てやりませう。』と彼は獨りごちた。『パツニュークがこの肉入團子をどうして食べるか？ 奴さん身を屈めようとしないだらうが、それかと云つて、小麦團子のやうな具合には行かない。肉入團子は先づはじめに酸乳をつけなくちやならんからな。』

彼が肚の中でさう考へるか考へないか、パツニュークは口をわんと開けて、肉入團子を見つめ、それから更に大きく口を開いた。その途端、肉入團子が一つ皿から跳り上つて、酸乳の中へびしやりと飛び込み、くるりと裏返しになつたと思ふと、今度は上へ跳ねあがつて、見事に口の中へ入つた。パツニュークはそれを平げて、また口をわんと開くと、肉入團子は前と同じ順序で彼の口へ飛びこんだ。彼の骨折りと云つては、ただ嚙んで飲み込むことだけであつた。

『へえ、なんて不思議なことがあるもんだ！』と鍛冶屋は驚きのあまりぽかんと口を開けて考へ



た、とその拍子に、肉入團子が自分の口へも飛び込んで来て、口のはたに酸乳スィーツがべつたりついたのに心づいた。彼は肉入團子を拂ひのけて唇を拭ひ、この世には何て奇態なことがあるものだ、それに悪魔といふやつは人間に何て素ばらしい業わざを教へ込むものだ、とつくづく感に堪へながら、自分の力になつてくれるのはパツュークよりほかにない、と考へるのであつた。

『もう一度腰を低くして、よく合點の行くやうに教へて貰はう……だが、こいつあいけない！今日はお精進の蜜飯を祝ふ日なのに、やつは肉入團子を食べてやがるぞ、こんな腥さもの！本當に俺はなんて云ふ間拔だ、こんなとこにぼんやり突つ立つて、罰當りの卷添へを食ふところだつた！こりや逃げ出さなけりや！……』と信心ぶかい鍛冶屋は一目散に外へ飛び出した。

ところが、例の袋の中に隠れて、もう前からほくほくものでゐた悪魔は、こんなうまい獲物に逃げられては堪らぬと、鍛冶屋が袋を下ろすが早いか、いきなり中から飛び出して、彼の頸筋へ馬乗りになつた。

鍛冶屋は全身に冷水を浴びたやうな氣がした。驚愕のあまり眞蒼になつて、どうしていいやらも分らず、十字を切らうとした……が悪魔は犬のやうな鼻つ面を鍛冶屋の右の耳へ寄せて囁いた。

「おい、俺はお前の友達だよ。大事な仲間のためならどんな事だつてするよ！金だつて幾らで

もほしいだけやる。」と彼は左の耳に囁くのであつた。「オクサーナは今夜のうちにこつちのものにして見せるから。」と今度は鼻面を右の耳へ廻して囁いた。

鍛冶屋はじつと立つたまま思案してゐた。

「よし来た、」と彼は遂に口をきつた。「さういふお禮があるなら、俺はお前の相棒になつてもいしゃー！」

悪魔は思はず両手を拍つて、嬉しまぎれに鍛冶屋の頸の上でびよんびよん躍りあがつた。

『今度こそ鍛冶屋も綱にかかつたぞ！』と悪魔は心に思つた。『貴様があんな繪で俺達仲間を馬鹿にしやがつた怨みを、今度こそ晴らしてやるんだから！村中でいちばん信心ぶかい男が俺の手の中に落ちたと聞いたら、仲間の連中がなんと云ふだらう？』

そこで悪魔は、地獄に棲む尻尾を垂らした同族にからかはれて、仲間でも一番の智恵者と云はれてゐた跛の悪魔が地團太を踏む有様を想像して、嬉しさのあまりからからと笑ひ出した。

「おい、ヅクラー！」と悪魔は、逃げ出されはしないかと危ぶむやうに、依然として鍛冶屋の頸から下りないで、きいきい聲でかう云つた。「お前も心得てゐるだらうが、契約書なしぢや何一つ取引はしないもんだよ。」

「合點だ！」と鍛冶屋は答へた。「話に聞くと、お前さん方はかういふ場合血判をするさうだな。



待つてくれ、今ポケットから釘を出すから！」

と云つて、彼はうしろへ手をまはし、いきなり悪魔の尻尾をつかんだ。

「おいおい、冗談はよせや！」と悪魔は笑ひながら叫んだ。「さあ、澤山だよ、もう巫山戯るのは澤山だ！」

「いい子だからちよつと待てよ！」と鍛冶屋は叫んだ。「一つこんなのはどうだい？」さう云ふと共に、彼は十字を切つた。すると、悪魔は仔羊のやうにおとなしくなつた。「待つてゐな、」と云つて、彼は尻尾を持つて悪魔を地べたへ引き摺り下ろした。「よくも貴様は村の善人たちや正直な基督教徒をそのかして、罪つくりを教へやがつたな。」

かう云ひながら、鍛冶屋は悪魔の背中に馬乗りになつて、十字を切らうと手を上げた。

「どうぞお慈悲だ、ヅクーラ！」と悪魔は憐つばい聲で呻いた。「お前の云ふことは何でもしてやるから、どうか勘忍してくれ、その恐ろしい十字だけは切らないでくれ！」

「へん、この忌々しい獨逸つぼめ、今度はさういふお念佛を唱へ出したのかい！ さあ、今こそ俺はどうしたらいいか分つたぞ。これからすぐ俺を乗せて飛んで行け！ わかつたか？ 鳥のやうに早く飛ぶんだぞ！」

「何處へ？」と不運な悪魔は訊ねた。

「ペテルブルグだ、まつすぐに女王様のところへ行くんだ！」と云ふが早いか、鍛冶屋は自分の體が空中へ上つてゆくのかを感じて、恐怖のあまり身うちの痺れるのを覺えた。

オクサーナは鍛冶屋の奇怪な言葉にとかく思ひわづらひながら、長いことじつと立ち盡してゐた。早くも内部の聲が、ヅクーラに對する自分の仕向け方があまり酷すぎたことを、彼女に囁くのであつた。

『もしあの人が本當に何か恐ろしいことを仕出來したらどうしよう！ ひよつとしたら、やけつぱちになつてほかの娘を情人にして、その娘を村一番の美人だなんて面當てに云ひ出すかも知れやしない！ でも、そんなことはない、あの人はあたしを好きなんだから。だつてあたしはこんなに綺麗なんだもの！ どんなことがあつたつて、あたしをほかの女に見變へたりなんかしやしない。あの人は巫山戯て、お芝居をしてるんだわ。十分と経たない中に、きつとあたしの顔を見にやつて來るに違ひないわ。あたしは全く氣が強すぎるんだ。まあ澁々といつたやうなふりをし、あの人に接吻さしてやらなくちや。さぞ喜ぶことだらうねえ！』

さう考へて、輕はづみな美女は早くも友達と遊び興じるのであつた。



「あら、」と娘達の一人が云つた。「鍛冶屋つたら袋を忘れて行つたわ。ごらんない、何でもの  
凄袋でせう！ あの人のコリヤードのやり方は、あたし達とは違つてると見えるわ。この中に  
はきつと羊肉がまる一頭の四分の一くらゐ入つてるし、腸詰やパンなんか數へきれないに相違な  
いわ。素ばらしいわね！ このクリスマスの間ぢゆう鱈腹食べられるわ。」

「これは鍛冶屋の袋？」とオクサーナが口を入れた。「ぢや、少しも早くあたしの家へ持つて行  
つて、中に何が入つてるかよく見てやりませうよ。」

一同は歡聲を上げて、この提言に賛成した。

「でも、あたし達にや持ち上げられないわよ！」と娘達の群れは袋を動かさうと力んでみたが、  
忽ち一齊にかう叫んだ。

「ちよつと待つて。」とオクサーナは云つた。「一つ走り駈け出して手櫓を取つて來ませう。そし  
て櫓に載せて運びませうよ！」

娘達は手櫓を取りに駈け出した。

捕虜になつた連中は、袋の中にじつとしてるのが辛氣くさくて堪らなくなつた。もつとも、補  
祭は指先でかなり大きな穴をあけたので、もしその場に人がゐなかつたら、何とかして這ひ出す  
工夫がついたかも知れないが、大勢人がゐる前でのこのこ這ひ出して、もの笑ひになるのは……

と思ふとその元氣もなく、補祭は無遠慮なチューブの長靴の下で微かに唸りながら、暫く待つこ  
とに肚を決めた。當のチューブも自分の下に何か妙なものがゐて、おそろしく坐り心地が悪いの  
で、これも劣らず自由に懂れてゐた。けれども、現在わが娘の申し出を聞くや否や、チューブは  
すつかり安心して、もう這ひ出さうなどと思はなかつた。とにかく自分の家まで行きつかなければ  
ならない、道のりは百歩か、せいぜい二百歩くらゐなものだから、外へ出たら早速身づくろひ  
して、外套の釦もかけ、帯も締め直さなければならぬ、——いや、中々大變だぞ！ あつ、おま  
けに頭巾はソーハのそこへ忘れて來たつて。兎に角、娘達に手櫓で運んでもらはず、とこんな  
風に思案したのである。

しかし、チューブの目算はがらりと外れてしまつた。娘達が手櫓を取りに駈け出した間に、一  
人の瘠せぎすな男が不機嫌な様子で居酒屋から出て來た。居酒屋のおかみがどうしても貸<sup>つ</sup>て飲ま  
してくれなかつたのである。で、今に誰か信心ぶかい貴族か何かやつて來て、一杯ふるまつてく  
れるだらうと當てにして、居酒屋で網を張つてゐた。ところが丁度意地わるく、貴族連はみんな  
我家に引き籠つて、立派な基督教徒にふさはしく、家族に圍まれて蜜飯を食べてゐたのである。  
ああ世も末になつたものだど慨嘆し、血も涙もない猶太生れのおかみを呪ひながら歩いてゐる中  
に、かの袋に行き當つた。男は吃驚して立ちどまつた。



「おやつ、誰か知らんがどえらい袋を道ばたに押つぽり出して行つたもんだなあ！」と邊りを見廻しながら云つた。「この中にやきつと豚肉も入つてるに違ひない。コリヤードでこれだけ色々なものを貰ひ集めるとは、どいつか知らんが大した福が舞ひ込んだもんだなあ！なんて物凄い袋だらう！ よしんば蕎麥パンと小麦菓子ばかりが詰まつてゐるにしたところで、それだつて相當なものだ。あの猶太女め、平パン一つ持つて行きやヲートカ一杯飲ましてくれるからな。人に見つからない中に、早く擔いで行くことだ。」

そこで男は、チューブと補祭の入つてゐる袋を、よいしよと肩に載せたが、これは少々重すぎるなと感じた。

「いや、一人ぢや重くつて擔ぎ切れないや。」と男は云つた。「ああ、丁度お誂へむきに機織りのシャブレンコがやつて来る。やあ、今晚は、オスターブ！」

「今晚は。」と機織りは足を佇めて答へた。

「どこへ行くんだね？」

「どこつてことはねえ、足の向く方へ歩いてるだけよ。」

「一つ手をかしてくれんか、よう、袋を運んで行くんだから！ 誰かコリヤードで貰ひ集めたやつを、道のまん中へ抛り出して行つたんだ。備けは山分けと行かうぢやないか。」

「袋だつて？ いったい何の袋だい？ 白パン入りか、それとも平パン入りか？」

「なに、なんでも入つてるだらうと思ふよ。」

そこで、二人は手早く編垣から手頃の棒を抜き取り、その上に袋を載せて、肩に擔いだ。

「さて何處へ擔いで行つたものだらう？ 居酒屋にするかな？」と機織りは途々訊ねた。

「そこさ、俺も居酒屋にしようかと思つたんだが、どうもあの忌々しい猶太女が本當にしないで、何處かで盗んだとでも思ふかも知れないからな。それに、俺はたつた今あすこから出て来たばかりなんで。一つ俺んちへ擔ぎ込まうぢやないか。誰も邪魔になるやつはゐやしない、婢あも丁度留守だし。」

「ふん、たしかにかみさんは留守かい？」と用心ぶかい機織りは問ひ返した。

「有難いことに、俺はまだ筆碌しちやゐねえよ。」と男は云つた。「婢あなんかのゐる所へ、どう間違つたつて歸るはずがないぢやないか。あいつは近所の女房連と一緒に、夜明頃までぼつつき歩くに決つてらあ。」

「誰、そこにゐるのは？」二人の仲間が袋を擔いで来て、入口でこそそそしてゐる物音を聞きつけて、女房は戸を開けながら大聲に訊いた。

男は思はず棒立ちになつた。



「さよう、こいつは！」と機織りは呆氣に取られて呟いた。

この家の女房は世間に珍しくない難物の一人だった。亭主と御同様に、ほとんど年中うちを留守にして、一んち仲のいい女房連や金持のお婆さん達のところを遊び廻つて、お世辭を並べては御馳走にありつき、無遠慮にばくつくのが得意で、朝になると亭主と掴み合ひの喧嘩をする。と云ふのは、一日の中この時間でなければ、夫婦の顔を合す時がないからである。この夫婦の家は村役場の書記のズボンより二倍も古く、屋根は方々藁がなくなつてゐるし、編垣はほんの形骸をとどめてゐるに過ぎない。何故なら、村の者は誰一人として犬を追ふ用意に杖を持つて出るものがない、つまりこの男の菜園に通るかかつたら、その編垣からどれでも好きな棒つきれを引き抜けると當て込んでゐたからである。爰爐は三日くらゐ打つ續けに焚かないのが普通であつた。この良妻どのは近所の人から何を貰つても、なるべく亭主の目にかからぬやうに隠してしまふし、亭主の儲けでまだ飲みしろにする暇のなかつたものは、遠慮會釋なしに取り上げてしまふのが決りだつた。亭主は亭主で、いつもはのほほんでゐる癖に、自分の獲物を女房に譲るのは大嫌ひなので、大抵いつも顔に引つ掻き傷をつけたまま家を飛び出してしまふ。すると山の神は憐つぽい聲を出しながら村中を歩き廻つて、宿六が横暴でひとを酷い目にあはせた次第を、婆さん連に吹聴するのであつた。

さて、機織りと亭主がこの思ひがけない出現のため如何に度膽を抜かれたかは、想像するに餘りがある。二人は袋を下ろして、我とわが身で庇ふやうにしたり、外套の裾で隠すやうにしたけれども、最早や時すでに晚かつた。女房はもう老眼でかなり視力が弱つてはゐたものの、しかし袋には逸早く氣がついた。

「おや、これは大したもんだね！」と女房は云つたが、その様子には隼の喜びと云つたやうなところがあつた。「これだけコリヤードで貰物をしたとは、大したもんだねえ！ 世間の人はいつもこんな風にしてゐるのさ。でも違ふね、わたしの睨んだところぢや、これは何處かで搔つ拂つて來たらしい。さあ見せておくれ、よう、聞こえないのかい、その袋ん中を今すぐ見せておくれつたら！」

「禿頭の鬼にでも見せて貰ふがいい、俺ら知らねえよ。」と亭主はちよつと見得を切つて云つた。「お前さんの知つたことぢやありやしない。」と機織りは云つた。「これは俺達がコリヤードで貰つて來たんで、お前さんぢやないからな。」

「いいえ、見せなきや承知しないよ、この飲んだくれのやくざもの！」と女房は喚いて、のつぽの亭主の下頤を拳固で一つ食らはせ、袋の方へ遮二無二押して行つた。しかし機織と亭主は雄々しくも袋を防衛して、女房を尻込みさせた。二人がほつと息をつく間もなく、女房は早くも火搔



きを手にして入口へ駆け出した。そして、亭主の手と機織の背中に素早く火掻きの一撃を食はせて、忽ち袋のそばに立ち塞がった。

「何だつてあの女を袋のそばへ寄せつけたんだい？」

「へん、俺が寄せつけたんだつて？ お前こそどうして寄せつけたんだい？」と亭主は泰然として云った。

「お前んとこの火掻きはどうかやら鐵らしいな！」暫く無言の後、機織りは背中をさすりながら云った。「うちの嬢あは去年市で火掻きを買つて、二十五コペイカ拂つたが、あいつは大したことはない……痛かねえよ……」

その間に女房は意氣揚々として、燈明皿を床の上に置き、袋の紐を解いて中を覗いた。

けれども、あれほどはつきり袋を見分けた女房の老眼も、どうかやら今度は見損ひをしたらしい。

「おや、この中にや豚が丸ごと入つてるよ！」と、嬉しまぎれに手を叩きながら、女房は大声に叫んだ。

「豚が丸ごと！ どうだい、豚が丸々一匹はいつてるとよ！」と機織りは亭主を突つついた。

「これと云ふのもお前のせいだぜ！」

「どうも仕方がないさ！」と亭主は肩を竦めながら答へた。

「何が仕方がないんだ？ 何を俺達はぼんやり立つてるんだい？ 袋を取り返さなくちや！ さあ、かかつて行け！」

「さあどいた！ どいた！ これは俺達の豚だぞ！」と機織りは前へ踏み出しながら嗷鳴つた。

「引つ込んでろ、この阿魔、引つ込んでろ！ これは貴様のものとは違ふぞ！」と亭主はじりじりと詰め寄りながら云った。

女房は又もや火掻きに手をかけようとしたが、この時チューブは袋から這ひ出して、たつたいま長い夢から醒めたもののやうに、のびをしながら家の入口の真中に突つ立った。

女房はきやつと叫びながら、両手でスカートをばつとはいた。一同は呆氣に取られて口を開けた。

「何だつて、この馬鹿女め、豚なんて云ふんだ！ これがいつたい豚かい！」と亭主は眼をひん剝いてかう云った。

「へーえ、なんちふ野郎を袋ん中へ抛り込んだもんだらう！」と機織りは吃驚して尻込みしながら云った。「たとへお前が何と云はうと、おら請合つて云ふが、こりや悪魔の仕業にちがひないよ。だつてこいつ、窓から抜け出すことなんか出来やしないぜ。」



「おやつ、こりやチューブだ！」つくづく眺めてゐた亭主は、いきなり叫び聲をあげた。

「ぢや、いつたい誰だと思つてたんだ？」とチューブはにやにや笑ひ笑ひ云つた。「どうだい、素ばらしい洒落をやつてのけたらう？　ところがお前達は、豚肉の代りにこの俺を食つちまふつもりだつたらう？　しかし、まあ待ちな、一つお前達を悦ばすことがある、袋ん中にやまだ何か入つてるぜ。もし豚でなかつたら、きつと仔豚かそれともほかの生きものに違ひない。俺の下で何やらのべつどもぞ動いてゐやがつたから。」

機織りと亭主は袋へとびかかつた、と女房も反対の側から獅嚙みつく、と云つたわけで、又もや立廻りの巻直しがはじまりさうな勢だつたが、そのとき補祭は、もうかうなつたら隠れようがないと見切をつけて、袋の中からのこのこ這ひ出した。

女房は棒立ちになつて、掴んだ足を放した。こいつを持つて補祭を袋から出すつもりだつたのである。

「やあ、また一人出て来た！」と機織りは恐怖の叫びをあげた。「この世の中はまあ何てことになつたんだらう……ああ、頭がくらくらする……腸詰や平パンの代りに、人間を袋ん中へ抛り込むやうになつたんだからなあ！」

「これは補祭だ！」とチューブは誰よりも一ばん度膽をぬかれて云つた。「いやはやどうも！」

それにしてもソローハの腕はえらいものだな！　袋へ入れるなんて……道理で、あの女のところは家ぢゆう袋だらけだつたつけ……今こそ何もかも讀めた。あの女、一つ一つの袋の中に二人づつ男を隠してゐやがつたんだ。ところが俺はお芽出たくも、俺一人だけがあの女に……大したもんだな、あのソローハは！」

娘達は袋が一つ足りなくなつてゐるのを見て、いささか驚いた。

「仕方がないわ、まあこれだけでも澤山だわ。」とオクサーナは云つた。

みんながかりで力を協せ、袋を手籠に載せた。

村長は黙りを決めこんでゐることにした。もし出してくれたのだ、袋を解いてくれなどと囁鳴らうものなら、馬鹿な娘達は袋の中に悪魔がゐるものと思つて、蜘蛛の子を散らしたやうに逃げしまふに相違ない、さうしたら自分は恐らく朝まで道ばたに轉がつてゐなくてはなるまい、——かう分別したからである。

とかくする中に、娘達は仲よく手に手を取つて籠を引きながら、きしきしと軋みを立てる雪の上を旋風のやうに駆け出した。中には、巫山戯半分、手籠に乗つかるものも少くなかつたし、村



長の體に腰をかけるものさへあつた。村長は何もかも黙つて我慢しようと決心した。やがて遂にオクサーナの家へ着き、玄關の戸をさつと開き、高笑の聲とともに袋を家の中へ引きずり込んだ。

「何が中に入つてゐるか、見てみませうよ。」と一同は叫び、先を争つて紐を解きにかかつた。その時、袋の中にゐるあひだ始終村長を惱ましつづけた吃逆りが、急に一層はげしくなつて來た。彼はもう手放して吃逆りをしたり咳をしたりし始めた。

「あれえ、この中に誰か人がゐるわ！」と娘達は一齊に叫んで、驚きまどひながら戸の外へ駆け出した。

「何をばたばたしてゐるんだ？　なんだつてみんな氣狂ひみたいになつて飛出してるんだ？」とチューブが表から入つて來ながら訊ねた。

「あら、お父さん！」とオクサーナは云つた。「袋の中に誰か人が入つてるのよ！」

「袋の中に？　お前達はどこでこの袋を取つて來たんだい？」

「鍛冶屋が道のまん中へ押つぱり出して行つたの。」と娘達は異口同音に云つた。

『ふん、さうか、だから俺の云はないことぢやない……』とチューブは肚の中で考へた。「お前達は何をさう吃驚しなされるんだね？　まあ一つ見てやらうぢやないか。——もしもし、そこなお

人、——名前と父稱で呼ばないけれど、どうか御立腹のないやうに、——さあさ、袋の中から出て來なさいよ！」

村長は這ひ出した。

「あらつ！」と娘達は叫んだ。

『村長までがやつぱりさうなのか。』とチューブは怪訝さうに、村長を頭の天邊から爪先までじろじろ見廻しながら、心の中で考へた。『ちよつ、何てこつた！……え！……』それ以上、何も言葉が出なかつた。

當の村長も負けず劣らず當惑して、なんと口を切つていいか分らなかつた。

「外はきつと寒いだらうな？」と彼はチューブに話しかけた。

「相當の凍でだよ。」とチューブは答へた。「ときに、一つお訊ねするが、あんたは靴に何を塗りなされるね、鷲鳥の脂かね、それともタールかね？」と訊ねたが、彼が云ひたかつたのはさういふことではない。彼がききたかつたのは、「どうだね、村長、どうしてあんたはこの袋ん中へ入りなかつたんだね？」と云ふことだつたが、どうして丸つきり別の言葉が口から出たか、我ながらとんと合點が行かないのであつた。

「タールの方がいいよ。」と村長は云つた。「ぢや、左様なら、チューブ！」と云ひ棄て、帽子を



目深に被つて、ぶいと戸外へ出てしまつた。

「何だつて俺は間拔な、靴に何を塗るかなんて訊いたんだらう！」とチューブは村長の出て行つた戸口を眺めながら獨りごちた。「でもソローハは何て凄腕だ！ あんな大の男を袋の中へ入れるとは！……ちよつ、ふてえ阿魔だ！ それにしても俺は馬鹿だつたなあ……おい、一體あの忌々しい袋はどこにあるんだ？」

「あたし隅つこの方へ抛り込んだわ、あの中にはもう何にもなくつてよ。」とオクサイナは云つた。

「俺はあの手品をよく知り抜いてるんだよ、——もう何にもないだとさ！ さあ、こつちへ寄越せ、その中にもう一人ゐるはずだ！ よつく振るつて見る……どうだ、をらんか？ ちよつ、ふてえ阿魔め！ ちよつと見ると、まるで菩薩様みたいに澄ましやがつて、生ものは口に入れたことがないやうな顔をしてる癖に！……！」

けれども、チューブには勝手に痛癢を吐き散らさせておいて、我々は鍛冶屋の方へ移ることとしよう。何故なら、もう夜は八時過ぎた頃に相違ないからである。

はじめブクローラは恐ろしかつた、殊にもう下界が見えないほどの高みへ昇つて、月のすぐ下を蠅か何ぞのやうに翔んだ時などは、なほさらであつた。もし彼が幾らか首を屈めなかつたら、きつと帽子で月をかすつたに違ひない。けれども暫くすると、彼も元氣づいて来て、もう悪魔をからかふやうにさへなつた。(彼が頸から糸杉の十字架を外して、悪魔のからだへ近づけると、悪魔は嚏をしたり咳をしたりする、それが彼には面白くて堪らなかつた。彼はわざと手を上げて頭を搔いた、すると悪魔は十字を切らうとするのだと早合點して、更に迅く飛翔けるのだつた)。

大空は何處もかしこも明るかつた。白銀いろの軽い霧を融かした空気は透明で、何もかもがまざまざと見分けられた。壺の中に納まつた魔法使が旋風のやうに傍らを飛び過ぎるのも見えれば星が一と塊りになつて眼かくし鬼をして遊んでゐるのも見えた。幽霊の一と群れがわきの方で雲のやうに渦巻いてゐるかと思ふと、月光の中で踊つてゐた悪魔が、仲間の背に馬乗りになつて飛んでゆく鍛冶屋に心づいて帽子を取る。かと思へば、箒に跨つた魔女が用事を済まして家路に急いで行く……そのほか種々さまざまな有象無象に出くわした。みんな鍛冶屋の姿を見ると、いつとき立ち停つてじつと眺めた後、さらに飛行をつづけて己が行く手へ急ぐのであつた。鍛冶屋は大空を絶えず飛んでゐる中に、ふと眼前に一面燈火に包まれたペテルブルグの市が燦然と現はれた。(丁度その時は何かの祝ひでイルミネーションが施されてゐたので)。悪魔は市の關門の遮斷



機を躍り越えるが早い、忽ち馬に化けた。鍛冶屋は街の真中を逸物に乗つて疾駆する自分自身を見出した。

ああ！ 何といふ物音、騒音、蟬きだらう！ 両側には四階建の家が巍然として連なつてゐる。夏々たる馬蹄の音、往き交ふ車輪の轟きがさながら雷のごとくひびき渡つて、四方に反響する。家は大地から生え出すやうに、一步毎にすすくとそそり立つ。橋は震動し、馬車は飛びかひ、馭者馬丁は高らかに叱咤する。雪は八方から飛んで来る幾千とも知れぬ橋のもとに軋みを立てる。徒歩の人々は家々の壁にしがみつくとやうにして雑踏してゐるが、家といふ家は火皿の列に飾られてゐるので、彼等の影は反対側の壁にちらついて、頭が屋根や煙突にまで届きさう。

鍛冶屋は驚き呆れて邊りをきよるきよる見廻した。彼は家々が數知れぬ火の眼を自分の方へ向けて、じつと見つめてゐるやうな気がした。毛皮裏の羅紗外套を纏つた旦那方がむやみに大勢ゐるので、彼は誰に帽子をぬいだものやら分らなくなつた。

『やあれやれ、ここには旦那衆がなんと大勢ゐなさることか！』と鍛冶屋は思った。『毛皮外套を着て街を通る人は誰も彼も、みんな陪審員みたいな気がするわい！』とここで硝子窓の素ばらしい馬車乗りまはしてゐる人達は、市長でなければお目附役か、それとももつと豪い人かも知れないぞ。』

彼の獨語は悪魔の間に遮られた。

「いきなり女帝様のところへ行くのかね？」

『いや、それは恐ろしい。』と鍛冶屋は考へた。『ここに確か、この秋ヂカンカに來たザポロージェのコサツクがある筈だ、何處だか知らないけれども。あの連中は何か女王様に宛てた請願書を持つてセーチを發足したんだつけ。とにかく一應あの連中に相談してみたいものだて。おい、悪魔！ ひとつ俺のポケットへ入つて、ザポロージェのコサツクのところへ案内しろ！』

悪魔はあつと云ふ間に瘠せ細つて、苦もなくポケットへ入れるほど小さくなつた。ヅクーラは左右を見返る違もなく、大きな建物の前に來てしまつた。自分でも何が何やら分らぬ中に階段を昇つて、扉を開けた。と、見事に飾り立てた部屋を一目見た途端、その目眩ゆさに思はず後へ身を引いた。しかし、ヂカンカを通つて行つたのと同じザポロージェ人達を見ると、いささか氣力を取り戻した。彼等はいま絹張の長椅子の上にタールを塗つた長靴のまま胡座をかき、普通コレシユキイと呼ばれてゐる一等強い煙草を吸つてゐた。

「皆さん、御機嫌よう！ 思ひがけない所でお目にかかりますな！」と鍛冶屋はちかちかと傍へ寄つて、手が床につきさうなほど低く頭を下げてかう云つた。

\* 當時のイルミネーション



「これは一體なものだい？」と鍛冶屋のまん前に坐つてゐた男が、やや離れたところにある仲間に訊ねた。

「氣がおつきになりませんか？」と鍛冶屋は云つた。「私ですよ、鍛冶屋のヅクラーですよ！

この秋あなた方がデカンカ村まで來なすつた時、私のうちに二日足らずお泊りになつたぢやありませんか。皆さんお息災でお芽出たうございます。その時あなた方の馬車の前輪に、新しい輪金を取りつけて上げましたつけ。」

「ああ！」と同じザポロージェ・コサツクは云つた。「これはあの繪の上手な鍛冶屋だよ。御機嫌よう！ いったい何用でこつちへ出てきたんだね？」

「べつに、ちよつと見物がしたくなりまして。人の話では……」

「どうだね、」と相手は<sup>\*</sup>ロシヤ語も喋れるぞと云ふところを見せたく、氣取つた様子で話しかけた。「どうだね、大きな市ぢやらう？」

鍛冶屋もぼつと出に見られて負<sup>ひ</sup>を取りたくなかつた。その上、前にもちよつと述べておいた通り、高尚な言葉だつて心得てゐるのだ。

「中々大したとけいですて！」と彼はさりげなく答へた。「今更かれこれ云ふがものはない、宏壯な家ばかりで、立派な繪圖が到るところに懸つてをりますでな。金文字をびかびか光らした家

屋も澤山あるし。何も云ふことはありません、悦ばしい光景ですよ！」

ザポロージェの連中は、かくも自由自在に言葉を操る鍛冶屋の話聞いて、彼にとつては甚だ有利な結論を下した。

「また後でゆつくり話すでしょうよ。これから俺達は女帝様のところへ行かんけりやならないのでな。」

「女帝様のところへ？ 皆さん、願だから私も一緒につれてつておくんない！」

「お前を？」と云つた相手の調子は、本物の大きな馬に乗せてくれと強請る、四つかそこいらの坊やを賺す<sup>おとり</sup>傳役のやうであつた。「お前なんかあんなところへ行つて何をしようつてんだ？ いんや、いけない。」と云ふコサツクの顔には勿體らしい表情があらはれた。「俺達はな、お前、女帝

様と自分の用向きを相談するんだからな。」

「つれてつておくんない！」と鍛冶屋は後へひかなかつた。「貴様も頼めよ！」と拳固でポケットを叩いて、彼は小聲に悪魔に囁いた。

彼がさう云ふか云はないかに、もう一人のザポロージェ人が口を入れた。

\* 彼等の會話は當然小ロシヤ語でなされてゐる筈であるが、實際は大ロシヤ語で書かれてゐる。こゝでは特に訛のある言葉を用ひてあるけれども、翻譯では厭味になる虞れがあるので、他の部分と一樣にし



「つれてつてやれよ、本當に！」

「ぢや、つれてつてやるかなあ！」とほかの連中も云つた。

「ぢや、我々とおんなじ服を着せてやれ。」

鍛冶屋があはてて緑色の上衣を着るか着ないかに、いきなり扉がさつと聞いて、飾帯をつけた人が入つて来て、出發の時間だと云つた。

大きな箱馬車に乗つて、バネにゆらゆら揺られ始めた時、はじめ鍛冶屋は異様な氣持がした。

兩側では、四階建の家が後ろへ後ろへと走り去り、舗道は轟然たる響を立てながら、自分から馬の足下を流れて行く。

『いやはや、何ていふ明りだ！』と鍛冶屋は心に思つた。『村ぢや晝間だつてこんなに明るかなきゃ。』

馬車は宮殿の前で停つた。ザポロージェの連中は車を出て、華美をきはめた玄關へ入つてゆき燦爛とかがやく階段を昇りはじめた。

『なんていふ階段だらう！』と鍛冶屋は口の中で呟いた。『足で踏むのが勿體ないくらゐだ。そしてこの飾り！昔噺は嘘の皮だつて云ふけれど、なんの嘘なものか！いよう！なんて云ふ手摺だらう！大した仕事だなあ！ここに使つてある鐵だけでも五十ルーブリがとこはかかつ

てるだらうよ！』

階段を昇りきつて、ザポロージェの連中は第一の廣間を通りぬけた。鍛冶屋は嵌木床パルケットに足をこらせまいと、一步々々にびくびくしながら、おづおづと跡に従つた。廣間を三つ通り抜けたが、鍛冶屋は依然として驚きつづけるのであつた。第四の廣間へ入つた時、彼は我ともなしに壁にかかつてゐる繪の傍へ歩み寄つた。それは幼い基督を抱いた聖母の姿であつた。

『ああ、何ていふ繪だらう！じつに素ばらしい作だ！』と彼は考へるのであつた。『まるで今にも物を云ひさうだ！まるで生きてゐるやうだ！それにあの幼い基督様！紅葉のやうな手を押しつけて、にっこり笑つてゐる様子つたら、本當に可愛らしいなあ！ああ、どうも大した色だ！ここには赭石ウオツラなんか一コペイカも使つてなくて、何處から何處まで綠青ヤドリや臘脂バクサンばかりにちがひない。それにあの空色、まるで燃え立つやうだ！えらい仕事だなあ！きつと生地は一等高い鉛白で仕上げたものだらうな。だが、この繪がどんなに素ばらしと云つたところで、しかしこの眞鍮の把手となると、』と彼は扉に近寄つて、ハンドルをいじくりながら考へ續けた。『もつともつと感服ものだ。ふうん、何て鮮かな細工だらう！こんなのはみな獨逸の鍛冶屋たちが、高い金を取つてやつたもんだらうな……』

恐らく鍛冶屋はまだ長いこと、こんなもの思ひに耽つてゐたことであらうが、そのとき金モー



ルをつけた侍僕が彼の腕を突つついて、ほかの者に後れないやうにと注意した。ザポロージェの連中はなほ二つの廣間を通り抜けて、ようやく足を停めた。そこで待つてゐるやうにと命じられたのである。廣間の中には、金モールで繡ひをした軍服姿の將軍達が群れをなしてゐた。ザポロージェの連中は四方八方へ會釋して、一と塊りになつた。

やがて間もなく、堂々たる體軀をしたかなり肉附のいい男が、コサツク首領ゲトマンの制服を纏ひ、赤皮の靴を穿き、あまたの幕僚を従へて入つて來た。頭の毛はくしゃくしゃに亂れ、一方の眼はやや潰れたやうな感じであつたが、その顔には傲慢な威風が浮び、すべての動作には命令者の立場に馴れた趣が表はれるのであつた。今までかなり傲然たる様子で歩き廻つてゐた金モールの將軍連も、急にそはそはし始め、低く腰をかがめながら、その一言々は愚か、ちよいとした身振りですらも聞き洩すまい、見落すまいと一生懸命であつた。彼の意思表示を一瞬時に實行しようといふわけである。しかし首領ゲトマンはそんなことには一向頓着なく、ほんの心持ち頷いたばかりで、ザポロージェ・コサツクの方へ近づいた。

ザポロージェの連中は一齊に、恭しく敬禮をした。

「お前達はみんな揃つてをるのかな？」と彼はやや鼻にかかつた聲で、言葉尻を引きながら問ひかけた。

「はいつ、みんな揃つてをります、閣下！」と又もや頭かしらを下げながら、ザポロージェの連中は答へた。

「わしが教へたことを忘れないでちゃんと云ふのだぞ！」

「はいつ、忘れはいたしません、閣下。」

「あれは皇帝様かね？」と鍛冶屋はザポロージェ連の一人に訊ねた。

「なんの皇帝どころか！ あれこそポチョームキン様だよ。」と相手は答へた。

次の間に人聲が聞えた。と、大勢の女官や廷臣たちがぞろぞろ入つて來たので、鍛冶屋は目のやり場に迷つてしまつた。女は長い尻尾のついた繡子の服を身に纏ひ、男は金糸の繡ひのある宮中風の上衣を着て、編下髪をうしろに垂らしてゐる。鍛冶屋は何かきらきら光るものを見たばかりで、ほかには何一つ目に入らなかつた。

ザポロージェの連中はみな一齊に床へ平伏して、

「どうぞお慈悲を、女帝陛下！ どうぞお慈悲を！」と異口同音に叫んだ。

鍛冶屋は何が何やら無我夢中で、同じやうに平身低頭、床の上に這ひつくばつた。

「お起ち！」といふ威のある、しかも爽やかな聲が、彼等の頭上にひびいた。廷臣の誰彼はあた

\* 公爵、エカチリーナ女帝の寵臣、クリミヤ併合の功勞者（一七四二—一九一年）



ふたししながら、ザポロージエの連中を小突きにかかった。

「起ちませぬ、女帝陛下！ 起ちませぬ！ 死んでも起つことではござりませぬ！」とザポロージエ人達は叫んだ。

ポチョームキンは唇を噛んだ。つひに自分で彼等の傍へ近寄り、一人のものに命令の調子で囁いた。で、ザポロージエの連中は起ち上つた。

そのとき鍛冶屋も勇氣をふるつて頭を上げ、自分の前に立つてゐる貴婦人を見た。背は高くないが、どちらかと云へば寧ろぼつてりと肉附のいい方で、白粉で化粧を施し、碧い眼にはにこやかに微笑を浮べてゐるが、しかも同時に威を帯びて、すべてを懼伏させる力のある様子は、いかさまた天下を掌中に握つてゐる女性でなければ見られないところである。

「ポチョームキン公が今日わたしに、今までわたしの見たことのない人達に會はせてやると云ふ約束でね。」と碧い眼の貴婦人は、もの珍らしげにザポロージエの連中をと見かう見しながら云つた。「お前たちはここへ来てどんな待遇を受けておいでだね、悪くないかえ？」と彼女はさらに近く寄りながら言葉をつづけた。

「はいつ、有難う存じまする、女帝陛下！ 食糧はよい品を支給されてをりまする、尤も當地の羊肉はわたくし共ザポロージエの方とは、まるで別でござりますが……それでも我慢できないこ

とはござりませぬ……」

ポチョームキンは、ザポロージエの連中が自分の教へておいたのとまるつきり別のことを喋るのを見て、顔をしかめた。

ザポロージエ・コサツクの一人が、容體をつくろひながら前へ進み出た。

「恐れながら申し上げます、女帝陛下！ わたくし共は陛下の忠誠な臣民でござりますが、何をもちましてお怒りに觸れたのでござりませう？ わたくし共がああ穢ららしい韃靼人と手を握つたことがございませうか？ トルコ人と協約を結んだことがございませうか？ そのほかお國に叛くやうな行ひは愚か、そのやうな考へさへ持つたことはございませぬ。それなのに、どういふわけで御不興を蒙つたのでございませう？ 前には陛下のお取計らひとして、方々に砦を築いてわたくし共に對する備へをせよとの命令が出たと承りましたが、その後また、わたくし共を獵兵にしようと思召し召しと洩れ聞きました。そのうへ今度も、何かと新しく穩かならぬ噂が耳に入る始末でござります。一體ザポロージエ軍に何の科があるのござりませう？ 皇軍を導いてペレコープを通過させ、陛下の將軍達のクリミヤ人討伐を援けたのが、悪かつたのでござりませるか？……」

ポチョームキンは無言のまま、その両手を一面に飾つてゐるダイヤモンドを、小さなブラシで



無頓着に磨いてゐた。

「お前たちはつまりどうしてほしいとお云ひなのだえ？」とエカチェリーナ女帝は眞實の籠つた調子で問ひかけた。

ザポロージェ・コサツク達は、互に意味ありげな視線を交した。

『今こそ潮時だ！ 女王様が何を望みかとお訊ねになるんだからな！』と鍛冶屋は獨りごちて、いきなり床へどうと身を投げた。

「陛下さま、どうかお叱りにならないで、お慈悲をかけて下さいますやう！ このやうなことを申し上げて御立腹あそばすかも知れませんが、あなた様のおみ足に召していらつしやる靴は、何で拵へたものでございませう？ 世界中さがしましても、何處の國のどんな靴屋でも、これだけの細工をするものは誰一人ございませぬ。ああ、もしわたくしの女房にそのやうな靴を穿かしてやる事が出来ましたなら！」

女帝は思はず笑ひ出された。廷臣たちも同じく笑ひ出さずにはゐられなかつた。ポチョームキンは顔を擧めるのと、にやにや笑ふのと一緒だつた。ザポロージェの連中は、こいつ氣でも違つたのではないかと、鍛冶屋の肘を突つついた。

「お起ち」と女帝は優しく言葉をかけた。「もしお前がそれ程までにこんな靴がほしいと云ふの

なら、その望みを叶へてやるのは造作のないことです。この男に今すぐ金糸入りの一番上等の靴をもつて来ておやり！ 全くのところ、この男の飾り氣のないのが氣に入りました。どうだね、」と女帝は一人だけやや離れて立つてゐる男に視線を向けて、言葉をつづけた。それは肉附のいい、しかし幾らか蒼褪めた顔色をした人物で、大きな貝釦のついた質素な長上衣カフタンを着てゐるところから判断すると、廷臣の數には入つてゐないらしかつた。「お前の才氣縦横の筆に持つて來いの題材ではないかえ。」

「陛下、そのお言葉は身に過ぎた光榮でございます。これには少くとも、ラフォンテーヌの筆が必要でございませう！」と貝釦の男は敬禮をしながら答へた。

「いえいえ、正直な話が、わたしはお前の『旅團長』<sup>\*</sup>にはすつかり感心して、今でもまだ有頂天になつてゐるくらゐですよ！ さて、ときに、」女帝は又もやザポロージェ人の方へ振り向きながら、語を次いだ。「何でも話に聞くと、お前方セーチの人は決して結婚しないとかいふことが。」

「どう致しまして、陛下さま！ 人間、女房なしに生きて行かれないちふことは、陛下様も御承

\* ロシヤ國民劇の先驅者たるフォンギージンの喜劇第一作、その後書かれた『未成年』は彼の代表作とされてゐる。



知でござりませうに。」と、前に鍛冶屋の話相手になつたザポロージェエ人がかう答へた。ヅクーラは、この男がちゃんとした上品なロシア語を知つてゐるのに、何故わざわざ普通百姓言葉といはれてゐる野卑な方言を使つて、女帝様とお話をするのだらうと呆れ返つた。

『何分するい連中だから、』と彼は心に思つた。『きつと何か思はくあつてのことだらう。』  
「わたくし共は修道院の坊さんと違つて、」とそのザポロージェエ人はつづけた。「罪の深いただの人間でござりますから、普通の生真面目な基督教徒たちと同様に、生ものには意地が汚い方なまでござります。わたくし共の仲間にも女房をもつた者も少くはござりませんが、セーチでは夫婦暮しを致しませんので、女房を波蘭においてゐるものもあれば、ウクライナにおいてゐるものもあり、又トウレシチナに残してゐるものもあり。」

このとき鍛冶屋のところへ一足の靴が持つて來られた。

「やれまあ、これは何といふお見事な品で！」と鍛冶屋は靴に両手をかけ、さも嬉しさうに叫んだ。「陛下様！ このやうな靴をおみ足に召して、氷の上などをお迂り遊ばす時は、まあどんなでござりませう。そのおみ足は嘸かし砂糖で拵へたやうにお優しいことと存じます。」

女帝はこの上もなくすうりとした美しい足の持主だったので、朴直な鍛冶屋の口からかうしたお世辭を聞いた時、思はず嫣然と微笑せずにはゐられなかつた。またザポロージェエ・コサツクの制

服を着てゐた鍛冶屋は、色こそ淺黒いけれども、美男と認めて然るべき好漢であつた。

かうして女帝の好意をかち得たヅクーラは、すつかり有頂天になつて、よく女王様にいろいろなことをお訊きして見ようと思つた。それは、王様がたは蜜とクリームばかり召し上ると云ふのは本當かどうか、などといつたやうな類である。けれども、ザポロージェエ人達がしきりに脇腹を突つついてゐるのに氣がついて、黙つてゐることに肚を決めた。で、女帝が故參のコサツク達に向つて、セーチではどんな具合に暮してゐるか、又その習慣しきたりはどんな風か、などと問ひかけはじめたのを機會に、彼はそつと後ろへ下つて、ポケットの方へ屈み込み、小さな聲で、「さあ早く俺をここから連れ出してくれ！」と云つた。と思ふ間もなく、彼はもう見附の遮斷機の外に出てゐた。

「身投げしたんだよ！ 本當に身投げしたんだとも！ もしさうでなかつたら、わたしやこの場で立ちどころに死んだつて構やしないから、本當にさ！」と肥つちよの機織りの女房が、道の真中で村のかみさん連に囲まれながら、一生懸命にまくし立ててゐる。

「何だつて、わたしが嘘つきだとも云ふのかえ？ みんながわたしの云ふことを本當にしない



ところを見ると、わたしが何處かの牛を盗んだとでもお云ひなのかい？ わたしが誰かに悪い咒ひでもかけたとお思ひなのかい？」とコサツクの長衣スネトカを着込んだ、紫色の鼻をした女房が、兩手を振り立て振り立て、喚くのであつた。「現にペレペルチーハ婆さんが、鍛冶屋の首くくつたことを自分の目で見ただから、もしそれが違つたら、わたしや水も飲めなくなつたつて構はないよ！」

「鍛冶屋が首くくつたあ？ へえ、おつ魂げた！」と、チューブのところから出て來た村長が足を停めて、喋つてゐる連中の間へ割り込んで來た。

「それよりいつそ、ヲートカが飲めなくなつても、と云つた方がよかつたに、この飲んだくれ婆あ！」と機織りの女房がやり返した。「首くくつたなんて、お前みたいな氣ちがひでなくつちや、そんなことが云へる筈はありやしない！ あれは身投げしたんだよ！ 氷穴に飛び込んで死んだのよ！ それはね、お前がいんま居酒屋から出て來たつてことと同じ位、わたしや間違ひなく知り抜いてゐるんだよ。」

「恥知らず！ へん、何てことを持ち出しやがつたもんだ！」と紫色の鼻をした女房は、かうしつぺい返しをした。「黙つてやがれ、この性わる女！ お前んとこへ毎晩補祭が通つてるのを、わたしが知らないとも思つてるのかい。」

機織りの女房はかつとなつて、

「補祭がどうしたつて？ 補祭が誰のとこへ通つてるつて？ 何を口から出まかせ云ひやがるんだ？」

「補祭だつて？」青い南京木綿の表をつけた兎の毛皮外套を着込んでゐる補祭の焚妻ほこめが、唾み合つてゐる二人の女に詰め寄りながら、甲高い聲で言葉尻を引いた。「補祭がどんなものか思ひ知らせてやるから！ 誰だい補祭なんて云つた奴は？」

「こいつなんだ、補祭が通つてゐる相手は！」と紫色の鼻をした婢は、機織りの女房を指しながら云つた。

「ぢや、お前なんだね、この牝犬め。」と補祭の焚妻ほこめは機織りの女房に詰め寄りながら叫んだ。「ぢや、お前なんだね、この魔法女め、うちの人に毒の酒を飲ませて頭をぼつとさせて、お前んとこへ通ふやうに咒ひやがつたのは？」

「どきやがれ、この阿魔め！」と機織りの女房は尻ごみしながら云つた。  
「ええ、この忌々しい魔法女め、お前なんかもう我子の顔を見ない中にくたばつちまふんだから！ 畜生！ ペツ！」と云ふなり、補祭の焚妻ほこめが機織りの女房に吐きかけた唾は、もの見事に相手の眼に命中した。



機織りの女房も負けず劣らず仕返しをしようとしたが、唾は當の敵にはかからないで、この喧嘩を一ことも聞き洩らすまいと二人の傍へ寄つて來た村長の無精鬚にかかった。

「ええつ、汚らしい、この阿魔め！」と村長は外套の裾で顔を拭き拭き、鞭をふり上げて呶鳴つた。この身振りに驚いた一同は、口々に悪態をつきながら、四方八方へ散つてしまつた。「ちやつ、小汚い！」と村長はいつまでも顔を拭き拭き、ぼやき續けるのであつた。「ぢや、鍛冶屋は身投げしてしまつたか！ ああ何ちふことだ！ 大した繪描きだつたがなあ！ それによく切れる庖丁や、鎌や、丈夫な鋤を拵へてゐたものを！ それに腕つぶしの力と云つたら！ さうとも、」と彼は考へ込みながら言葉をつづけた。「ああいふ男は村にも滅多にありやしない。道理でこそ俺はあの忌々しい袋ん中に隠れてゐた時から、あいつ酷くふさぎ込んでゐるなと思つたつが、可哀さうに。あの鍛冶屋も、つい先刻までゐたものが、もうゐなくなつちまつたのか！ 俺はうちの斑馬の蹄鐵を打つて貰はうと思つてゐたに……」かういつた基督教徒らしい物思ひで胸を一杯にしなが、村長はとぼとぼと我家をさして歩き出した。

この噂がオクサーナの耳に入つたとき、彼女ははたと當惑した。彼女はペレペルチーハの眼も

信じなければ、村の女房たちの取沙汰も本當にしなかつた。鍛冶屋がかなり信心深い人間で、思ひ切つて自分で自分の魂を滅ぼすやうな眞似はしない、それは彼女もよく知り抜いてゐた。しかし、ひよつとブクラーが本當に、二度と再び歸つて來ない心算で、村を去つてしまつたとすれば何としよう？ あの鍛冶屋くらゐの立派な若者は、ほかの何處を探したつて滅多とありさうな筈がない。それに、あれほど自分を愛してゐたではないか！ 誰よりも一番辛棒ぶよく自分の氣紛れを我慢してくれたではないか……

美女は一晩ぢゆう夜具の中で轉輾反側して、寝つくことが出來なかつた。夜の闇が彼女自身にすら隠して見せぬ艶めかしい露はな肉體をのたうち廻らせながら、彼女は聲を立てて我とわが身を罵るのであつた。さうかと思ふと、急にびつたり鳴りを靜めて、もう何ごとも考へまいと肚を決める、——がその癖たえず考へつづける。かうして彼女は身も心も燃えんばかりであつた。やがて夜の明ける頃には、もう鍛冶屋に首つたけ惚れ込んでゐた。

チューブは鍛冶屋の運命について、悦びの色も哀惜の情も示しはしなかつた。彼の思ひはただ一つのものに占められてゐた。彼はどうしてもソローハの不實を忘れることが出來ず、寢言にまでもこの女を罵りつづけてゐた。

朝が訪れた。教會はまだ夜の明けきらぬ中から、人でいつぱいになつてゐた。白い麻の被ぎを



かぶり、白羅紗の長上着スエットカを纏つた年配の女達は、堂の入口のところで恭しく十字を切つてゐる。貴族の奥さん達は緑や黄の服をつけて、（中には、金糸で後ろに髭のやうな形の刺繍をした青い波蘭服クラムシを着たのもあつた）、その前に立つてゐる。娘たちは、頭には小間物店に負けないほどのボンを一ぱい飾り立て、頸には頸飾ネックレイスや、十字架や、金貨などを掛けつらねて、聖壁イコンステスに少しでも近く寄らうと奔めいてゐる。しかし誰よりも一番まへに立つてゐるのは、貴族たちと平の百姓連であつた。みんな口髭クチヒゲに房髪チユイフを蓄へ、下頤を綺麗に剃りあげて、太い頸筋をしてゐる。たいていは頭巾附のマントを着て、その下から白い（中には青いのもある）長上着スエットカを覗かしてゐた。どちらを向いて見ても、誰の顔にも祭日らしい氣分が漂つてゐた。村長は先づ腸詰で精進落をする時のことを考へて、今からもう舌なめずりをしてゐる。娘達は若い衆と一緒に氷江りをするのを空想してゐる。老婆たちは何時もよりは熱心に祈禱の文句を唱へてゐる。コサツクのスヴェルブイグーズが床に額をつけて禮拜する音が、教會ちゆうに響く。ただオクサーナだけはお祈りをするでもなければしなくてもなく、心も空に茫然と立つてゐた。その胸の中には様々な物思ひが往來して、氣持は次第に苛立たしく、もの悲しくなつて行く。涙の露がその眼の中に揺れ戦いてゐた。娘達はそのわけを察しかねて、鍛冶屋が因もとであらうなどは夢にも思はなかつた。とは云ふものの、鍛冶屋のことを心にかけてゐるのは、オクサーナひとりだけではなかつた。村人の誰

も彼もが、妙に祭が祭らしくなく、何だか物足りないやうな氣がしてゐたのである。しかもまるで面當てのやうに、補祭までが袋の中の道中以來すつかり聲を囁らしてしまつて、やつと聞えるか聞えないかの聲でお茶を濁してゐる始末であつた。成程、よそからやつて來た歌手が、見事なバスを聞かせるには聞かせたけれども、もし鍛冶屋がゐてくれたらどんなによかつたか分らない。いつも『我らの父よ』なり『天なる御使』なりを歌ひはじめると、ヅクーラは唱歌隊席へ上つて、そこからポルタヴの教會でやるのとそつくり同じ具合に歌ひ出すのだつた。おまけに、寺の執事の役目をちやんとやつてのけるのも、この鍛冶屋一人しかないのだ。やがて朝祈禱も終りそれから晝祈禱も済んだ……本當にあの鍛冶屋は一體どこへ姿を消したのだらう？

その夜も残んの幾時を、悪魔は前よりも更に凄まじい速度で飛び翔り、ヅクーラは忽ちわが家の傍へかたに運ばれて來た。丁度そのとき雞の聲が聞えた。

「どこへ行くんだ？」と、逃げ出さうとする悪魔の尻尾を掴んで、鍛冶屋はかう叫んだ。「待ちな、兄弟、俺はまだお前に禮をしてないんだから。」

さう云ふなり棒切れを拾ひ上げて、びしびしと續けさまに食らはした。哀れな悪魔は、代官からお仕置きを食つたばかりの百姓よろしく、一目散に逃げ出した。かやうな次第で、人をたぶら

・小ロシヤの風習、頭を剃つて前方に一房の髪を残し、長く垂らしたもの。



かしたり、かどわかしたり、からかつたりするどころか、あべこべにこの人類の敵は自分の方がいい玩具にされてしまった。

さてそれからヅクーラは入口の土間へ入つて、乾草の中にもぐり込み、食事の時刻までぐつすり寝てしまった。漸く目を醒して見ると、もう日が高いのに吃驚した。

「こいつは朝祈禱も晝祈禱も寝過したぞ！」

そこで信心ぶかい鍛冶屋はすっかり悄氣てしまった。これはてつきり、自分で自分の魂を滅ぼさうなどと云ふ罪な了見を起したために、神様がわざと罰をお下しになつて、かうした晴れの祭日に教會へ詣らすまいと、眠氣をおつかせになつたに相違ない、と彼は考へるのであつた。けれども、次の週にはこの顛末を坊さまに懺悔しよう、そして今日からまる一年間、毎日五十回づつ床に額を打ちつけて禮拜するのだ、かう考へて僅かに自ら慰めた。家の中を覗いて見ると、そこには誰もゐなかつた。どうやらソローハはまだ歸つて來ないらしい。

彼は懐からそつと大事さうに例の靴を取り出して、その立派な細工にいまさら讚嘆すると共に、昨夜の魔訶不思議な出來事に奇異の思ひを新たにした。それから手水を使ひ、出來るだけ念入りに身仕度をし、かのザポロージェ・コサツクから貰つた制服を纏ひ、ポルタグ滞在時代に買つて以來一度も被つたことのない、レシエチーロフ産の毛皮のついた、天邊の青い、新調の帽子を長

持から取り出した。また同様に新しい派手な色まじりの帯をも取り出した。それらすべてを鞭と一緒に風呂敷包にして、いきなりチューブの住居をさして出かけた。

鍛冶屋が入つて行くと、チューブは呆れて眼を皿のやうにした。しかし彼が驚いたのは、鍛冶屋が生き返つたことか、それとも鍛冶屋が圖々しくも自分の家へのこのこ入つて來たことか、あのひはまた鍛冶屋が洒落たザポロージェ・コサツクの制服を着てゐることなのか、我ながら譯がわからなかつた。しかし、それよりも更に驚いたのは、ヅクーラが包を解いて、村ではまだ見たこともないやうな眞新しい帽子と帯を前におき、彼の足もとにどうと身を投げ出して、祈るやうな聲で云ひ出したことである。

「父つあん、勘辨しておくれ！ どうか腹を立てないで！ さあ、かうして鞭を持つて來たから、幾らでも腹に足りるだけ打つてくれ。さあ、俺は自分で自分の體を投げ出してゐるんだ、何もかもすつかり後悔してゐるこの俺だ。ぶつてくれ、ただ腹を立てないでね。あんたも昔は亡くなつた家の父つあんと仲善しで、兄弟盃までした間柄だつて云ふぢやないか。」

村中の誰に向つても鼻息を窺はうとせず、五コペイカ銅貨や蹄鐵を蕎麥煎餅のやうに片手でへし曲げるこの鍛冶屋が、いま自分の足もとに平伏してゐるのを見て、チューブは心ひそかに満悅を感じないわけに行かなかつた。そこで更に自分の威嚴を損じまいと、チューブは鞭を取りあげ



て、三度かれの背中を打つた。

「もうこれで澤山だ、起きろ！ いつでも年寄の云ふことは聴くもんだぞ！ 俺達の間にあつたことはお互ひ忘れるとしようよ。さて、お前どんな頼みがあるのか、一つ聞かうぢやないか。」

「父つあん、俺はオクサーナを嫁に貰ひたいんだ！」

チューブはちよつと考へて、帽子と帯を見た。帽子は素ばらしい品だし、帯もやはりそれに負けない。彼は不實なソローハのことを思ひ出して、斷乎たる調子で云つた。

「よし！ ぢや仲人を寄越しな！」

「あらつ！」とオクサーナは鬨を跨がうとして、ふと鍛冶屋の姿を見ると、思はずかう叫び、驚きと悦びの眼を瞠つて男を見つめた。

「見てくんな、お前にどんな靴を持つて来てやつたか！」とブクローラは云つた。「本當に女王様がお召しになるやつだぜ。」

「いえ、いえ！ あたし靴なんかいらぬわ！」と彼女は両手を振りながら、男から眼を離さないで云つた。「あたし靴なんかなくなつて……」それから先きは云ひかねて、彼女は顔を赧らめた。

鍛冶屋は近々と寄つて、その手を取つた。美女は眼を伏せてしまつた。彼女がこんなに目も醒

めるほど美しく見えたのは、これまでついぞない程であつた。鍛冶屋は有頂天になつて、そおつと女に接吻した。彼女の顔は又さらに燃え立つて、いま一段と艶やかになつた。

今は世に亡きある僧正がヂカンカの村を通り過ぎたことがある。そのとき僧正は村の土地柄をしきりに褒めたたへたが、通り筋を歩いてゐる中に、ふと一軒の新しい家の前に足を停めた。

「この綺麗に彩色した家はいつたい誰の住ひかな？」子供を抱いて戸口に立つてゐた美しい女に向つて、僧正はかう問ひかけた。

「鍛冶屋のブクローラの住ひでございます！」とオクサーナは（それは正しく彼女であつた）、小腰を屈めながら云つた。

「見事なものだ！ 天晴れな仕事だ！」と僧正は戸や窓を仔細に眺めながら云つた。窓といふ窓はぐるつと周りを赤い色で縁どつてあり、戸には一面、パイプを唾へて馬に乗つたコサックが描いてあつた。

しかし、それよりもブクローラが教會の懺悔を立派に濟まして、左側の唱歌隊席を無料で緑色に塗り上げ、そこへ赤い花を散らしたといふ話を聞いて、僧正は更にこの鍛冶屋を褒め上げたもの



である。

とは云へ、ヅクラーの仕事はそれだけではなかつた。教會へ入ると、その脇の方の壁に、地獄の悪魔が描いてある。見るからに厭らしい姿で、誰でも傍を通りかかると唾を吐きかけずにはゐられない。で村の女房どもは、抱いてゐる赤ん坊が泣き立てて困る時など、この繪のそばへ連れて来て、「そうら、ご覧、あの怕ない顔！」と云ふと、子供は涙を止めて、繪を横眼に見ながら、母の胸にひしと身を寄せるのであつた。

## 昔氣質の地主達



私は小ロシアの片田舎に領地を持つて、土地の者から普通「昔氣質の地主さん」と呼ばれてゐる人達の、浮世はなれた慎ましやかな生活が心から氣に入つてゐる。よく繪にある朽ち果てた茅屋などと同じやうに、素朴な趣があるのが好ましい。それは、壁も雨風に打たれず、屋根にも苔が生えず、上り段も漆喰が剥けて赤い煉瓦をむき出しにするに到らぬ、新建ての、のつぺりした家に比べると、まるつきり感じが違ふのだ。私は時として、こんな風に思ひ切り浮世ばなれのした生活圏内へ入り込んでみるのが好きである。ここでは人間的な慾望などは何一つとして圍ひの柵を越して侵入しはしない。柵の中には餘り大きくない庭があつて、林檎や李の樹が一杯に生ひ繁り、そのぐるりには一方へ傾いだ田舎風の家が幾軒も並んでゐて、楊や、接骨木や、梨の木がその上に鬱蒼たる陰をつくつてゐる。その持主のつつましやかな生活の静かで暢氣なこと、その中へ一步踏み込むと、しばしの間は浮世のことをすつかり忘れてしまつて、情慾とか希望とか、又はさういふ邪念から生れ出て人生を騒がす不安の精神などは、てんでこの世に存在しないやうに思はれ、そんなものはただぎらぎらとどぎつく輝く一場の夢に過ぎなかつたのではないか、と云つたやうな思ひがする程である。私は都會にゐてさへも、一軒の低い家をまさまざと目の前に見る。黒ずんだ細い木の柱を立て並べた廻廊がこの家を取り圍んでゐるが、それは夕立や電が降りだした時、雨に濡れないで鎧戸を閉められるやうに、と云ふ用意なのである。家の裏手には薫



りの高い野櫻が一本生えてゐるほか、低い果樹類が幾列にも並んで、紫がかつた眞紅の櫻ん坊と、鉛色の粉をふいた琥珀色の李の實が、華やかな洪水を氾濫させてゐる。そこにはまた四方へ枝を垂れた楓の樹があつて、その蔭には休息用の絨毯が敷いてある。家の前には、あまり大きくない瑞々しい草の生えた廣い内庭があつて、納屋から台所へ、台所から主人夫婦の住んでゐる母屋へ通ずる小徑が、草の中についてゐる。そこには生毛の塊りのやうにふわふわした雛をつれた、頸の長い鷺鳥が水を飲んでゐるし、柵には梨や林檎の實を束にしたのが乾してあるかと思ふと、風を入れるために絨毯が掛けてあつたりする。納屋のわきには舐瓜を積んだ荷車が曳きすててあり、その傍には車から離された牡牛が物ぐささうに臥そべつてゐる。——かういつた一切のものが、私にとつては云ひ知れぬ魅力を持つてゐる。と云ふのは、恐らく最早それらのものを二度と再び見ることが出来ないからであり、すべて遠く別れてゐるものが懐しく思はれるがためであらう。いづれにもせよ、私の乗つてゐる馬車がこの小やかな家の入口階段に近寄ると、早くも私の胸は不思議なほど快い、なごやかな氣持になつて來るのであつた。馬は浮々と車寄せに乗りつける。馭者は悠々と落ちつき拂つて馭者台から下り、まるで自分の家へでも着いたかのやうに、パイプに煙草をつめ始める。バルボース、ブローフカ、ジューチカ、などと云つた種類の、のつそりした番犬どもの立てる吠え聲までが、私の耳には快く響くのだ。しかし何よりも私の氣

に入つたのは、このつつましやかな一隅を領有してゐる當の主人達、——まめやかに出迎へてくれる老人老婆である。彼等の顔立は今でも時をり、都會の騒音が立ち罩め流行の燕尾服などの群がる中に、ふと私の目の前に浮ぶことがある。すると、私は不意に半睡半醒の妙な心持になつて、過ぎし昔が幻に立ち現れるのであつた。その都度、彼らの顔には何とも云へない善良な、人懐つこい、まごころの籠つた様子がまさまさと読み取られるので、それを見るとほんの僅かな間でも、思はず識らずもろもろの野心や妄執を忘れてしまひ、全身を舉げて素朴な田園生活に何時ともなく同化せざるを得ないのである。

かうした前世紀の老人達の中でも、私がいまだに忘れることの出来ない一組の夫婦がゐる。悲しいかな、この二人は既に世にない人であるが、私の心は今日にいたるまで哀惜の念に充ちてゐる。やがてその中に、いまは荒れ果てた彼等の舊居を訪れて、見る影もなく崩れ落ちた住居や、落葉に埋もつた池や、草蓬々と生ひ茂つた濠のみが残つて、そこにあるべきあの低い小家は跡かたもない、そんなことを想像すると、私の心臓は怪しく搾めつけられるのである。佗しい！私

は見ぬ先から佗しくて堪まらない！しかし物語に移ることしよう。  
アフアナシー・イヴーノギッチ・トフストグーヒハは、私のお話ししようと思つてゐるかの昔氣質の老人なので



ある。もし私が畫家であつて、<sup>\*</sup>ファイルモンと<sup>\*</sup>バフキードを畫布に現はさうと考へたら、この二人よりほかにモデルとして選ぶべきものはなからうと思ふ。アファナーシイ・イヴーノギッチは六十、プリヘーリヤ・イヴーノヴナは五十五であつた。アファナーシイ・イヴーノギッチは背の高い方で、いつも羊の毛皮を裏につけた吳縞の外套を着込み、背中を丸くして、話をしてゐる時でも、人の話を聞いてゐる時でも、始終にこにこしてゐる。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは幾らか眞面目くさつた質で、かつて殆んど笑つたことがない。けれどもその顔にも眼にも限りない善良さが漂ひ、容を見たら家にありつたけの御馳走を出して<sup>もてな</sup>款待さすにゐられない、と云つたやうな氣持がありありと觀て取られるので、この善良な顔に微笑などが浮んだら、それこそ餘り甘つたるくなり過ぎるだらうと思はれる程であつた。二人の顔に刻まれてゐる皺は、畫家が見たら早速寫生したくなるほど氣持のいい線の配列を示してゐる。それを眺めてゐると、二人の一點曇りない落ちついた生活が讀み取られるやうである。それは古い由緒のある、純國民的な、單純素朴な、しかも裕かな家柄の人々が送る生活であつて、タール職人や素町人などからのし上つて、まるで蝗のやうに裁判所や役場にぞろぞろと入り込み、同胞の膏血を絞つてゐるやうな下等な小ロシア人たちは、雲泥の相違なのである。この手合はペテルブルグにもうようよとしてゐて、三百代言を商賣のやうにし、とどのつまりは一財産こしらへ上げて、<sup>\*\*</sup>で終つてゐる自分の苗字に<sup>V</sup>

を添へて得々としてゐるのだ。ところが、この夫婦はすべて小ロシア生えぬきの舊家の例に洩れず、こんな卑しいけちな連中にはてんで似ても似つかないのである。

彼等夫婦の愛情の深いのを見て感動せずにはゐられない。彼等は決してお互同志に「お前」呼ばはりをしたことがない、いつも必ず「あなた」言葉である。「あなた、アファナーシイ・イヴーノギッチ！」「あなた、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ！」と云つた調子である。「アファナーシイ・イヴーノギッチ、これはあなたですね、椅子をお毀しになつたのは？」「まあ、怒らないで下さいよ、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ、あれは私なんだがね。」二人の間には子供といふものがなかつた。そのために、彼等の愛情は全部お互同志に集中されたと云ふわけである。いつか若い時にはアファナーシイ・イヴーノギッチも會社に勤めたこともあり、又その後少佐補になつたこともあるが、それはもう遠い昔のことになつてしまつて、當のアファナーシイ・イヴーノギッチもついぞそんな話を持ち出したことがない。アファナーシイ・イヴーノギッチが結婚したのは、三十の男盛りの時で、その頃は刺繍入りの上衣など着込んでゐた。のみならず、かなり器用にプリヘーリヤ・イヴーノヴナを盗み出した位である。女の方の身内の人達が結婚に反對したから

\* 神話中の人物、完全な夫婦愛の象徴とも云ふべき一對。

\*\* 小ロシアの姓はシエフチエンコ、ポターペンコの如く<sup>o</sup>で終るものが多い。これに反して大ロシア人の姓は、ベトロフ、イヴノフの如く、概ね<sup>v</sup>で終つてゐる。



で。しかし、そのことも彼は餘りはつきり覚えてゐない、少くも口に出したことがない。

かうした遠い異常な出来事も、今は浮世はなれた静かな生活に變り、朦朧とした而も一種の調和をたたへた夢見ごこちに席を譲つてしまつた。これはよく人が莊園のバルコンなどに腰かけて、庭など眺めてゐる時に経験する氣持である。外では爽かな雨が木の葉を打ちながら豊かなどよみを立て、潺溪の響とともに大地を流れ走つて、人の五體に氣だるい懶さを吹き込む。とかくする中に、半分<sup>一</sup>に切られた穹窿にも似た虹が木の間にかがつて、艶消しの七彩を空にかがやかす。——さもなければ幌馬車に揺られて行く時にも、似たやうな氣持を覚えるものである。車が青々とした木叢の間を潜つてゆくと、野鶉がけたたましく鳴き立て、香ぐはしい草は麥の穂や野の花などと一緒に馬車の窓からさし覗いて、手や顔を軽く叩くころよさ。

老人はいつも氣持のよいほほ笑みを浮べて、訪れて來た客の話に耳を傾けてゐる。時には自分で話をすることもあつたが、しかしどちらかとも云へば訊ねかける方が多い。彼は年中昔のことを賞め上げて、新しいことと云へば貶してばかりゐる、嫌はれものの年寄りとは趣きを異にしてゐた。それどころか、彼は相手に根掘り葉掘り問を持ちかけながら、相手の私生活、その成功と失敗に對して深い關心と好奇心を示す。それは大抵すべての老人が抱く好奇心と同じものであるが、しかしまた幼い子供の好奇心に多少似かよつたところもあつた。子供といふものは人と話を

しながら、それと同時に相手の時計についてゐる印形などを、と見かう見するものである。さう云ふ時のアフアナシー・イブーノギッチの顔は、いはば善良さに息づいてゐるのであつた。

わが老夫婦の住つてゐた家の部屋は、どれもみな小さくて天井が低く、普通むかし氣質の地主たちの家に見かけるやうな種類のものであつた。どの部屋にも大きな暖爐が一つづつあつて、これが殆んど部屋の三分の一を占めてゐる。部屋はどれもこれも恐ろしく暖い。といふのは、アフアナシー・イブーノギッチも、プリヘーリヤ・イブーノヅナも、度外れに暖いのが好きだつたからである。暖爐の焚口はすべて入口の間に通じてゐて、そこにはほとんど年中麥桿が天井まで積み上げてある。小ロシヤでは大抵こいつを薪の代りに使ふのだ。この麥桿のばちばち燃える音と赤い光とで、冬の晩などは入口の間がことのほか快いもの感じられる。で、血の氣の多い若い者など、淺黒い顔をした娘の尻を追ひまはして凍えきつた時には、兩手をばたばた叩きながら入口の間へ飛び込んで來るのだ。部屋の壁は古風な細い額縁に嵌つた幾枚かの畫で飾られてゐるが、その内容などは當の主人達でさへ疾くの昔に忘れてしまつてゐるに相違ない、と私は信じて疑はない。だから、その畫の幾枚かが持ち出されても、彼等は恐らく氣がつかないだらう。中に油繪具で描いた大きな肖像畫が二つあつた。一つは何處かの僧正を寫したもので、もう一つはピョートル三世の像であつた。かと思ふと、幅の狭い額縁の中から蠅の糞だらけのラヴリエール公



夫人が覗いてゐる。窓のまはりや戸の上には、小さな畫が夥しくかかつてゐたが、それらは何時ともなしに壁のしみのやうに見做す癖がついてしまふ。で、人は全く彼等の存在を認めなくなるのである。床はほとんどどの部屋も漆喰だけでも、如何にも綺麗に塗り上げてあつて、充分に手入れが行き届いてゐるので、四季施を着た従僕が寢ぼけ眼で大儀さうに掃く御大家の嵌木の床などは、これに比べると粗末に扱はれてゐると云はねばなるまい。

プリヘーリヤ・イヴーノヴナの居間は大小さまざまの長持や箱で一杯であつた。壁には草花、野菜物、西瓜などの種子を入れた包や袋が吊してある。色とりどりの毛糸の玉、布きれ、半世紀の間に拵へ溜めた着物などが、長持の中にも藏つてあるが、長持の間にも積んである。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは中々もの持ちのよい主婦で、どうかすると自分でもいつ、何に使ふのか知らない儘に、なんでもかでも集めてとつて置くのである。

しかし、この家で何より面白いのは歌をうたふ扉である。朝が訪れると共に、扉の歌が家ちゆうに聞えて来る。どうして扉が歌をうたふのか、私には分らない。錆びた蝶番ひのせゐなのか、それとも扉をつくつた職人がその中に何か祕密をかくしたのか、ともかく扉が一つ一つそれぞれの聲を持つてゐるのだから面白い。寢室へ通する扉は恐ろしくか細い高音で歌ふし、食堂の入口の扉はバスでしや嘎れ聲を立てた。ところが、入口の間の扉はなんだか妙なひびの入つたやう

な、同時にうめくやうな音を立てるので、じつと聞き入つてゐると、しまひには、「おうい、寒いよう！」といふ言葉がはつきりと聞き分けられる程である。大抵の人はこの音が氣に入らない、それは私も承知してゐるが、しかし私自身はこの扉の軋みを聞くのが眞實このましい。それを聞くと急に田園の香が漂つてくる思ひがするのだ。古風な燭台に立つてゐる蠟燭に照らされた天井の低い部屋、もう卓の上に用意の出來てゐる夜食、開け放した窓から中を覗いて、食器類の並んだ卓を眺めてゐる暗い五月の夜、庭も家も遠い川も己れの朗らかな囁りで充してゐる鶯、薄氣味のわるい枝の摺れ合ふざわめき……ああ、そのとき私の心には何といふ果しない追憶の流れが湧き出すことか！

部屋に据ゑてある椅子は木造りながら、すべて昔のもの例に洩れず、大きく堂々としてゐる。高い凭つ掛りは磨き上げてはあつたけれども、自然のまま漆もペンキも一切塗つてない。布や革さへも張つてないので、今日でも僧正たちの掛ける椅子にやや髣髴としてゐる。隅々には三角の卓、長椅子の前には四角の卓が置いてある。黒い蠅の點々と止まつた、木の葉の彫刻のある金縁の鏡の前も同様である。長椅子の前には、花に似た鳥や鳥に似た花の模様をついた絨毯が敷いてある。これがわが老夫婦の住んでゐたつましやかな家の裝飾のすべてである。

女中部屋は縞の下衣を着た若いのや年取つた女中で一杯だつた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナ



は時々何やかや用もない縫物をさせたり、苺を掃除させたりしたけれども、女中たちは大抵台所へ逃げて行つて、晝寝をする方が多かつた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは彼らを母屋へ置いて、嚴重に風儀を取り締るのを主婦としての義務と心得てゐたが、四五箇月に一度くらゐは女中の誰か彼かが只ならぬ體になるのを見て、びつくり仰天させられるのであつた。まして母屋の方には鼠色の半袖の上衣を着て、跣足で歩き廻り、何か食つてゐなければ決つて居睡りしてゐる走り使ひの男の子のほか、獨身者の男は誰一人ゐないのだから、尙さら不思議なわけである。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは大抵そんな場合、不都合を仕出來した女中に叱言を云つて、今後二度とそんなことがないやうにと申し渡すのであつた。窓には物凄い蠅の大群が硝子を鳴り響かしてゐると、それを壓倒するやうな土蜂のバスが入り交り、時々は黄蜂の甲高い唸りが伴奏を勤める。けれども蠟燭が点くや否や、これらの一味徒黨は己が塹へと急ぎ、天井を一面に眞黒にしてしまふのである。

アフアナシーイ・イヴーノヰッチはあまり領地の經營に身を入れなかつた。尤も、時々草刈や麥刈の現場へ出て行つて、みんなの働きぶりを可成り熱心に見守つてゐることもあつたが、全體として家政の切盛りといふ責任はプリヘーリヤ・イヴーノヴナの双肩に懸つてゐた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナの家政の切盛りは、のべつ納戸の鍵を開けたり閉めたり、量り知れぬ程の果

物や茸や野菜類を、漬けたり、乾したり、ジャムに作つたりすることに盡きてゐた。で、彼女の家は全く化學實驗室にそつくりそのままであつた。林檎の樹の下には年中火が燠してあつて、ジャム、ゼリー、パスタなどを入れた銅鍋が、鐵の五徳から下ろされることがなかつた。それは蜂蜜でつくつたもの、砂糖を台にしたもの、それから何で味をつけたもの、彼で匂をつけたものなど、一々覚えきれない。また別の木の下では、馱者が銅のラムビキでフォートカを蒸溜してゐる。これがまた桃の葉、野櫻の花、矢車菊、櫻ん坊の種など、いろいろ味のつけ方がちがつてゐる。この仕事がお終ひになる頃には、まるで舌も廻らない程の有様になつて、プリヘーリヤ・イヴーノヴナは何のことだかさつぱり合點が行かない。とどのつまり、馱者は台所へ行つて、ぐうぐう寝込んでしまふのであつた。まあ、かう云つた役にも立たぬものをしてこたま煮たり、漬けたり、乾したりするので、しまひには屋敷ぢゆう足の踏み場もないことになつてしまつたかも知れない(何故なら、プリヘーリヤ・イヴーノヴナは何時必要な分としてちゃんと割り出したもののか、なほ豫備の分まで造つておくのが好きだつたから)。ところが、いい按配に、これらのものは大半召使の女達に食ひつくされてしまふのであつた。彼等は納屋へ忍び込んで、その中で呆れ返るほど喰べちらす。そして終日うんうん喰つては、腹痛を訴へるといふ有様。

耕作その他、戸外勞働に屬する家政項目は、プリヘーリヤ・イヴーノヴナにとつては殆ど立ち



入ることの出来ない特種園であつた。で、支配人は名主とぐるになつて、遠慮會釋なく自分の懐を肥した。彼等は主人の森へ我物顔に入り込んで、夥しい數の櫛をつくらせ、それを最寄りの市場で賣るのを仕事にしてゐた。のみならず、大きな太い櫛は残らず伐り倒して、近在のコサック達に水車材として賣り飛ばしてしまふ。たつた一度だけ、プリヘーリヤ・イヴーノヴナは自分の森を検分したいと云ひ出した。そのために大きな革の膝掛のついた馬車ドロシキに馬が駕けられたが、馭者が手綱をしやくつて、以前民兵隊に徵發されてゐた馬が動きはじめると、異様な物音が空中に充ち擴がつた。笛、羯鼓、太鼓の響が一時に聞えて來たのである。一本々々の釘、一つ一つの鑿がぎぎいきしきし鳴るので、二露里から離れた水車場あたりからさへ、奥様がお邸をお出ましになつたことが分るくらゐであつた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは森がひどく荒らされてゐるのを見、まだ子供の時分から百年以上の老木と教へられてゐた櫛の木がなくなつたのに氣づいた。

「ニチボルヤ、どうしてお前、」と、彼女は傍についてゐた支配人に問ひかけた。「櫛の森がこんなに疎らになつたんだね？ お前の頭の毛もこんな風に疎すかくならないやうに氣をおつけよ。」

「どうして疎らになつたかですつて？」と支配人は大抵の場合答へるのであつた。「枯れたんでございますよ！ ただもう枯れてしまつたんで。雷に打たれたり、虫に蝕くべられたりして、——枯

れたんでございますよ、奥様、枯れてしまつたんで。」

プリヘーリヤ・イヴーノヴナはその返答にすつかり満足して、家へ歸つた時、庭のスペイン種の櫻と大きな冬梨の邊の見張りを一層嚴重にするやうにと吩咐めいひつけただけである。

支配人と名主といふこの世にも頼もしい監理者は、取れた粉を全部主人の倉へ搬び込むなんてまるつきり餘計なこと、且那方には半分もあつたら澤山だと決めてしまつた。擧句の果にはその半分も、市場でべけものにされた櫛の生えたのや、水に濡れたのを持ち込むやうになつた。しかし、支配人と名主が幾ら自分の懐へ捻ぢこんでも、女中頭を初めとして豚に至るまで、屋敷ぢゆうのものごどんなに食ひちらしても（豚は恐ろしいほど澤山の李や林檎を胃袋に納めたばかりでなく、自分の鼻面で樹をゆすぶつては、果物の雨を降らすのであつた）、雀や鴉がいくら啄ついても、召使ぜんたいがほかの村にゐる親類や友達のところへ、いくら土産物を運んでも、また古い布や糸をいくら倉から盗み出しても（それは一切のものの總元締である居酒屋へ納まつてしまふのである）、客や、うつそりもの馭者や、下男などが幾らくすねても、祝福されたる土地は常に豊饒な稔りを齎らす上に、アフアナシー・イヴーノギッチとプリヘーリヤ・イヴーノヴナの必要とするところは極めて些々たるものだつたので、かうした恐るべき掠奪も彼等の經濟にあつては、全然目にも入らないことになつてしまふのであつた。



老夫婦は昔氣質の地主たちの古くからの習慣で、食ることが何よりも好きだった。東が白んで来て（二人はいつも早起きであつた）、方々の屏がいろいろ音色のちがつた競奏曲を始めるか始めないかに、彼等は早くも卓に向つて珈琲を飲んでゐる。珈琲を飲み終ると、アフアナシー・イ・イヴーノギッチは入口の廊下へ出て、手巾を打ち振り打ち振り、鶯鳥を上り段から追つてゐる。「しつ！ しつ！ そんな所へ上るんぢやない！」内庭では大抵支配人に出くわす。老人はいつもの癖でこれと話をはじめ、いとも詳細に仕事の進行ぶりを質問し、よくもこれだけ領地經營のことを心得たものかなと、どんな人でも舌を巻くやうな注意を與へたり、命令を發したりする。これを聞いてゐると大抵の新參は、これほどよく目を光らせてゐる主人のものをくすねるなどとは思ひも寄らぬ、と考へたに相違ない。けれども、支配人は海千山千の代ものなので、そんな場合どう答へたらいいかは勿論、どんな風に切盛りしたらいいかを、充分に心得てゐるのである。

それからアフアナシー・イヴーノギッチは家へ歸つて、プリヘーリヤ・イヴーノヴナの傍へ寄り聲をかける。

「どうですね、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ、もう何か一口食べてもいい頃ぢやないか知ら？」  
「今時分なにを食べたのですかねえ、アフアナシー・イヴーノギッチ？ 煎餅に脂をつけた

のか、それとも罌粟入の肉饅頭か、でなければ鹽漬けの茸か？」

「さうだねえ、茸でもいいし、肉饅頭もわるくないな。」とアフアナシー・イヴーノギッチは答へる。——すると忽ち卓の上には布クロスが掛けられ、茸と肉饅頭が現はれるのだ。

晝食の一時間前に、アフアナシー・イヴーノギッチは古い銀の盃でフォトカを一杯きこしめし、茸とかその他さまざまな乾魚じものを肴にする。晝食の卓につくのは正十二時である。料理の皿やソース入れのほか、卓の上には夥しい小壺類が並べられるが、その小壺類たるや、昔から一家の秘傳になつてゐる美味が、ひよつと何かの間違で味の變らないやうにと、蓋にちやんと蠟が塗つてあるのだ。食事のあひだに交はされる會話は概ね食事そのものに縁のあることばかりである。

「私はどうもこの粥カシヤが少し焦げついてるやうな氣がするが、」とアフアナシー・イヴーノギッチは先づこんな風のことを云ひ出す。「あなたはさう思はんかね、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ？」

「いいえ、アフアナシー・イヴーノギッチ。あなたもつと澤山バタを入れて御覽なさいよ、さうしたら焦げ臭いやうな氣なんかしないでせうよ。さもなければ、そら、その茸入りのソースをかけて御覽になつたら。」

「それもさうだな、」とアフアナシー・イヴーノギッチは皿を差し出しながら答へる。「一つや



つて見ませう、どんな具合か。」

食後、アファナーシイ・イヴーノギッチは寢室へ一と休みと出掛けて行く。目の醒めた頃に、プリヘーリヤ・イヴーノヴナが西瓜を切つたのを持って行つて、「アファナーシイ・イヴーノギッチ、一つ召上つて御覽なさいまし、とてもいい西瓜ですから。」

「プリヘーリヤ・イヴーノヴナ、芯まで赤いからつてうっかり當てになりませんよ。」とアファナーシイ・イヴーノギッチは、かなり大きな切れを取りながら云ふ。「赤くつても美味くないのがあるからね。」

しかし、西瓜は立ちどころになくなつてしまふ。その後でアファナーシイ・イヴーノギッチはなほ幾つかの梨を平けて、プリヘーリヤ・イヴーノヴナと一緒に庭へ散歩に出かける。家へ歸ると、プリヘーリヤ・イヴーノヴナは自分の用事にかかるし、老人の方は内庭に面した片庇の下に腰をおろし、納戸が幾度となくその内臓を見せたり匿したりするのを眺めてゐる。女中どもは互に押し合ひ突き合ひしながら、さまざまの品物を木箱や、飾や、籠や、その他果物入れなどに入れて、納めたり取り出したりしてゐる。暫くすると、彼はプリヘーリヤ・イヴーノヴナのところへ使をやるか、さもなくば自分で足を運んで云ふのであつた。

「プリヘーリヤ・イヴーノヴナ、何か一寸たべるものはないかな。」

「何がいでせうね？」とプリヘーリヤ・イヴーノヴナは云ふ。「一つ行つて、莓入りの玉子でも持つて来るやうに云ひませうかねえ。わたしがわざわざあなたに残しておくやうに吩咐ひつけないんですの。」

「それもよからう。」とアファナーシイ・イヴーノギッチは答へる。

「それとも果汁入の片栗にませうか？」

「それでも結構。」とアファナーシイ・イヴーノギッチは應へる。

やがて、さういつたものが即座に運ばれ、いつもの如く即座に平らげられる。

夜食の前に、アファナーシイ・イヴーノギッチはまた何か一口やる。九時半になると夜食の卓につく。夜食が済むと、さつそく就寝といふことになる。するとこの忙しい、と同時に安穩な家は、どこもかしこも静寂の支配に入つてしまふのであつた。

アファナーシイ・イヴーノギッチとプリヘーリヤ・イヴーノヴナの寝む部屋は無暗に暑くしてあつて、その中に二三時間もをられるものは滅多にない位であつた。ところがアファナーシイ・イヴーノギッチは、その上にもなほ暖いのが好きで、臥煖爐の上で寝むことにしてゐた。その癖、強い熱氣のために夜中に幾度も起き出しては、部屋の中を歩きまはることもしよつちうだつた。どうかすると、アファナーシイ・イヴーノギッチは部屋の中を歩きながら、唸り出すことが



あつた。

その時プリヘーリヤ・イヴーノヴナが聲をかける。

「何を喰つてらつしやるの、アフアナシー・イヴーノギッチ？」

「何だかよく分らないんだよ、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ。少々お腹が痛むやうな氣もするし。」とアフアナシー・イヴーノギッチは答へる。

「何か一口たべて御覽になつたらよくないでせうか、アフアナシー・イヴーノギッチ？」

「さあ、それが本當にいいか知らんて、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ！ もつと食べてみるかな何にしよう？」

「酸っぱい牛乳か、それとも乾梨の砂糖煮を召し上つたら、お汗を薄くして。」

「まあ一つ、ほんの試しに。」とアフアナシー・イヴーノギッチは云ふ。

寝惚けまなこの女中が行つて戸棚の中を掻き廻す。かうしてアフアナシー・イヴーノギッチは一皿ぺろりと平らげてしまふ。その後で、「これでどうやら樂になつたやうだわい。」と云ふのが決り文句である。

時にはまた、晴天つづきで、部屋の中が煖爐でかなりよく暖まつてゐるやうな時など、アフアナシー・イヴーノギッチはよくはしやぎ出して、プリヘーリヤ・イヴーノヴナをからかつて、

飛んでもないことを云ひ出すのであつた。

「どうだらう、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ、」と彼は云ふ。「もしひよつと家が火事で燃え出したら、何處へ逃げたものだらうねえ？」

「まあ、滅相もないことを！」とプリヘーリヤ・イヴーノヴナは十字を切りながら云ふ。

「まあさ、假りに家が焼けてしまつたら、その時はどこへ行つたものかねえ？」

「アフアナシー・イヴーノギッチ、あなたつたらまあ何てことを云ひ出しなさんでせう！ この家が焼けてしまふなんて、そんなことがあつていいのですか？ 神様がそんな罰をお下しになりやしませんよ。」

「でもまあ、萬が一焼けてしまつたらさ？」

「まあ、その時は勝手の方へ移るんですね。あなたは暫くの間、女中頭の住んでる部屋へお入りになるんですよ。」

「もし勝手も焼けてしまつたら？」

「まだあんなことを！ 母屋も勝手も一時に焼けてしまふなんて、そんなひどい目には神様がお遣はせになりやしませんよ！ でも、その時は新築が出来上るまで、納屋にでも入らなくちや。」

「でも、ひよつと納屋まで焼けてしまつたら？」



「あなたは何てことを云ひ出しなさんでせう！もう聞いちやゐられませんか！そんなこと仰しやるのは罪ですよ、そんなことを云ふと神様のお罰が當りますから。」

けれども、アファナーシイ・イヴーノギツチは、プリヘーリヤ・イヴーノヴナをからかつたのに満足した様子で、椅子に腰かけたままにたにた笑つてゐる。

しかし、この老夫婦が私にとつて最も興味ふかく感じられたのは、彼らのところへ客が来た時である。その時は家の中が何處から何處まで、すつかり相貌を一變してしまふのであつた。この善良な老人達は客のために生きてゐた、と云つても過言ではあるまい。彼らは自分達の大切にしているものを、一切合切出してもてなすのだ。自分達のところで出来たものを何から何まで出して、客を饗應しようとする大童になる。が、私の目に何より氣持よく映つたのは、彼等のもてなし振にわざとらしい甘つたるさが露ほどもなかつたことである。この心づくしがつつましかつたやかな驕となつて二人の顔に現はれ、しかもその表情が如何にも二人に似つかはしいので、客の方でも知らず識らず主人達の乞ひを容れざるを得なくなる。それは二人の善良で素朴な、單純で明るい魂から自然に流れ出たものである。彼等の款待<sup>もてなし</sup>しぶりは、例へば誰かの世話で一人前になつた官吏が、恩人々々といつてその人の足もとに平つくばひながら款待するのは、全然おもむきが違ふのである。客は金輪際その当日は歸して貰へない。是が非でも泊らなくてはならないのである。

「こんなに遅がけからどうしてあんな遠道が出来ますか！」とプリヘーリヤ・イヴーノヴナは何時<sup>ど</sup>も云ひ云ひした。(そのくせ客は大抵三四露里のところに住んでゐるのだ)。

「さうだとも、」とアファナーシイ・イヴーノギツチは相槌を打つ。「萬々が一どんな事が起らんとも限りませんからな、強盜に襲はれるとか、それとも又ほかのよくない奴に出會すとか。」

「強盜なんて滅相もない！」とプリヘーリヤ・イヴーノヴナは云ふ。「もうすぐ夜になると云ふのに、何だつてそんな話をなさるんですの？強盜などはさておいても、暗い夜道を行きなさんなんて、そんなことはとてもとても。それにお宅の馭者も……わたしはお宅の馭者をよく知つてをりますが、あれは華奢な男で、おまけに柄が小さうございますから、どんな牝馬にだつて蹴とばされてしまひますよ。それに、今ごろはもうきつと酔ひつづれて、何處かで寝てゐるに違ひありません。」

かういつた次第で、客は否でも應でも泊らなければならぬ。とは云ふものの、天井の低い暖い部屋で過す一夜、心を暖め眠らすやうな真心の籠つた話振、食卓に出された品々から立ち昇る湯氣、いつも滋養があつてしかも手際のよい料理、これらは客にとつて常に變らぬ報酬なのであつた。アファナーシイ・イヴーノギツチが、いつも變らぬ微笑を顔に浮べて、背を屈めながら椅子に腰かけ、注意深い、といふより寧ろ愉しげな様子で、客の話に耳を傾けてゐる光景を、私は



今でもまさまじ目の前に見る思ひである。話題は屢々政治の上に及んだ。これも御同様、ごくたまにしか村を出ることのない客が、さも勿體らしい顔つきをし、神祕らしい表情さへ浮べながら、臆測を逞しうするのであつた。それはフランスがイギリスと同盟を結んで、又ぞろロシアへボナパルトを差し向けようとしてゐる、と云つたやうな話であつたが、時にはただ近い中に戦争が始まるだらう、といった風の噂話が持ち出されることもあつた。そんな時には、アフナーシイ・イヴーノギッチは、プリヘーリヤ・イヴーノヴナの顔を見ないやうな振をしながら、よくこんなことを云つた。

「私も一つ自分で戦争に行かうと思つとりますよ。私だつて戦争に行かれんことはありませんな！」

「あれまあ、あんなことを云ひ出しなすつた！」とプリヘーリヤ・イヴーノヴナは遮る。「あなた、本當になすつちやいけませんよ。」と今度は客の方に話しかける。「あんな年をして、どうして戦争になんか行けるもんですかね！ 眞つ先に射ち殺されてしまひますよ！ ええ、ええ、射ち殺されますとも！ こんな風に狙ひをつけて、射ち殺してしまひますよ。」

「なあに、」とアフナーシイ・イヴーノギッチは云ふ。「私だつて敵を射ち殺してやるから。」

「まあ、あなた、聞いて下さいよ、あんなことを云ふんですからねえ！」とプリヘーリヤ・イヴ

ーノヴナは訴へる。「あんな人がどうして戦争に行けるものですか！ 鐵砲だつて疾うの昔に錆びてしまつて、納戸に突つこんだままになつてゐるんですからねえ。まあ、その鐵砲を見てやつて下さいまし、そりやひどいものでしてね、射つよりも先に、火薬が爆發してぶつ毀れてしまひさうなんです。両手がふつ飛んで、顔は二目と見られないやうになつて、一生不しあはせの身の上になつてしまふんですから！」

「なあに、」とアフナーシイ・イヴーノギッチは云ふ。「私は新しい兵器を買ふよ、サーベルか、それともコサック風の槍を持つて行く。」

「あれはみんな出たらめなんですよ。何かふと頭に浮んでくると、すぐにぺらぺら喋り出すんですからね！」プリヘーリヤ・イヴーノヴナが忌々しさうに引き取つた。「わたしだつて、あれが冗談だつてことは承知してゐるんですけれど、それだつてやつぱり厭ですものね。この人つたら何時でもあんなことばかり云ひましてね、どうかすると聞いてゐて恐ろしくなることがありますよ。」

しかしアフナーシイ・イヴーノギッチは、ちよつぱりプリヘーリヤ・イヴーノヴナを嚇かしてやつたぞと満悦の體で、背を屈めて椅子に腰かけたまま、あはははと笑つてゐる。

プリヘーリヤ・イヴーノヴナが私の目に何よりも好もしく思はれるのは、客を前菜の卓へ案



内した時である。

「これはね、」と彼女は壘の口を取りながら云ふ。「鋸草とサルピヤで味をつけたヲートカですの。肩胛骨や腰が痛むときなんか飲むと、大層よく利きますんで。これは矢車菊で味をつけた分です。と、耳鳴りがしたり、顔にはたけが出来たりした時に頂きますと、大層ききめがございませう。ところが、これは桃の核で味をつけたヲートカでして、まあちよつと一杯めし上つて御覽なさいませ、それはそれはいい薫りがいたしますから！ よく寝台から下りる拍子に戸棚の角や卓におでこを打つつけて、瘤なんかが出来たやうな時なんか、食事の前にこれを一杯いただきますと、早速きれいに癒つてしまひます。それこそもう即座に、痕かたもなくなつてしまひますので。」

その後から引きつづいて、その他の壘についても一々説明が與へられるのだが、それらが殆んど一つ洩れなく、あらたかな靈驗を持つてゐるのであつた。かういつた薬の水を残らず客に處方した後、今度は別の卓に並べられた夥しい料理の方へ引つぱつてゆく。

「これは伊吹麝香草で匂をつけた茸ですの！ これは丁字の胡桃入りの分。この漬け方をわたしに教へてくれたのはトルコ女でございます、まだトルコの捕虜がこちらにゐた時分のことでしたつけ。とても心立てのいい女でしたね、回々教なんか信じてるとは思はれなくらゐりましたよ。」

よろづの取りなしがすつかりこちらと同じなんですの。ただ豚肉だけは頂きませんでした、何ですか向うでは法律で差し止められてるとか申しましてね。ところでこれはスグリの葉と肉荳蔻と一緒に漬けた茸でございます！ これは姫撫子、わたしは初めてこれを酢煮にして見ましたが、どんな風でございますか知ら。イヴン神父さまから祕傳を教へて頂いたんですの。小さな樽の中にまづ第一番に榲の葉を敷きまして、その上に胡椒と硝石をばらばらつと撒きましてね、それからもし豚肥の花がありましたら、その花を取つて来て、尻尾の方を上にして並べます。それから、これは肉饅頭！ これはチーズ入り！ これは甘乾酪入り！ ところで、これはアフアナシー・イヴーノギッチの大好物でしてね、キャベツと蕎麥粥を入れた肉饅頭でございますの。「さやう、」とアフアナシー・イヴーノギッチが付け加へる。「私はそれが大好物なんです。柔くつて、ちよつと酸っぱみがありましたな。」

概してプリヘーリヤ・イヴーノヴナは、客さへあれば機嫌がよいのであつた。善良な老婆！ 彼女は全身を擧げて客に捧げてゐたのである。私はよく好んで彼等の家へ遊びに行つた。そして、ここへ客に来たすべての人の例に洩れず、體に悪いと知りつつ、恐ろしく暴飲暴食したものだ、それにも拘らず、私はいつも悦んで彼等の家を訪れたのである。それにしても、小ロシヤでは空氣までが食物の消化を助けるやうな、なにか特殊な性質を持つてゐるのではないか、と私



は思ふ。何故なら、もし誰かこちらであんな風に牛飲馬食しようなんて料簡を起さうものなら、それこそ眼が醒めて見たら寢床の中でなしに、棺の中に入つてゐた、と云ふやうな事になるに相違ないからである。

氣立てのいい老人達！　しかし私の物語も次第に悲しい出来事に近づいてくる。この出来事こそはこの平和な一隅の生活を、永久に一變さしてしまつたのである。しかも、ごくつまらない偶然がもととなつただけに、なほ驚嘆の念を禁じ得ないのである。が、世の中のことは不思議に出来てゐるもので、いつも些細な原因が大事件を生み出し、又その反対に偉大な功業が取るに足らぬ結末を告げるのである。征服慾に富んだ王がありたけの國力を傾けて、幾年も幾年も戦ひを續け、將軍達は赫々の武名を輝かすが、とどのつまりは、馬鈴薯を蒔くところもない小つぽけな領地の獲得でけりになつてしまふ。かと思ふと、あべこべに、どこか二つの町の勝語屋が二人、つまらぬ事で喧嘩を始めたところ、その纏れが段々町から町、村から村へと擴がつて行つて、遂には國ぢゆうがその中へ巻き込まれてしまふこともある。しかし、こんな理窟っぽい話はやめとしよう、この物語にはちと不向きだし、それに私は單なる理窟のための理窟が好きでないから。

プリヘーリヤ・イヴーノヴナは灰色の牝猫を飼つてゐた。この牝猫は殆どいつも香箱をつくつて、老夫人の足もとに臥てゐたものである。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは、時をりこの猫を撫

でたり、指で頸筋をくすぐつたりした。すると甘やかされた猫は出来るつたけ頸を高く伸すのであつた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは非常に猫好きといふわけではなかつたけれども、年ぢゆう見馴れてゐるために、自然と愛情が湧いて來たのである。ところが、アフアナシー・イヴーノギツチは、よくこの愛情を冷やかして、こんなことを云つた。

「プリヘーリヤ・イヴーノヴナ、いつたい猫のどういふところがあなたの氣に入つたのか、とんと合點が行かないね。猫なんて何になるのだらう？　まあ、犬でも飼つてゐるのなら、これはまた話が別だ。犬は獵につれて行くことも出来るが、猫なんか何にもなりやしない。」

「よして下さいよ、アフアナシー・イヴーノギツチ」とプリヘーリヤ・イヴーノヴナは云ふ。「あなたはただそんなことが云つて見ただけなんです。犬つて穢いもので、方々汚して歩し、何でも物を毀して仕様がないうちやありませんか。ところが、猫はおとなしくつて、誰にも何一つ悪いことをしやしませんからね。」

尤も、アフアナシー・イヴーノギツチに見れば、猫だらうが犬だらうが、どつちだつてお構ひはない、ただプリヘーリヤ・イヴーノヴナを一寸からかつて見るためにさう云つただけなのである。

老夫婦の家の後ろに大きな森があつた。これは強慾な支配人もてんから手をつけようとした



い、と云ふのは、恐らく斧の音がプリヘーリヤ・イヴーノヴナの耳に入る惧れがあつたからであらう。森は鬱蒼として人跡を絶ち、老樹の幹は生ひ蔓こる胡桃の枝に包まれて、さながら和毛に蔽はれた鳩の脚のやうであつた。この森の中に野生の猫が棲んでゐたのである。森に棲む野良猫を家々の屋根を飛び歩く野良猫と混同してはならない。野良猫は町に棲んでゐるために、気性はすゝぶん荒いけれども、森の住人に比べると遙かに文明開化の光に浴してゐる。ところが森に棲む野猫と來たら、概ね陰慘であり、野蠻である。彼等はいつも瘠せ細つてゐて、がさがさした磨きのかからない聲で鳴き立てながら歩きまはつてゐる。彼等はどうかすると土の下に隧道を掘つて、納屋の中へ忍び込み、脂などを盗むのだ。それどころか、料理人がブリヤン草の高い繁みの中へ入つて行くのを見すまして、いきなり開いた窓口から台所へ飛び込むことさへある。一口に云へば、上品な感情などといふものは彼等のあづかり知らぬところで、掠奪を仕事にし、巢の中にある小雀などを殺して食ふ。この野性の猫どもが納屋の下の抜穴ごしに、プリヘーリヤ・イヴーノヴナのおとなしい飼猫と慰懃を通じ、ちやうど兵士の一隊が愚かな百姓娘をかどはかすやうに、家からおびき出してしまつたのである。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは自分の飼猫が行方不明になつたのに気がつくと、さつそく召使に吩咐つけて探させた。が、猫は出て來なかつた。それから三日過ぎた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは可哀さうにと云つてゐたが、やがてさつぱりと忘れてしまつた。

ある日、彼女が自分の菜園を檢分に行つて、アフアナシー・イヴーノギッチに食べさせる水らしい胡瓜を手づから千切つて、家へ引つ返さうとした時、さもさも哀れつばい猫の啼き聲が彼女の耳朶を打つた。彼女はほとんど本能的に、「ちつ、ちつ！」と舌を鳴らして呼んだ。と、不意にブリヤン草の中から例の灰色猫が出てきた。見る影もなく瘠せさらばえて、もう幾日も食べものを口にしないらしい様子がありありと見えてゐた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは尙も呼びつづけてゐたが、猫はその前に立つて、にやごにやごと啼くばかり、近く寄らうとはしなかつた。どうやら、失踪以來ひどく野性化してしまつたらしい。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは相變らず呼びつづけながら、先きに立つて歩き出した。すると猫はその後からおおづとおづと垣根のところまでついて來た。やがて以前の馴染の場所を見ると、部屋の中にまで入つて來た。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは猫に牛乳と肉をやるやうに吩咐つけた。そして傍に坐り込んだまま、哀れな有様になつた飼猫が貪るやうに肉を呑みこみ、牛乳をびちやびちや舐める有様を、さも楽しげに眺めてゐた。灰色の家出娘はほとんど彼女の見てゐる目の前で肥つて行き、その中にもう餘りがつがつと食らなくなつた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは、手を差し伸べて撫でようとした。

\* 用便のためである。



が、恩知らずの畜生は察するところ、もうすっかり森の中の野猫どもに狎れてしまったのか、それとも好きな人と一緒なら茅屋も御殿にまさる、といふ浪漫的な原則にかぶれたのか（野猫どもは裸一貫の色男であつた）、いづれにもせよ、いきなりひらりと窓から外へ跳び出した。召使たちも誰一人この猫を捕へることが出来なかつた。

老夫人は考へ込んでしまつた。

「これは死神がわたしを迎へに來たのだ！」と彼女は獨りごちた。それ以來、何をしても、何をしても、何をしても、彼女の心を紛らすことが出来なかつた。彼女は終日うかぬ顔をしてゐた。アファナーシイ・イヴーノギツチはいろいろ冗談を云つて、なぜ急にさう鬱ぎ込んだのかと譯を訊かうとしたけれども、一向にその甲斐がなかつた。プリヘーリヤ・イヴーノヴナは何一つ返事しないか、返事しても、アファナーシイ・イヴーノギツチの得心が行くやうな説明を與へなかつた。その翌日、彼女は目立つてげつそり瘠せてしまつた。

「一體あなたどうしたんだね、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ？ 病氣にでもなつたのぢやないかねえ？」

「いいえ、病氣ぢやありません、アファナーシイ・イヴーノギツチ！ 實はわたし一つ特別なことをあなたにお知らせしようと思つて。わたしはこの夏死んで行きます、それはちゃんと分つて

をりますの。死に神がわたしを迎へに來たんですから！」

アファナーシイ・イヴーノギツチの唇は奇しく歪んだ。とは云へ、自分の内部に浮んだ佻しい氣持を壓倒しようとして、につこり笑ひながら云つた。

「とんでもない、何を云ふのだね、プリヘーリヤ・イヴーノヴナ！ あなたはきつと、何時も飲む藥酒の代りに、桃の核のヲートカを飲んだんだらう？」

「いいえ、アファナーシイ・イヴーノギツチ、わたしは桃の核のヲートカなんか飲みはしません。」とプリヘーリヤ・イヴーノヴナは答へた。

アファナーシイ・イヴーノギツチは、あんなことを云つてプリヘーリヤ・イヴーノヴナをからかつたのが可哀さうになつて來た。彼はじつと老妻を見つめてゐる中に、涙が一雫その睫毛に宿つた。

「アファナーシイ・イヴーノギツチ、どうぞ後生ですから、わたしの願を叶へて下さいな。」とプリヘーリヤ・イヴーノヴナは云つた。「わたしが死んだら、お寺の石垣のそばに葬つて下さいよ。そして着物は鼠色のを着せて貰ひたいんですの、ほら、鶯色の地に小つちやな花の、ついで分です。赤縞の繻子の着物なんか着せて下すつちやいけませんよ。死人にはもう着物なんか要りません、着物なんか何にしませう？ ところが、あなたにはそれが役に立ちます。あれを縫ひ變



へて、晴れの部屋着をお拵へなさいな、お客様が見えた時お會ひになつても不體裁でないやうにね。」

「プリヘーリヤ・イヴーノヴナ、まあ何てことを云ひ出すんだね！」とアフアナシー・イヴーノギッチは遮つた。「死ぬなんてまだ何時のことやら分らないのに、あなたはもうそんなことを云ひ出して人を嚇かすんだものな。」

「いいえ、アフアナシー・イヴーノギッチ、わたしは自分がいつ死ぬかやんと知つてをります。でもね、あなた、わたしのことで餘りくよくよしないで下さいよ。わたしはもうお婆さんで、ずるぶん長生きしたんですし、あなたももういい年なんですから、間もなく又あの世で會ひますよ。」

けれども、アフアナシー・イヴーノギッチは、子供のやうにしやくり上げて泣いた。

「泣くのは罪ですよ、アフアナシー・イヴーノギッチ！ そんなに歎いて罪を重ねたり、神様のお怒りを招いたりしないで下さい。わたしは自分が死ぬことなんか何ともありやしません。ただ一つ気がかりなのは（重い溜息がいつとき彼女の言葉を杜切らせた）、わたしの気がかりなのは、あなたを誰に頼んで行つたらいいか分らないからです。わたしが死んだら、いつたい誰があなたの面倒を見ることせう。あなたはまるで小つちやな子供みたいなんですもの。あなた

の世話を焼く人に情愛がなくなつちや駄目ですからねえ。」

さう云つた時、彼女の顔には脇も切れんばかりの深い心からなる哀惜の情が浮んだ。果して誰かそれを見て恬然としてゐられるものがあるだらうか、私は疑なきを得ない。

「いいかえ、ヤヴドーハ、」と彼女はわざわざ呼び寄せた女中頭に向つて、かう云ふのであつた。「わたしが亡くなつたら、且那樣のお世話をし上げて上げるんだよ。且那樣を自分の眼まなこのやうに、わが生みの子のやうに大切にしなくちやいけないよ。お料理は且那樣のお好きなものを作るやうに、お召物や肌着は何時も綺麗なのを出して差し上げるやうに、お前がちゃんと氣をつけるんだよ。それからお客様が見えたら、且那樣にきちんとした服装なびをおさせ申すんだよ。さもないと、どうかすると古い部屋衣なんか召してお出になることがあるから。何分にも、今だつて且那樣は何時が祭日やら、何時が平日やら、よくお忘れになるんだものね。且那樣から目を放しちやいけないよ、ヤヴドーハ、わたしはあの世にゐてもお前のためにお祈りして上げるから、神様から有難いお報いが授かると云ふものだ。忘れちやいけないよ、ヤヴドーハ、お前はもう大分の年で、この世に暮すのももう長いことぢやないんだから、罪をつくつて靈の救ひの邪魔になるやうなことをおしでない。お前がよく且那樣のお世話をしてくれなかつたら、あの世へ行つても仕合せが授かりやしないよ。わたしだつて神様にお願ひして、お前がろくな死にさまをしないやうにして



やるから。お前が不仕合せになるばかりぢやない、お前の子供等も不仕合せになるし、一家眷族がみんな神様に祝福して頂けないんだから。」

しほらしい老婆！ 彼女はそのとき自分を待ち設けてゐる偉大なる瞬間のことも、自分の靈の救済といふことも、自分の來世といふことも考へはしなかつた。彼女はただ一生苦樂をともにして來た生涯の伴侶が、頼りない淋しい身の上になつて只一人とり殘されると云ふことだけしか考へてゐないのであつた。彼女はついぞない程の性急さで、自分の死後アフアナシー・イヴーノギッチが、自分の亡くなつたことを感じないやうにと、何から何まで處置をつけた。間もなく自分分は死ぬのだと云ふ確信が固く彼女の内部に根を張つて、すつかりその氣になり切つてゐたので、四五日すると本當にどつと寝ついてしまひ、もう食べものが一切喉を通らなくなつてしまつた。アフアナシー・イヴーノギッチは全身これ注意と化して、老妻の病床から一步も傍を離れなかつた。

「プリヘーリヤ・イヴーノヴナ、何か一寸食べて見たらどうだね？」と彼は不安げに妻の顔を覗き込んで、かう云ふのであつた。

けれども、プリヘーリヤ・イヴーノヴナは、何一つ口をきかなかつた。長い沈黙の後、やつとのこと何か云はうとするらしく、唇をもぐもぐと動かしたと思ふと、——こときれてしまつた。

アフアナシー・イヴーノギッチの受けた打撃は一方ならぬものであつた。あまり途方もないことに思はれて、泣くことさへも出来なかつた。彼はどんよりした眼で妻を見つめてゐたが、それは死骸といふものの意味がわからないかのやうであつた。

亡き人は卓の上に安置せられ、遺言通りの着物をきせられ、両手を十字に組み合せ、指には蠟燭を挟んで貰つた。——が、彼はそれらすべてを無感動の表情で眺めてゐた。ありとあらゆる種類の夥しい人が屋敷を充した。會葬者の類も大したものであつた。長い卓が幾つも幾つも内庭に据ゑられ、蜜飯、味附のヲートカ、肉饅頭の類がその上に隙間もなく並べられた。客人達は故人を見て、泣いたり、喋つたり、故人の爲人ひとなかりを語り合つたりして、アフアナシー・イヴーノギッチを見やるのであつた。しかし彼は何か奇妙な眼つきで、それらの有様をぼんやり眺めるのみであつた。遂に亡骸が運び出され、人々はどつとその後につづいた。で、彼も同じやうに歩いて行つた。司祭達は盛装をしてゐた。太陽はさんと輝き、乳呑兒は母親の腕の中で泣き、雲雀は囀り、子供達はシャツ一枚で往來を駈け廻り、道端でふざけてゐる。つひに柩は穴の上に置かれた。彼は傍へ寄つて、この世の名残りに故人を接吻するやうにと云はれた。彼は傍へ寄つて、接吻した。その眼には涙が浮んだが、それは妙に無感情の涙であつた。柩は穴の中に下ろされた。司祭は鋤を取つて、まづ第一番に一塊の土をかけた。永遠の記憶を歌ふ番僧と一人の寺男の厚み



のある、長々と引き伸ばしたやうな合唱が、雲一つない澄み渡つた空の下を流れた。人夫どもが鋤を取つた。やがて土は早くも棺を蔽つて、穴を平らにしてしまつた。その時、彼は群衆を分けて前へ進み出た。人々は何をする積りなのだらうと思ひながら、さつと左右に分れて道を譲つた。彼は兩眼を上げて、ぼんやりと空を眺めながら云ひ出した。

「では、あなた方はもうあれを葬つておしまひなすつたんですな！　なんだつて!?……」と云ひさして、言葉を終らなかつた。

けれども家へ歸つて来て、部屋の中ががらんとしてゐるのを見、今までプリヘーリヤ・イヴーノヅナの掛けてゐた椅子までが取り片附けられてしまつたのを見ると、彼はしやくり上げて泣いた、何と慰めやうもない程はげしく泣いた。涙は瀧のやうにどんよりした兩眼から流れるのであつた。

それから五年の月日が経つた。如何なる悲しみも時の力には敵はない。如何なる情熱と雖も時に向つては太刀打が出来ず、衰へて行くよりほかはない。私はある一人の男を知つてゐた。まだ血氣さかんな青年で、高潔な心情に満ち、あまたの美點を身につけてゐたが、この男が戀をしたのである。その戀たるや、優しいと同時に熱烈で、物狂ほしく向う見ずであると共につつましやかであつた。ところがその熱情の對象である天使のごとく可憐な美しい少女が、貪婪飽くなき死

の手に掴まれたのである。それは殆んど私の目の前に行はれた事實なのである。その時この不幸な戀人の經驗したやうな恐ろしい苦惱、氣も狂ふばかりの鋭い憂悶、腸を斷つやうな絶望の發作は、後にも先にもついぞ見たことがないほどである。およそ人間が自分自身であれ程の地獄を創り出すことが出来ようとは、私も曾て今まで思ひも初めなかつた。そこには影もなければ形もなく、幾らかでも希望に似たやうなものすら何一つないのだ……人々は一心に彼から目を放さないやうにし、自害の道具となりさうなものは悉く隠してしまつた。二週間ばかり経つた時、青年は急に我とわが心に打ち克つて、笑聲も立てるやうになれば冗談も云ふやうになつた。で、はたの者も氣を緩めて氣儘にさせたところ、彼は早速その自由を利用してピストルを買つた。ある日おもひがけなく響き渡つた一發の銃聲は、家人を吃驚仰天させた。部屋へ駆け込んでみると、青年は頭蓋骨を撃ち貫いてその場に倒れてゐた。そのとき偶然、名醫の譽れの轟き渡つた國手がゐ合せたが、まだ手負ひには脈があり、傷もあながち致命的のものではないとの見立てだつた。さうして不思議にも全快した。が監視は前にもまして嚴重になつた。食事の時でさへ、彼のそばにはナイフを置かないやうにし、何か身を傷つける武器えものとなりさうなものは一切遠ざけるやうに氣をつけた。けれど間もなく、青年は隙を狙つて、通りかかつた馬車の轍に身を投じた。彼は手も足も滅茶々にされたが、それでも再び全治したのである。そのことがあつてから一年たつた時、私は



大勢人の集つたさる社交界の廣間<sup>カール</sup>で彼を見かけた。彼は卓に向つて座を占め、一枚の骨牌を伏せながら、「やつと助かつた」と愉快さうな調子で云つた。その後ろには、彼の坐つた椅子の背に凭れながら、新妻が良人の得點をしらべてゐた。

前に述べた通り、プリヘーリヤ・イヴーノヴナの死後五年してから、私はその地方へ出かけた序でに、アフナーシイ・イヴーノヰツチの莊園へ寄つて見た。かつて快い一日をすごし、客好きな主婦の心をこめた料理の品々に満腹した、あの昔馴染の家を訪れてみたかつたのである。馬車が屋敷へ近づいた時、私はこの家が以前の倍も古びてしまつたやうに思はれた。百姓達の住家も半ば倒れてしまつてゐるところは、疑もなく主人と運命を共にしたものであらう。内庭の柵や編垣は全く崩れ落ちてゐた。これは私が確かにこの眼で見たことなのだが、台所女中はほんの一足も歩けば、すぐそこいらに粗朶が一杯ころがつてゐるのに、編垣から棒つきれを引き抜いて籠の焚きつけにしてゐる始末である。私は暗然として車寄せに乗りつけた。昔馴染のバルボースやブローフカども。——但しもう眼がつぶれたり脚がびつこになつたりしてゐる番犬どもは、牛蒡の實のいつばい食つついてゐる毛のもしやもしやした尻尾を立てて吠え出した。そこへ一人の老人が出迎へた。ああ、それがあの人なのだ！ 私はすぐにそれと見分けがついた。けれども當人はもう以前に比べて倍も腰が曲つてゐる。老人は私に氣がついて、例の見覚えのある微笑を浮べ

て挨拶を述べた。私は彼の後から部屋へ入つて行つた。一見したところ、その中は何もかも昔のままのやうであつたが、私は何處を見ても何か妙にだらしのないやうな、何か缺けたものがあるやうな感じがしてならなかつた。要するに、今まで一生離れることのなかつた妻に死別した鰥夫の住居を、はじめて訪れた人の経験する奇妙な心持、これこそ私がその時いだいた感じなのである。それは、何時も丈夫だつた人が片脚なくしたのを目の前に見る心持に似通つてゐる。何を見ても、あの細やかに氣のつくプリヘーリヤ・イヴーノヴナの亡くなつたことが、今さらのやうに思ひ起されてならない。食卓に出されたチーフなども、一挺は柄がとれてゐる始末。料理も今ではあれほど手並が鮮かでない。家事のことなど私は訊ねて見ようともせず、經濟關係の施設は覗くのも怖いやうな氣がした。

私達が食卓についた時、女中がアフナーシイ・イヴーノヰツチの頸にナプキンを縛りつけた。それも大きに尤もなことで、もしさうしなかつたら、老人は自分の部屋衣をソースで汚點だらけにするところであつた。私は何とかして彼の氣を紛らさうと思つて、いろいろ珍らしい世間話をして聞かせた。老人は例のごとき微笑を浮べて聞いてゐたが、どうかするとその眼つきは全く無感覺になり、そこには思念の影がそこはかとなく逍遙つてゐると云ふよりは、むしろ消えがてになるのであつた。よく彼は匙で粥をしやくつて、それを口へもつて行く代りに鼻へもつて行



つた。フォークも雞肉に突き刺す代りに、フォークの塚へ持つて行きなどするので、女中がその手を執つて雞肉の方へ向けてやると云ふ始末である。時とすると、私達は暫くのあひだ次の料理を待たされることがあつた。アフアナシー・イヴーノギツチでさへそれに気がついて、

「どうしてかう何時までも料理が來ないのだらう？」と云ふ。

ところが、私が戸の隙間からちらりと見たところによると、給仕番の少年はそんなことなど夢にも考へず、床几に首をぐつたり落して居睡りをしてゐるのだ。

「これがその料理なんで。」と酸乳入りのムニーシキが出た時、アフアナシー・イヴーノギツチは云つた。「これがその料理なんで、」と彼は言葉をつづけたが、私はその聲が慄へを帯び、鉛のやうにどんよりした眼から涙が落ちさうになつてゐるのに気がついた。けれども彼はそれを押しこたへやうと懸命の努力をしてゐるのであつた。「これがその料理なんで、つまり死……死んだ……死んだ婆さんが……」とここまで云ふと、不意に涙がはらはらと滾れた。片手が皿の上になく落ちて、皿は引つくり返り、卓からけし飛んで碎けた。彼の着物はソースだらけになつた。彼は無感覺のままじつと坐つて、無感覺のまま、匙を持つてゐた。しかも涙は瀧のやうに、と云ふより小止みなく迸る噴水のやうに、彼の胸を蔽つたナプキンの上に止め度もなく流れるのであつた。

『ああ何といふことだ！』と私は相手を眺めながら瞑想に耽るのであつた。『一切を滅す時が五年も経つて、もう無感覺な老人になつてしまつてゐるのに、——生涯ついで一度も烈しい精神上の動搖を経験したこともないらしく、ただ背の高い椅子に坐つてゐることと、干魚や梨を食ふことと、人のいい世間話をするのが生活の全部だつたやうなこの老人でさへ、これほど根ざし深い痛切な悲しみがあるのか！ そもそも情熱と、習慣とどちらが我々に對してより大きな權力を有してゐるのだらう？ それとも旋風のごとき我らの慾望や沸き立つ情熱の激發も、ただ燃ゆる青春のなす業に過ぎないのか、ただそれ故にのみ、情熱や慾望が深刻に思はれ、破壊的な力を持つやうに感じられるのだらうか？』

いづれにもせよ、その時の私には、我々の情熱などはこの長い、緩漫な、ほとんど無感覺な習慣に比べると、すべて子供じみたもののやうに思はれた。

彼は幾度か故人の名を發しようと思つたが、言葉半ばでこの穩やかに平凡な顔が痙攣に歪み、子供と同じ涕泣が私の心臓のただ中を貫いた。いや、これは老人達がよく自分の惨めな境遇や不仕合せを啣ちながら惜しげもなく流すあの涙ではない。又これは彼等がボンスの杯を前に置いて滾す涙でもない。否！ これは既に冷え切つた心の痛みのきびしさに堪へかねて、溜り溜つた涙が、當人に相談もなく勝手に流れ出す涙なのであつた。



その後、老人はいくらも生きてゐなかつた。私は最近かれの訃を聞いた。しかし、不思議にも、彼の死んで行つた事情には、プリヘーリヤ・イヴーノヴナの最後とある種の類似があつた。

ある日、アフアナシー・イヴーノヴナはちよつと庭を散歩することに決めた。いつもの如く暢気に、全く何の考へも持たず、ゆるゆると徑を歩いてゐると、奇妙なことが起つた。不意にうしろから、かなりはつきりした聲で、誰か「アフアナシー・イヴーノヴナ！」と呼ぶのが耳に入つた。彼はふり返つて見たが、まるで誰もゐなかつた。四方八方みまはしたり、藪の中を覗いて見たりしたが、どこにも誰ひとりゐない。それは静かな日で、太陽は燦として耀いてゐた。彼はいつとき考へ込んだ。と、その顔は妙に生き生きとして來た。やがて最後に、「これはプリヘーリヤ・イヴーノヴナが私を呼んだのだ！」と呟いた。

疑ひもなく、讀者諸君は曾ていつか、誰とも知らず自分の名を呼ぶ聲を耳にされたことがあると思ふ。それは俗に、死んだ人の靈が愛する人に惚れて、呼び招いてゐるので、さういふ事があつたら、呼ばれた人は必ず死ぬ、と云はれてゐるのである。白狀すると、私は何時もこの呼聲が恐ろしくて堪まらなかつた。忘れもしない、私は子供の頃にこの聲をよく聞いたものである。どうかすると、突然うしろの方で誰か私の名を呼ぶものがある。そんな時は大抵すばらしい快晴で、陽は明かに照らしてゐるのだ。庭の木の葉はそよともせず、死んだやうな静寂があたりに立ち罩

めてゐる。蟀ですらその時は鳴き止んでゐるのだ。庭には人つ子ひとりゐない。しかし正直なところ、たとへ鬱蒼たる森の中を辿つてゐるとき、ありとあらゆる自然力が地獄のごとく跳梁する物狂ほしい嵐の夜に襲はれたとしても、一片の雲もない大空の下のかうした恐しい静寂ほどには畏怖を感じなかつたであらう。私は大抵いつも、たとへやうのない恐怖を抱きながら、息も絶えだえに庭から駆け出して、誰かに出會ふまでは安心できなかつた。人影を見ると、この恐るべき心の砂漠を追ひ拂ふことが出来るのであつた。

アフアナシー・イヴーノヴナは、これこそプリヘーリヤ・イヴーノヴナが呼んでゐるのだと云ふ、心内の確信に身を任せてしまつた。彼はおとなしい子供のやうに、何の意地もなく、この確信に身を委ねたのである。かうして次第に瘠せ衰へ、咳ばかりするやうになり、まるで蠟燭の溶けるやうに溶けて行き、遂に蠟燭が乏しい焰を保つべき何物をも残さなくなつた時と同じやうにふつと消えてしまつた。

「私をプリヘーリヤ・イヴーノヴナの傍に埋めてくれ。」これが臨終の際に彼の發した言葉のすべてであつた。

彼の希みは充たされて、その遺骸は教會に近いプリヘーリヤ・イヴーノヴナの塋の傍に葬られた。葬式に集つた客は前よりも少かつたが、百姓町人や乞食の數は同様に夥しいものであつ



た。これで地主邸はすつかり空家になつてしまつた。萬事につけて積極的な支配人と名主は、女中頭が持つて行き損なつた残りの家具や古い調度品を、自分達の家へ運び込んでしまつた。間もなく何處からとも知れず、誰やら遠縁のものが領地の相続人としてやつて來た。以前、どここの聯隊でか知らないが中尉まで勤めた男で、大變な改革家であつた。彼はすぐさま家事經濟方面が甚しく紊亂して、投げやりになつてゐるのを發見し、是非ともかういふ不始末を根絶し、萬事を匡正して秩序を立てようと決心した。で、英國製の素ばらしい鎌を六挺買ひ込み、一軒々々の百姓家に特別な番號札を打ちつけなどしたが、あまりその整理の仕方が見事すぎたために、到頭六ヶ月も経つた頃には、領地は法定管財人の手に委ねられるに立ち到つた。賢明なる管財人（その一人は陪審員上りで、もう一人は色の褪めた軍服を着た二等大尉か何かであつた）は、僅かの間に雞も卵も根絶やしにしてしまつた。今までも殆んど地面に臥てゐた百姓家は、いよいよ完全に崩れてしまひ、百姓達は酒に身を持ちくづして、多くは逐電組になつてしまつた。管財人とかかなり仲よくして、一緒にポンスを飲みなどしてゐた當の地主様は、ごく稀にしか領地へやつて來ず、來ても一寸の間しか暮さなかつた。彼はいまだに小ロシアの定期市といふ定期市を廻り歩いて、麥粉とか、麻とか、蜜とか云つたやうな、卸賣りで扱はれる大物の値段を事も細かに訊きただす癖に、實際買ふのは燧石とか、パイプ掃除の針金とか、その他概して卸し値で一ループリを越さ

ないやうな、ごみごみした、下らない物ばかりであつた。



狂  
人  
日  
記



十月三日

今日は突拍子もない事が持ちあがつた。我輩は今朝かなり寝坊してしまつたので、下女のマヅラが靴をみがいて持つて来たとき、何時だと訊いたら、もう疾づくに十時うつたとの事だつた。それを聞くと、我輩は大急ぎで着換へをはじめた。本當のところを云ふと、役所へなんかでんで行かずに済ましたかつたのだ。といふのは、うちの課長がどんなに濫い面をするか、初めつからわかつてゐたからだ。やつはもうずつと前から我輩に云ひ云ひしたものだ。

「おい、君はなんだつて何時も頭ん中がさう變挺りなんだらう？　どうかすると、まるで氣ちがひみたいに飛びまはるかと思ふと、また時には一件書類を滅茶苦茶にこんぐらかして、閻魔さまだつて始末がつかないやうにしてしまふ。それに肩書を小文字で書いたり、日附や番號を落したりしてさ。」

いまましい瘠せつぼちめが！　やつめ、きつと我輩が局長様のお居間に陣取つて、閣下のお使ひになる驚ペンを削つてるのが、羨ましくつて堪らないのだ。要するに、我輩は役所へなんか行くはづちやなかつたのだが、ただ會計係をつかまへて、あわよくばあの猶太めから幾らなりと俸



給を前借りしようと思ふ魂膽があつたのだ。ところで、こいつがまた一筋縄でゆく代物ぢやない！  
いつの世にこいつが一と月分前わたしするやら、——へん、そんなことを當てにするより、最  
後の審判を待つてゐた方が早いからだ。どんなにこまりぬいてゐようが、泣かうが喚かうが、  
どんなに頼んだつて、あの胡麻鹽頭の畜生め、よこすことぢやありやしない。そのくせ我家では  
現在自分の使つてゐる下女に横つ面をはられてゐるんだからな。それは役所ぢゆうで知らないも  
のはありやしない。全く本省づとめなんて何處がいいんだか、わけが分らん。それに引き換へ、  
縣廳とか、民事裁判所とか、稅務監督局とかになると、話がすつかり別だ。ちよつと見たところ  
は、いちばん奥の隅つこに小さくなつて、こつこつと寫しものなんかして、着てゐる服と云へば  
腐つたやうな代物だし、それに御當人、唾でも吐きかけたくなるやうな御面相だが、それでゐて  
奴の借りてる別荘を見たら二度びつくりだ！ 金びかの茶碗か何かを賄ひまわに持つて行かうものな  
ら、「こんなものはお醫者さんあたりが相當した代物だよ。」と來る。やつこさんにやるなら、  
まづ二頭立ての逸物か、ばね附の馬車か、三百ルーブルがともするやうな海狸でなくちや駄目  
だ。見かけは如何にもおとなしさうで、言葉づかひなども丁寧なものさ。「ちよいと小刀を拜借さ  
せて頂けませんか。」と云つたやうな調子だが、いざとなると、きれいに請願人の身の皮を剥い  
ぢまつて、肌着一枚にしてしまふんだからな。なるほど、その代り本省づとめはお上品で、よろ

づ清潔をきはめてゐるところは、縣廳あたりぢや夢にも見られない。卓もマホガニ造りだし、  
課長などもみんな「あなた」言葉だし……さう、正直な話、この上品つてやつがなかつたら、我  
輩は本省づとめなんか疾づくに御免蒙つてゐたところだ。

我輩は古外套を着込み、傘を持つた。抜けるやうな大降りだつたので。往來にはだあれもゐや  
しない。ただ着物の裾を頭から被つた女房かみさん連と、傘をさしたロシヤ商人達と、小使などが目  
に當るばかり。お上品な連中では、仲間の官吏に一人ゆき合つた。とある四つ角で出くわしたの  
だ。我輩はそれを見るや否や、かう獨りごちた。

「へへえ！ 駄目だよ、お前さん、お前さんは役所へ行つてゐるんぢやなくて、そら、前の方を走  
つてゐる別嬪さんの跡をつけて、その脚にばかり見とれてゐるんだらう。」

いやはや、われわれ役人仲間と來たら、とんだ無頼漢たらしものだ！ まつたく將校だつて顔負けさ。ち  
よつと小粹な帽子ゴシックが通りかかると、必ず絡まずにや置かないんだからな。こんなことを考へてゐ  
るとき、通りかかつたとある商店の前へ、一台の箱馬車ゴシックが乗りつけたのに心づいた。我輩はその  
馬車に見覚えがあつた。これこそうちの局長様の乗物なのだ。

『しかし、局長がこんな店に用はないはづだ。』と我輩は考へた。『これはきつとお嬢さまに相違  
ない。』



我輩は壁にびつたり身を寄せた。従僕が扉を開けると、お嬢さまは小鳥のやうにひらりと馬車から飛び降りた。やつ、右へ左へと眼をお配りになる、眉と瞳がちらちらと動く……さあ大變、へまをやつたぞ、すつかりへまをやつてしまった！ 何だつてこんな雨降りそとに外出なんかさるんだらう！ して見ると、女なんでものはあんな布さらや反物をそれほど夢中になつて欲しがるものぢやない、などと云ひ切るわけに行かんぞ。お嬢さまは幸ひ我輩に氣がおつきにならなかつたし、我輩もわざと出来つたけ顔を隠すやうにした。何分にも我輩の外套はひどく汚れてゐて、おまけに型が古いのだ。今みんな襟の高いマントを着てゐるが、我輩のと來たら低くつて、しかも重ね襟、なほその上に羅紗も湯熨斗がしてないと云ふ始末だ。手飼の犬が店の戸口へ入り損なつて、おもてに取り残された。我輩はこの犬を知つてゐる。メッヂイつていふ名だ。と、一分とたたない中に、ふとかほそい聲で、

「メッヂイさん、こんにちは！」

と云ふのが耳に入った。

はて、面妖……！ いったい誰の聲だらう？ あたりを見まはすと、二人の女が傘をさして通りかかるのが目に映つた。一人は年寄で、も一人は若い女だ。が、これも通りすぎてしまった。それなのに、又ぞろぞろ傍で聲がする。

「メッヂイ、あんたひどいわよ！」

一體ぜんたいどうしたつて云ふんだらう！ ふと見ると、メッヂイは二人の女について行く犬と互ひに嗅ぎ合つてゐるではないか。

「うへつ！」と我輩は獨りごちたものだ。「おい、よしてくれよ、いったい我輩は酔つばらつてでもゐるのかな！ それにしても、かういふことはあんまりなかつたやうだが。」

「いいえ、フィデーリ、そりやあんたの思ひちがひよ。」とメッヂイは云つた、——確かにメッヂイがさう云つたのだ、我輩はちゃんとこの目で見ただから。「あたしはね、わん、わん、あたしはね、わん、わん、わん！ とてもひどい病氣だつたのよ！」

ちえつ、犬つころの癖にしゃがつて！ なんてこつた！ 正直なところ、犬が人間の言葉を喋るのを聞いた時、我輩もおつたまげてしまつたが、あとで萬事とつくりと思ひ合せて見たところ、やうやく何も驚くに當らんことがわかつた。實際、世の中には既にさうした實例が幾らもあるのだ。何でもイギリスでは一匹の魚が水の上に浮み出て、奇妙な言葉で二ことばかり喋つたが、學者連はもう三年このかた謎を解かうと大童になつてゐるけれども、いまだに一向らちが明かないと云ふ話だ。それから又、二匹の牛が店へやつて來て、茶を一斤くれと云つたとかいふ話も新聞で讀んだ。しかし、白狀すると、メッヂイがこんなことを云つた時、我輩はもう一つ吃驚させら



れてしまった。

「あたしあなたに手紙を出したのよ、フィデーリ、きつとボルカンがあたしの手紙をとどけなかつたんだわ！」

こん畜生！ 犬が手紙を書くなんて、臍の緒きつてこのかた聞いたことがない。手紙がちやんと書けるのは貴族や士族だけだ。そりや、勿論、帳場に坐つてる小商人や、時とすると百姓あがりだつて、自分の署名くらゐは出来るけれども、やつらの書き振は大抵型に嵌つてゐて、句點も讀點もなしで、てんで成つちやゐない。

これには我輩も驚いた。實を云ふと、近ごろ我輩はどうかすると、これまで誰一人として見たことも聞いたこともないやうな事を見聞きするやうになつた。

「一つこの犬つころの後をつけて、」と我輩は獨りごちた。「こいつが一體なものか、そして何を考へてるか突きとめてやらう。」

我輩は傘を擴げて、二人づれの女のあとを追つて行つた。ゴローホヅヤ街を越して、町人街バシチヤンヌカへ折れ、そこから指物師街ストリヤールナへ入り、いよいよ最後にコクシーキン橋に程近い大きな家の前で足を停めた。

『この家なら知つてるぞ。』と我輩は心の中で云つた。『これはズゼルコフの持家だ。』全く大し

た建物で、この中にはどんな人間だつて住んでゐる！ 料理女やお上りさんは數へ切れないほどゐるのだ！ われわれ仲間の役人どもと來たら、まるで犬つころみたいに重なり合つて、はみ出さなばかりの有様だ。その中には我輩の友達が一人ゐるが、先生ラッパを吹くのが巧い。二人づれの女は五階に上つた。『よろしい、』と我輩は考へた。『今は入つて行かないで、場所だけ見覺えておかう、いざと云ふ場合にはぬかりなく役に立ててやるから。』

十月四日

今日は水曜日なので、我輩は局長様のお書齋へ行つた。わざと早目に出かけて坐りこみ、ありつたけの鴛ペンを削つてしまつた。うちの局長様はとても賢い方に相違ない。書齋はどちらを見ても書棚だらけだ。我輩はその中の幾冊か標題を讀んでみたが、みんな如何にも學者らしい拈くつたものばかりで、われわれ仲間の寄りつけるやうなものぢやない、——どれもこれもフランス語でなければ、ドイツ語なんだから。ちよつとお顔を見ただけでも、いやはや、じつに豪さうなお眼の輝き方だ！ 閣下が何か無駄口をおききになつたのを、ついぞ一度も聞いたことがな



い。まあ書類でも差し出すと、

「天気模様はどんな風だね？」とお訊ねになるくらゐのものだ。

「じめじめしてをります、閣下！」

何がはや、われわれ仲間と同日の談ぢやない！ 國家的人物でいらつしやる。ところで、我輩のひそかに氣づいたところによると、閣下は我輩が特別お氣に入らしい。もしかしたらお嬢様もやはり……ええ、畜生！……いや、何でもない、だんまり、だんまり！

『蜜蜂』誌を読む。フランス人て何たる馬鹿なやつらだ！ ふん、一體なんて野心を起しやがつたのだ？ まつたく奴等をみんな一緒にふん掴まへて、管でびしびしと引叩いてやりたいやうだ！ 同じ雑誌に舞踏會の記事が載つてゐた。クールスクの地主が書いたものだが、なかなか氣持がよかつた。クールスクの地主達は筆が立つ。

その後で氣がついて見ると、もう十二時半になるのに、閣下は寢室からお出ましにならない。ところが、かれこれ一時半頃になつて、筆にも言葉にも盡しがたい出來事が起つた。不意に扉が開いたので、我輩は局長様だと思つて、書類を持つて躍り上ると、それはかの君さま、ほかならぬお嬢さまなのだ！ ああ、そのお服装みなりのすばらしさ！ 白鳥のやうに眞白なお召物、——いやはや、目も覺めるばかりだつた！ しかも、ちらと御覽になつた眼つきは、——太陽だ！ まつ

たく太陽だ！ お嬢さまは軽く會釋あそばして、

「お父様はここにいらつしやらなくつて？」と仰しやつた。

やれ、やれ、やれ！ なんて聲だらう！ カナリヤだ、正眞正銘のカナリヤだ！

『お嬢さま、』と我輩はすんでのことに云はうとした。『どうぞわたくしに罰をお下しになりませんやうに。もしどうしても罰をお下しになるのであれば、その神々しいお手にかかりたうございます。』

けれど忌々しいことに、舌がどうしたのか云ふことを聽かない。で、我輩はただ、

「いいえ、お見えになりません。」と云つたばかりだつた。

お嬢さまは我輩をちらと見て、書物の方へ目を移されたが、その時ハンカチがお手から落ちた。我輩は夢中でその方へ飛んで行かうとすると、いまましい嵌木床パルケットに足を込らせて、危く鼻柱を碎くところだつたが、やつとのことで踏みこたへ、ハンカチを拾ひあげた。いやあ、なんてハンカチだらう！ この上もないやうな細地の精麻ベチユトで、——天人の羽衣、それこそ紛れもない天人の羽衣だ！ 雲の上人の靈香が馥郁と漂つて來る。お嬢さまは禮を仰しやつて、砂糖で拵へたやうな可愛い唇が動くか動かないか位に、ほんの心持につこり笑つて、そのまま行つておしまひになつた。我輩はそれからまだ一時間ばかり坐り込んでゐたが、とつぜん從僕が入つて來て、



「アクセンチイ・イヴーノギッチ、お歸んなさい、旦那さまはもうお出ましになつたんだから。」と云ふ。

我輩はこの下男どもが我慢できない。いつも玄關の控室にふんぞり返つて、ちよつと挨拶のしるしに點頭かうともしないのだ。それどころか、一度などはあの碌でなしの一人が、腰掛けから起たうともしないで、我輩に煙草を振舞はうとしゃがつた。馬鹿な下司め、いつたい我輩を何と心得てゐるのだ？ 官吏だぞ、士族の生れなんだぞ。けれども、我輩は帽子を取つて、自分で勝手に外套を着て外へ出た。あの連中は決して着せてくれやしないのだから。うちでは大方ベツドの上でごろごろしてゐた。その後でとてもいい詩を寫した。「戀しき人に逢はぬ一時は、はや一年も経ぬ心地する。我とわが世を呪ひて、そも生きてあるべきや、かく我はひとり呟く。」きつとプーシキンの作だらう。晩、外套にくるまつてお邸の車寄せへ行き、かの君の馬車にお乗りになるところを、せめて一目でも見ようと思つて、長いこと待つてゐたが、駄目だ、お出ましにはならなかつた。

### 十一月六日

課長のやつかんかんになつて怒つた。我輩が役所へ着くと、ひとを呼びつけやがつて、こんなことを云ひ出すのだ。

「おい、一つ訊くがね、君は一體なにをしてるんだ？」

「何を、とはなんのことです？ 私は何もしてやしません。」と我輩は答へた。

「まあ、よく考へて見たまへ！ 君はもう四十越してるんぢやないか、——もうそろそろ分別がついてもいい時分だよ。いつたい君は何を自惚れてるんだ？ 君のやつてゐる巫山戯た眞似を、私が一つ残らず知らないとも思つてるのかね？ 君は局長のお嬢さんの後をつけ廻してるぢやないか！ まあ、すこしは反省して見るがいい、自分が何ものか、よく考へてみるがいい！ 君なんかコムマ以下の人間だよ、それつきりの代物さ。君は逆さに振つたつて一文の金も持つてをらんぢやないか。せめて自分の面を鏡にでも映してみたまへ、——そんな大それたことが考へられた義理ぢやあるまい！」

へん、馬鹿にするない、さういふ御自分の顔はちよつぱり藥瓶に似てるくせに、頭に残つて



一と掴みほどの髪の毛を冠毛トウカみたい搔き上げて、ポマードで薔薇の花形に固めたら、それで乃公なら何でも叶はぬことはないと思ひ上つてゐやがる。ああ、分つた、どうして先生が我輩に意地わるをするのか分つた。やつめ、閣下が我輩に破格の好意を寄せて下さるのを見て、やつかんでやがるのだ。なに、あんな奴には唾でも吐きかけてやればいいのだ！ 七等官がどれだけ豪いと云ふんだい！ 時計の金鎖をこれ見よがしに垂らして、三十九ルーブリの靴を注文する、それが何だ、——あんな奴なんか犬にでも食はれてしまへ！ いつたい我輩が坊主や商人の子だとも云ふのか、仕立屋や下士の家に生れたとも云ふのか？ これでも士族の出なんだぞ。なに、我輩だつて出世の望みはある。今まだ、やつと四十二だ——本當のことを云ふと、ほんの勤務が始まつたばかりの年齢だ。見てるがいい、奴さん！ 我輩だつて大佐相當官どころか、あはよくばもつと豪くなつて見せるぞ。ちやんと一軒家を構へて見せる、しかも手前なんかのよりもつと立派なのをな。何だい、自分よりほかにはまるで人間らしい人間がゐないやうに自惚れやつて！ もし我輩がルチョフ仕立の流行の燕尾を着込んで、手前のしてるやうなネクタイを締めてみる、手前んか我輩の足もとにも寄りつけはしないんだぞ。ただ金がない、——それがこの身の不運なのだ。

十一月八日

芝居へ行つた。出し物はロシアの馬鹿者フィラートだつた。大いに笑つた。そのほかにまだヴオードビルがあつたが、役所の書記ども、殊にある十四等官を諷刺ふてこつた面白い詩があつて、かなり自由主義風の書き方がしてあつた。我輩はよくも検閲が通つたものだとい驚を吃したくらいだ。商人のことに至つてはもうあけすけに、やつらは世間の人をだましてるし、その小伴どもは放蕩三昧をして、貴族のお仲間入をしたがつてゐる、などと喝破してゐる。雑誌屋のことで大いに愉快な對句詩クワレットがあつた、——やつらは何でもかでも貶くましてばかりゐるので、作者は讀者大衆に助けを求めてゐる、だとさ。この頃の戯作者は面白い脚本を書くやうになつた。我輩は芝居に行くのが好きだ。一寸でもポケットに小錢が入ると、どうも我慢できないででかけてしまふ。ところが仲間の役人連のうちには呆れ返つた奴らがゐて、百姓め、ただの切符でも貰はない限り、てんで芝居になんか行かうとしない。ある女優がとても巧く歌つた。我輩はつかの君のことを想ひ出した……おつと、どつこい、畜生め！……いや、なに……だんまり、だんまり。



十一月九日

八時に出勤した。課長は我輩が来たのに氣のつかないやうな振りをしやがつた。こつちも負けず、二人のあひだには何の事もなかつたやうな顔をしてやつた。書類に目を通して檢べる。四時退廳。局長様のお邸の前を通つたが、誰の姿も目に入らぬ。食後は大方ベットの上に轉がつてゐた。

十一月十一日

今日は局長の書齋に籠つて、閣下のために驚ペンを二十三本、かの君……おつとどつこい！お嬢様のために四本削つた。閣下は卓の上に少しでも餘計にペンが置いてあるのがお好きなのだ。いや、實もつて、大した頭の方にちがひない！いつも黙つていらつしやるが、頭の中では何もかも思案しておいでになるのだ、我輩はさう思ふ。閣下は一體どういふことを一番よけいにお考へになるか、あの方の頭の中でどんなことが計畫されてゐるか、それが知りたいものだ。

ああ云ふ豪い人達の生活を、もつと近う見たいものだ。そこには何かしら腑に落ちないところがあるし、我々の知らぬ宮中風の習慣もあるだらう。あの方たちが自分の仲間ではどんな風に振舞つてゐられるか、何をしていらつしやるか、——こいつが一つ知りたいのだ！我輩は幾度も閣下と世間話を始めようと考へたが、忌々しいことには、舌がどうしても云ふことを聽かない。陽氣が寒いとか暖いとか云ふばかりで、そのあとは何としても言葉が口から出ない。客間も覗いて見たいのだが、ただ時をり屏があいてゐて、客間のむかうにもう一つ部屋のあることがわかるだけだ。やれ、なんとといふ豪華な裝飾だ！それから方々にかかつてゐる鏡にしても、瀬戸の置物類にしても大したものだ！それから、かの君の住つておいで遊ばす部屋々々も覗いてみたいものだ、——何とかしてお居間へ入つて見たい！そこには色々様々な壘がずらりと並んで、息を吐きかけるのも怖いやうな花が飾つてある。かと思ふと、向うにはかの君の脱ぎ棄てられた着物が置いてあるが、それは着物と云はうより寧ろ空氣だ。それから寢室も覗いてみたいものだ……これこそ奇蹟の國に相違ない、これこそ天國にもないやうな樂園にちがひない。寢床をお離れになる時、可愛いおみ足をお載せになる小さな台が見たい、そのおみ足に穿かれる雪のやうに白い靴下が見たい……いや！いや！いや！いや！何でもなし……だんまり、だんまり。

しかし、今日我輩は頭の中に一道の光明が射し込む思ひだつた。例のネーフスキイ通りで聞い



た二匹の犬の會話を想ひ出したのだ。

「よし、」と我輩は獨りごちた。「今度こそ何もかも突きとめるぞ。まづあのやくざ犬どもの往復してゐる手紙を取り上げるんだ。その中からきつと何か掴み出せるに相違ない。」

白狀するが、我輩は一度メッヂイを傍へ呼び寄せて、かう云つたものだ。

「おい、メッヂイ、今日はかうして二人きりだ。もしお望みとあれば扉に鍵もかけるよ、さうすれば誰にも見られる氣づかひはない、——一つお嬢様のこと、お前の知つてるだけ残らず聞かせておくれ、あの方はどんなにしてらつしやる、何をしておいでになる？我輩ちかつて誰にも喋りはしないから。」

ところが狡い犬め、尻尾を巻いて、一倍ちいさく身を縮めながら、まるで何にも聞えなかつたやうに、つるりと扉の外へ出てしまつた。我輩は前から考へてゐたことだが、犬つてやつは人間より遙かに利口だ。それどころか、話だつてちゃんと出来るのだけれども、ただ一種強情なところがあるのだ、とかう確信さへもしてゐる。やつは圖抜けた政治家で何でも一々目に留めて、人間のすることは何から何まで承知してゐるのだ。いや、これは是が非でも明日ズエルコフの持家へ行つて、フィデーリを詰問し、あはよくばメッヂイの書いてやつた手紙をすつかり押収するんだ。

### 十一月十二日

午後二時、是非ともフィデーリに會つて詰問しようといふ心算で、家を出た。我輩はキャベツの匂ひが大嫌ひなのだが、町人街メシチンヌカヤを通ると、どの小店からもどの小店からも、そいつがぶんぶんと流れ出してゐる。おまけに一軒々々の門内から、やり切れない悪臭が漂つて來るので、我輩は鼻をつまんで一目散に駆けぬけた。かてて加へて、忌々しい職人どもが仕事場から夥しい煤と煙を吐き出してゐて、お上品な人間はこの邊を散歩することも出来ない始末である。我輩が六階まで辿りついて、呼鈴を鳴らしたところ、すこしばかり雀班のあるちよいと澁皮の剝けた小娘が出來た。我輩はすぐに氣がついた。これは例のお婆さんと一緒に歩いてゐた若い女である。娘はちよつぴりと顔を赧らめたので、我輩は早速、姐さん、お婿さんがほしいのぢやないか、と匂はしてやつた。

「何ご用でございます？」と娘は訊いた。

「私はお宅の犬と話がしたいんですが。」

この娘は馬鹿なのだ！ 我輩は忽ち馬鹿なことを見抜いてしまつた！ このとき犬のやつ、わんわん吠えながら走つて來た。我輩はいきなり引つ捕へてやらうとしたが、いまいましたい畜生



め、すんでのことに我輩の鼻に噛みつくことだつた。しかし我輩は、隅つこにやつの寢箱があるのに目を留めた。これこそこつちに必要な品なのだ！ 我輩はその傍に寄つて、中に敷いてある薬を引つかき廻し、小さな紙きれをひと束つかみ出した時は、われながら大満悦だつた。忌々しい犬野郎め、これを見ると、まづ我輩のふくら脛に噛みついたが、紙の束を取られたことを嗅ぎつけると、か細い聲で啼きながら、甘えかかつて來た。が、こちらは、

「駄目だよ、やつこさん、あばよ！」と云つて逃げ出した。

惟ふに、娘は我輩を氣ちがひだと思つたらしく、いかにも吃驚仰天した様子だつた。家へ歸ると、さつそく仕事にかかつて、例の手紙を點檢しようかと思つた。と云ふのは、蠟燭の灯ではよく見えないからである。ところが、マヅラのやつ床洗ひなんか押つばじめやがつた。總じて芬蘭女といふやつは馬鹿だもんだから、きれいな好きなのはいいが、時と場所の辨へがないのだ。で、やむを得ずその邊をぶらついて、この出來事をよく考へ合せることにした。今こそ我輩もいよいよ前後の事情を綜合して、すべての魂膽、一切のからくりを見抜いてしまひ、事件の大元を掴んでやる。あの手紙が何もかもはつきりさせてくれるだらう。犬つて利口なもので、一切の機微をのこらず心得てゐるから、あの手紙には我閣下のことすつかり書いてあるに違ひない。肖像もあれば閣下の鞅掌していらつしやる事務のこと……それから又かの君さまのこと何か……いや、だんまり、だんまり！ 夕方家へ歸つたが、大方ベットのうでごろごろしてゐた。

十一月十三日

さあ、いよいよ讀むとしよう！ 手紙はかなりきちんとしてゐる。とは云ふものの、やつぱり筆蹟に何やら犬くさいところがある。まづ讀んでみよう。

『おなつかしいフィデーリさん！ あなたの名はなんて町人くさいんでせう、あたし今だに馴染めないんですよ。ほかに何とかもつと氣の利いた名がつけられ相なもんですのね。フィデーリ、ローザ、——なんて俗っぽい感じでせう！ でも、そんなことはどうでもいいとして、あたしはお互ひに手紙のやり取りをするやうになつたのを、本當に嬉しく思つてゐますのよ。』

手紙は中々正確に書いてゐる。句讀の切り方もさうだし、「ゐ」と「い」の使ひ分けもみんな間違つてゐない。いや、これは全く役所の課長だつてかうは書けやしない、あいつ何處かの大學を出たとか何とか御託を並べてゐるやがるけれど。さて、次を讀んでみよう。

『あたしさう思ふわ、心に思つたこと、感じたこと、印象に残つたことをお友達と分ちふの合



は、この世で一ばん高尚な楽しみの一つですわねえ。』

ふむ……これは獨逸語から翻譯したある書物から抜いて來た思想だ、標題は思ひ出せないが。

『これはね、あたし経験から割り出して云ふことなの、尤もあたしは家の門から外へ出たことがないから、世間といふものは知らないのよ。本當にあたしは何不自由のない生活をしてゐて、お嬢さまなんか（パパさんはソフィと呼んでらつしやるわ）、夢中になる程あたしを可愛がつて下さるわ。』

やれ、やれ……いや、何でもない！ だんまり、だんまり！

『パパさんも随分しよつちうあたしを撫でてくださるのよ。あたしはお茶でもコーヒーでも、クリームを入れて飲んでるわ。ねえ、ma chère あたし正直に云ふけれど、うちのボルカン（番犬）などはお台所で大きな骨を嚙つてゐるけれども、あたしあんな物の何處がいいのか分ないわ。骨でおいしいのは野禽類だけで、それもまだ人が髓をしやぶらないのに限るわ。幾種類かのソースを混ぜ合したのは大變結構ですけど、ほると草や野菜を入れたのは駄目。でもあたしが何よりも厭なのは、パンを丸めた團子を犬にくれる人間の癖なの。食卓についてゐる一つばしの紳士面をした人が、いろんな汚いものをいじつた手でパンを丸めて、私を傍へ呼びつけて、その團子

を口の中へ押し込むぢやありませんか。いやだと云ふのも失禮でせう、——だから食べはするもの、それは不承々に頂くんですわ……』

ちえつ、一體これは何だい！ 馬鹿々々しい！ ほかにもつと氣の利いたことが書けさうなものだ。もう少し實のあることは書いてないか、次の頁を見てみよう。

『……うちの中であつたことは何事にまれ、喜んであなたに残らずお知らせするわ。あたしもう前にも、ソフィ様がパパと呼んでらつしやる御主人のことを、何やかやお知らせしたことがありますがね。そりやとても變つた人でしてね……』

そうら、いよいよ出て來たぞ！ ね、我輩はちやんと知つてゐたのだ、やつらは何事につけても、いつぱし政治的觀察眼を備へてゐるんだ。どれどれ、パパがどうしたつて？

『……とても變つた人でしてね。大抵いつも黙つてばかりいらしつて、口をお利きになることは滅多にないの。ところが、一週間ばかり前のべつ獨り言をいふやうにおなりになつたのよ、**貫**へるだらうか、**貫**へないだらうか？**▽**つてね。片手に何か書いたものを持つて、もう一方の空の手を握りしめては、**貫**へるだらうか、**貫**へないだらうか？**▽**と獨り言なの。一度なんかあたしを掴まへて、**メッヂイ**、お前どう思ふ、**貫**へるだらうか、**貫**へないだらうか？**▽**あたしは何のことやら一向わかんないので、ちよいと靴の臭を嗅いで、ぷいと行つてしまつたわ。それから



ね、ma chère、一週間ばかり経つた時、パパさんが有頂天になつて歸つてらつしやるぢやありませんか。翌朝はひつきりなしに正装をした人達が訪ねて来て、何やらお祝を云つてゐましたつ。お食事の時も今まで見たこともないほどの上御機嫌で、しきりに軽口噺なんかなさるの。お食事の後で、あたしを頸の邊まで持ち上げて、△こら、メツヂイ、見ろ、これはいつたい何だ？▽と仰しやるのよ。見ると、何かりボンみたいなのがぶら下つてるぢやありませんか。あたしちよいと嗅いでみたけど、別になんの匂ひもしやしない。到頭おしまひにそろつと舐めて見たら、ちよつと鹹つばかつたわ。』

ふむ！ この犬つころめ、どうやら圖に乗り過ぎてゐる形だぞ……ひつばたかないやうに氣をつける！ だが、してみると閣下は名譽心の旺んな方なんだな！ これは頭に入れておく必要があるぞ。

『……さよなら、ma chère、あたしこれから一つ走り行かなくちやならないの、云々……云々……明日このお手紙を書き上げるわ。』

『こんにちは！ 又あたしあなたとお話が出来るわけだわ。今日うちのお嬢さんのソフィ……』  
おやつ！ ソフィがどうしたつて、一つ讀んで見よう。ええつ、畜生！……いや、何でもなし……つづけるとしよう。

『……お嬢さんのソフィつたら、それこそ大變な騒ぎだつたのよ、舞踏會へいらつしやるつて。で、あたしはお留守の間にあなたに手紙が書けると思つて、大悦びしたわけなの。うちのソフィさんは、何時も舞踏會へいらつしやる時たいへんな悦びやうだわ、そのくせお衣裳つけのときには大抵きまつてぶりぶりなさるだけだね。人間は何のために着物なんか着るのか、あたし合點が行かないわ。なぜ、例へばあたし達みたいに、このままで歩かないんでせう？ その方がゆつたりして氣持がいいのにねえ。あたしなんか、ma chère、舞踏會へ行つて何が面白いのかわけが分らないわ。ソフィさんは何時も大抵朝の六時頃に舞踏會から歸つてらつしやるけど、その寒れた蒼い顔つきで、まあお可哀さうに、碌々食べさせて貰へなかつたのだな、とお察しするんですの。あたしなんか、正直、あんな風の生活はとても出来ないと思ふわ。たとへば、蝦夷山鳥の入つたソースとか、雞の翼を焼いたのとか、そんなものを食べさせて貰へなかつたら、その時は……あたしどうなるか知れなくつてよ。それからソースをかけたお粥も結構だわ。ところが、人參だの、燕だの、朝鮮薊だのつてもものは、どんなにしたつて駄目ね。』

なんてむらの多い文章だらう！ 如何にも人間が書いたのでないつてことが見え透いてる。初めはちゃんとしてるけれど、しまひの方は犬流だ。だが、もう一つの手紙を見てやらう。なんだか長さうだぞ。ふむ！ 日づけもありやしない。



『ああ、懐かしいフィデーリ、春の近いのがしみじみと感じられるわねえ！ あたし心臓がしきりに動悸を打つて仕様がないの、まるでしじゅう誰かを待つてでもあるやうに。そして耳鳴りのべつがながんしてるの。あたしはよく片足を上げて、扉の方に耳を澄ましながら、しばらくの間じつとしてゐることがありますの。あんだだから打ちあけて云ふけれど、あたし随分たくさん助平犬につきまとはれてゐるのよ。あたしはしよつちう窓んとこに坐つて、みんなを檢分してやるわ。ところがねえ、あんだ本當にするかどうかわかんないけど、中には大變な醜男がゐるのよ！ 一匹おそろしく間抜けな番犬がゐてね、それがお話にならない馬鹿なの。顔にちやんと馬鹿と書いてある癖に、さも豪さうな様子をして街を歩き廻つて、我こそ天下の名士でござると自惚れてさ、みんなが自分に見とれてでもゐるやうに思ひ込んでるのよ。それどころですか！ あたしなんかまるで目にも入らないやうな振をして、涕もひつかけてやりやしないわ。かと思ふと、恐ろしい猛犬があたしの窓の前に立ちとまるのよ。もし後脚で立つたら、——そんなことはあんな無器つちよに出来つこないに決つてるけど、——きつとうちのソフィさんのパパより高いに相違ないでせう。頭の上に腮がのつかるくらゐ。パパさんだつてやつぱり背の高い方で、でつぶり肥つた人なだけどね。この木偶てくの坊、とてもひどい無作法ものにちがひないわ。あたしがうつと唸つてやつたのに、平氣の平左でね、顔ひとつ顰めようもしやしないの！ 舌をべろんと吐

き出して、大きな耳をだらりと垂らしてさ、じつと窓を見てるの、——まつたくの土百姓だわ！ でもね、*ma chère*、あんだはあたしがどんなに水をむけられても、まるつきり心を動かさないと思つて？ いいえ、ちがふわ……あたしね、あんだにあたしの好きなひとを見て貰ひたいわ。お隣の垣根を乗り越して来る犬でね、トレゾールつて名なの……ああ、*ma chère*、そのひとがどんな顔をしてゐるか……！』

ちえつ、くそ忌々しい！ 碌でもないことを並べ立てやがつて！ よくもこんな馬鹿げたことが手紙に書けたものだ！ 我輩が知りたいのは人間のことだ！ 我輩は人間が見たいのだ、こちらの糧を要求するのだ、——魂を養ひ慰めてくれるやうな言葉を求めてゐるのに、それに引き變へてこんな下らない御託ごたを並べやがつて……今度は一枚とばして見やう、ちつとは氣の利いたことが書いてあるかも知れない。

『ソフィさんは小卓に向つて、何か縫物をしていらつしやる。あたしは通行の人をまじまじ眺めてゐるのが好きなので、窓の外に目をそいでゐたの。すると突然ボーイが入つて来て、▲チェプロフさまがお見えになりました！▽と云ふと、ソフィさんはいきなり、▲お通しして！▽と叫ぶなり、あたしに飛びかかつて抱きしめなさるぢやありませんか。▲ああ、メッヂイや、メッヂイや！ お前このお客さまがどなたか知つて？ ブリコネット 黒髪兒で、侍従武官で、しかもその眼つた



ら、黒耀石みたいに眞黒なのよ！さう云つて、ソフィさんはお居間に駆け込みなすつた。暫くすると、黒い頬髯を生やした若い侍従武官が入つて来て、鏡の前へゆき、頭髮をなほして、それから部屋を見まはすぢやありませんか。あたしはううと唸つて、またもとの場所へ坐り込んだ。間もなくソフィさんが出て來られてね、相手の挨拶に應へて嬉しさうに會釋をなさる。ところが、あたしは何にも氣がつかないやうに素知らぬ顔をして、相變らず窓の外を見てゐたけれど、それでも幾らか首をかしげて、二人が何を話してゐるか耳を澄して聽いてゐましたの、ところが、*ma chère*、そのお話の馬鹿げてることと云つたら！やれ何處かの女の人がダンスのときに型を間違へたの、やれボボフとかいふ人がレースの飾襟をしてゐると驚みたいで、しかも危くぶつ倒れようとしただの、やれリーチナとか云ふ女の人が、緑色の眼をしてゐながら、自分では水色だと思ひ込んでるだの、——まあ、さういつた風なんですからね。△とんでもない、▽とあたしは獨り肚の中で考へたの。△あんな侍従武官なんてトレゾールと比べたら、問題ぢやありませんわ！ほんとに！▽それこそお月様とすつぽんだわ！第一、侍従武官なんかだゞつびろい、のつぺりした顔をして、そのぐるりに頬髯が生えてゐるところは、黒い布で頬かむりしたやうぢやないの、ところがトレゾールはほつそりした顔つきをして、額の眞中に白い星があるんですもの。腰の恰好にしても、トレゾールと侍従武官ぢや比べものになりやしない。それに、眼つ

き、身のこなし、ちよいちよいした仕草、まるつきり違つてるわ。それはそれは大變な相違だわ！*ma chère*、お嬢さまはチェプロフさんの何處がお氣に召したのか、あたしとんと合點が行かないわ。なんだつてああ夢中になつてらつしやるんだらう？……』

成程、我輩にして見たつて、これは何か見當ちがひのやうな氣がする。チェプロフなんて男があつたのひとをそれ程まゐらせやう筈がない。先きを讀んでみよう。

『あたしさう思ふわ、あの侍従武官がお氣に召すんだつたら、よくパパさんの書齋へ來る役人だつて、その中に好きにおなりになるわけだわ。*ma chère*、その男を一目あんたに見せたいわ、そりやひどい醜男なのよ！袋ん中に入れられた泥龜そつくりよ……』

はて、この役人といふのは誰のことだらう？

『その男の苗字はとても變ちきりんなの。いつも書齋に坐つて、ペンを削つてるわ。頭の毛つたらまるで乾草よろしくなのよ。パパさんはよくその男を下男がはりに使にお出しになるわ……』

どうやらこの忌々しい犬つころめ、我輩のことを當てこすつてるらしいぞ。いつたい我輩の髪の毛がどうして乾草に似てるんだ？

『ソフィさんはこの男を見ると、どうしても吹き出さずにはゐられないんですつて。』

嘘つけ、この腐れ犬め！なんて口の悪い畜生だ！我輩が知らないと思つてるのか？



これはやつかみ半分の仕事だ！これがだれの仕組んだ狂言か、我輩はちゃんと承知してをるわい！これは課長めのからくりだ。何しろ我輩を不倶戴天の敵とばかり憎んで、しきりに仇をすめるのだ、一步々々仇をするのだ。それにしても、もう一通読んでみよう。もしかしたら、事情がおのづから判然するかも知れぬ。

『Ma chère フィデーリ、長いこと御無沙汰して済まなかつたわね、勘忍して頂戴。あたしすっかり夢中だつたもんですから。ある文士が愛は第二の生命であると云つたのは、まったく眞理だわねえ。おまけに、今うちは様子がすっかり變つてしまつたんです。例の侍従武官がこのごろ毎日入り浸りでね、ソフィさんはもうあの人に首つたけなの、パパさんは上御機嫌。あたしグリゴーリイ——これは大抵いつも獨り言を云ひながら床掃きをしてゐる男なの、——から聞いたんだけど、近々ご婚禮があるんですつて。何しろパパさんはソフィのお婿さんには、是非とも將官か、侍従武官か、それとも聯隊長でなくちやならないと仰しやつて……』

こん畜生！もうこれ以上讀んで行けない……何でもかでも侍従武官か、それとも將官と來やがる。何でもこの世のいいものは、みんな侍従武官か將官の手に落ちてしまふんだ。ほんの僅かな寶を見つけて、それを我が手に收めようとする、侍従武官か將官が横取りしてしまふのだ。忌々しい！我輩も自分で將官になつて見たいな。それも別に甘い汁を吸はうとか何とか云ふの

が目的ぢやない、——いやいや、我輩が將官になりたいと云ふのは、やつらがみんな我輩の前でぺこぺこしたり、宮中風の御世辭を並べたり、わけの分らないしなを作つたりするのを見た擧句、お前さん方ご兩人なんか糞くらへ、と云つてやりたいからなんだ、ただそのためなんだ。ええ、こん畜生、いまいますい！我輩は馬鹿な犬つころの手紙をすたすたに引つさぶいてしまつた。

十二月三日

そんなことがあつて堪まるもんか、みんな出たらめだ！婚禮なんかあるはずがない！やつが侍従武官だからつて、それがどうしたのだ？そんなものはただの肩書で、何も手に取つて見られるやうな品物ぢやない。だつて侍従武官だからと云つて、額にもう一つ眼が出来もしまい。やつの鼻だつてまさか黄金で出来てるわけでもなく、我輩なんかと同じものに違ひあるまい。やつだつて鼻で匂ひを嗅ぎこそすれ、物を食ふのぢやあるまい、鼻で噓はしても咳はしないだらう。我輩はもう何度も、どうしてこんな相違が出て來るのか、その原因を究めようとした。なぜ我輩は



九等官なのだらう？ どんな曰く因縁があつて我輩は九等官でなくちやならないのだ？ ことによつたら、我輩は決して九等官ぢやないかも知れないぞ？ もしかしたら、伯爵か將軍であつて、ただ九等官のやうに思はれるのかも知れない。ひよつとしたら、我輩は自分で自分が何者か分らないのかも知れない。何しろ歴史にもそんな例はいくらでもあるぢやないか。誰かしら詰らない人間が、——貴族どころか素町人、いや、ただの土百姓でさへもが、とつぜん本性が現はれて見ると、何かの大官だつたり、男爵だつたり、それとも、何といふか……だつたりする。百姓でさへどうかするとこんな具合なんだもの、貴族だつたらどんな事になるか分りやしない！ 我輩なんかも、早い話が、將官の正装をして、とつぜん局長の前へ立ち現はれる、てなことになるかも知れないぞ。右の肩にも肩章、左の肩にも肩章、そして胸には空色の綬が斜かひにかかつてゐる、——え、どうだ？ その時わが麗はしの君はどんな歌をうたひ出すだらう？ 當のパパさん、わが局長殿は何と云ふだらう？ 全く、あれは恐ろしく名譽心の強い男だからなあ！ あれは共済組合員だ、きつと共済組合員にちがひない。先生いろんな風に假面をかぶつてはゐるけれども、我輩は一目で共済組合員だと看破つてしまつた。だつて人に握手するとき、ただ二本指しきや出さないからな。我輩だつて今すぐ即座に總督とか、主計總監とか、それとも何かさう云つたものに任命されることが、ないとも限らないんだ。我輩はどうして自分が九等官なのか理由が

知りたい？ どうして必ず九等官でなくちやならないんだ？

十二月五日

今日は朝の中ずつと新聞ばかり讀んでゐた。スペインで妙なことがはじまつた。我輩などは何のことかよく分らないくらゐだ。王位が廢されて、官僚達は繼承者の選出に困却し、そのために騒擾が起つてゐると云ふことだ。我輩にはそれが甚だ不思議におもはれる。王位が廢されるなんて、どうしてそんなことが出来るんだらう？ ある貴婦人が王位に登るとかいふ噂もあるが、女が王位につくなんてことは出来ない、斷じて出来ない。玉座には王様でなければ坐れないはずだ。「だつて、王様がゐないんだもの」と云ふ。王様がゐないなんて、そんな筈がない。國に王様がないと云ふ法はないぢやないか。王様はゐるんだけれど、きつと何處かへ姿を晦ましたのだ。王様は國內にをられるのだが、恐らく御一族同士のごたごたか、それともフランスか何か隣國との關係に不安を感じて、餘儀なく身を隠されたに相違ない。それとも何かほかに原因があるのか知らん。



十二月八日

よつほど役所へ出ようと思つたが、いろいろ理由があつたし、それに何かと思案した結果やめることにした。どうもスペイン事件が頭にこびりついて離れないのだ。女が國王になるなんて、どうしてそんなことが出来るものか。そんなことを誰が許すものか。第一、イギリスが承知しやしない。それにまた、全歐洲の政情もあるし、オーストリーの皇帝や、わがロシアの陛下も……正直なところ、この事件がひどい衝動を興へたものだから、我輩は全くいちんち何にも手がつかなかつた。マヴラの話によると、我輩は食事のあひだも恐ろしくぼんやりしてゐたさうだ。さう云はれば成程、我輩は皿を二枚うつかり床へ抛り出して、粉々に碎いてしまつたやうだ。食後、坂下まで行つてみたが、別に有益な教訓は得られなかつた。大方ベッドに轉がつて、スペイン事件について瞑想に耽つてゐた。

176

二千年四月四十三日

今日は最も偉大な祝典に價する日だ！ スペインには王様がをられる。遂に見つかつたのだ。その王様は、——ほかでもない我輩なのだ。全く今日はじめてそれが分つた。白狀するが、我輩は突如稻妻に照されたやうな思ひだつた。どうして今まで自分のことを九等官だなどと思ひ込んでゐたのか、ふつふつ合點が行かない。どうしてあんな途方もない、氣ちがひじみた考へが我輩の頭に宿つたのだらう？ その頃誰も我輩を瘋癲病院へぶち込まうなどと思ひつかなかつたのは、まだしも有難いことだつた。今こそもう何もかも明瞭になつた。一切が掌心を指すがごとしだ。今までは、どう云ふわけか分らないが、すべて何か霧みたいなものに包まれてゐたのだ。こんなことになつたと云ふのも、つまり人間の脳髓が頭の中にあるやうにみんなが想像してゐるかならんだ。ところが大違ひ、脳髓はカスピ海の方から風に運ばれて來るのだ。まづ最初マヴラに、我輩が何者であるかを名乗つて聞かせたところ、やつは自分の前に立つてゐるのがスペインの王様だと聞くや否や、両手をぱちりと打ち鳴らして、恐ろしさに氣が遠くなつてしまつた。馬鹿な女、スペインの王様なんて一度も見ることがないのだ。しかし、我輩は出来るだけ氣を落ちつけさせて、お前は時々靴の磨き方がぞんざいだつたけれども、我輩は決して腹を立ててはをらん

177



ぞと、優渥なる言葉づかひで恩寵のほどを示してやつた。何しろ相手は無智のやからだから、高尙なことを云つて聞かせたつて仕方がないのだ。マヴラはびつくり仰天してゐる。と云ふのは、スペインの王様は誰でもみんなフィリップ二世に似てゐるものと思ひ込んでるからだ。しかし我輩は、自分とフィリップの間に少しも似たところはないし、それに自分はカプシン僧なんてものを一人も抱へてゐない、と事を分けて説明してやつた。役所へは行かなかつた。くそ食らへだ！駄目だよ、もう今度は我輩を誘き出さうたつてその手は食はない、あんな穢らはしい書類の淨書なんかしやしないから！

#### やよひ八十六日、晝と夜の問。

今日役所の監督官がやつて来て、勤めに出なくなつてからも三週間以上になるから、出勤するやうにと云ふ。

しかし人間つて間違つたことばかりするもので、現に一週二週で日を勘定してゐる。こんなことは猶太人が創めたものだ。といふのは猶太の坊主が丁度その頃に體を洗ふからだ。しかし我輩

は思惑があつて役所へ出かけた。課長は我輩が頭を下げて謝るだらうと考へてゐたのだが、我輩は平氣な顔をして、あまり怒つてもゐなければ、さりとて餘り上機嫌でもないと言つた様子で、やつをじろりと尻目に向け、誰にもまるで氣のつかない振をしながら自分の席についた。我輩はそこらに並ぶ有象無象を見渡して、『自分達の間にどういふ人間が交つてゐるか、もしそれがお前達にわかつたらどうだらう？』と肚の中で考へたものだ。その時は、いやはや、どんな騒ぎがおつばじまるだらう！ まづ課長からして、いま局長の前でやつてゐるのと同じやうに、我輩に三拜九拜するだらう。給仕が我輩の前へ、摘要をつくれと云つて何かの書類を置いて行つた。しかし、我輩は指も觸れはしなかつた。暫くすると、あたりが急にさわわし出した。局長の御出勤だと云ふ。みんなは局長様のお目に留らんものと、先を争つて駆け出したが、我輩は泰然として席を立たなかつた。局長が我々の課を通つて行つた時、みんなは制服の釦を一つ残らずきちんと締め、我輩は素知らぬ顔をしてゐた。局長が一體なんだ？ 我輩が局長づれの前でここへこすると思ふのか、——どうしてどうして！ あれが何で局長なものか！ あれはコロップだ、局長ぢやありやしない。ありふれたただのコロップ、それ、塚の栓にするやつ、——それつきりのもんだ！ 何よりも愉快だつたのは、我輩に署名しろと云つて書類を持つて來た時だ。やつらは我輩が一番すみつこへ、主任誰某と署名するものと思つてゐやがつたのだ、——ところが大當



て違ひ！ 我輩は局長の署名する場所へ、「フェルヂナンド八世」と達筆を揮つてやつた。その時に敬虔の念に充ちた沈黙が一座を包んだか、それこそ見ものだつた。しかし我輩はちよつと手を振つて、

「決して敬禮などするには及ばんぞ！」

と云つて、外へ出た。その足でいきなり局長の住居へ行つた。局長は不在だつた。従僕のやつ我輩を通すまいとしたが、我輩がちよつと一言いつてやつたところ、やつこさん呆れて手を放してしまつた。我輩は眞直に化粧の間へ闖入して行つた。かの君は鏡の前に坐つてゐられたが、いきなり跳り上つて、たじたじと後退りした。しかし我輩は、自分がスペインの王様であることは知らせなかつた。ただ、想像もつかないやうな幸福があなたを待ち受けてをります、敵方がいろいろ奸計をめぐらしてゐるけれども、我々二人は遂に結び合されるのですぞ、とだけ云つてやつた。我輩はそれ以上なにも云ひたくなかつたので、そのまま出てしまつた。ああ、女、——なんと云ふ狡いやつだらう！ 我輩は今度始めて女が何ものであるかを悟つた。女が誰に戀してゐるか云ふことを、今まで誰ひとり知るものがゐなかつた。ところが我輩が初めてそれを發見したのだ。女は悪魔に戀をしてゐる。さうとも、冗談ぢやありやしない。物理學者は、女はああだかうだと愚にもつかないことを書き立ててゐるが、——女が戀してゐるのはただ悪魔だけなん

だ。そら、見たまへ、一階の棧敷に坐つて柄附眼鏡をひねくつてゐる。あれはあの勳章を一杯ぶら下げた肥つちよに見惚れてゐるとお思ひですかい？ どつこい大違ひ。その背後に立つてゐる悪魔に見惚れて御座るんですぞ。ほら、さう云つたら、悪魔のやつ先生の燕尾服に隠れやつた。ほら、その中から指を出して、女においでおいでをしてゐる！ すると女はあいつの女房になるのだ、なるに違ひないとも、ところでああいふ女の親父連、あつちでもこつちでもちよこちよこして、宮中へ出しやばつてゐる高位高官たち、我こそは愛國者で候の、何のかんのと云つてゐるが、その實かう云つた愛國者どの、利權をほしがつてゐるのだ、利權を！ 親父おふくろは愚か、神様さへも金のためには賣つてしまふ口だ、基督さへも賣す手合だ、名譽心につかれた我利我利亡者！ 名譽心、名譽心、こんなに名譽心がのさばるのも、つまるところ舌の蔭に小さなお腫物でぶが出来てゐて、その中にピンの頭ほどの虫が隠れてゐるからだ。しかも、それがみんな、ゴローホヴァ街に住んでゐるさる理髮師とこやの仕業なのだ。我輩はその名を覚えてをらんが、しかしそいつがある産婆とぐるになつて世界中に回々教を擴めようとしてゐることは、確かに知れわたつてゐる。だから、フランスではもう大抵のものが回々教に歸依してゐると云ふ話だ。



おしのでネーフスキイ通を歩いてみた。皇帝陛下のお通りで、街中のものが脱帽したので、我輩もそれに倣つた。が、自分がスペインの王様だといふことは、素振にも見せなかつた。我輩は衆人環視の中で身分を明すのは端たないわざだと考へた。何故といつて、先づ第一に宮中へ伺候しなければならぬからだ。我輩が躊躇してゐるのは、今日までスペインの國民的な服装がとのはなかつたからだ。せめてマントか何かでも手に入れなければならぬ。我輩は仕立屋に誂へようかと思つたけれども、あんな連中は間拔の鈍馬ばかりだし、おまけに自分の仕事の方はお留守にして、濡手に粟の儲ばかり狙つてゐる。それにこの頃は大概、往來の舗装工事をやつてゐるのだから。我輩はまだ二度しか手を通したことはない新しい略服で、マントをつくることに決めた。けれども穢らはしい仕立屋どもの手にかかつて台なしにされては堪らないから、誰にも見られないやうに戸に鍵をかけた上、自分で縫ふことに腹を決めた。我輩は缺ですたすたに切りこまざいた。何故なら、そのマントは裁ち方がすつかり異つてゐなくてはならないのだから。

日は記憶せず、月もない、こん畜生、何が何だか分らない。

マントはすつかり縫へて出来あがつた。我輩がそれを着たら、マヅラはきやつとばかり叫聲を上げた。だが、我輩はまだ宮中へ伺候する決心がついてゐない。今に至るまでスペインから使節達が到着しないのだ。使節團がゐなくては不體裁だ、我輩の身分に重味がなくなる。我輩は今か今かと待ちかねてゐる。

一日

使節團の遅いには呆れてものが云へない。彼等の出發を差し止める原因といへば何だらう？ フランスだらうか？ 實際、こいつが一番好意を見せたがらない國なのだ。郵便局へ行つて、スペインの使節團が到着したかどうか訊き合せたところ、局長のやつお話にならない馬鹿野郎で、何一つ知りやがらない。

「いや、ここにはスペインの使節も何もゐやしない。もし手紙が出したいのなら、規程の料金を拂へば受けつける。」と云ふのだ。



こん畜生！ 手紙がなんだ？ 手紙なんて下らんものだ。そんなものは藥屋が書くものだ、しがしその前に舌を酢でしめさなくちゃならん。さうしないと顔中が苔癬はたけだらけになるからな。

マドリッドにて、きざらぎ三十日

さて我輩もいよいよスペインへ来た。しかもそれが電光石火のうちの出来事なので、我に返ることが出来ないほどだった。今朝スペインの使節達が伺候したので、我輩は彼等と一緒に馬車に乗った。が、その迅さが並一通りでないで、我輩はどうも不思議な氣持がした。恐ろしい速力で駛つたので、三十分の後にはもうスペインの國境へついてしまった。もつとも今日では歐羅巴ぜんたいに鐵道網が敷かれて、汽船も圖抜けて疾く走るやうになつたのだから、あへて不思議でもあるまい。スペインといふ國は偕も變つたところだ！ 我々が取つときの部屋へ入つた時、まづ第一に我輩の目に入つたのは頭をくりくりと刺つた大勢の人間だ。しかし、これはきつと貴族か軍人に相違ないと察した。スペインではかういふ連中は頭を刺ることになつてゐるのだ。それにしても、我輩の手を取つて案内した宰相の振舞は、甚だもつて奇怪千萬に思はれた。我輩を突

き飛ばすやうにして小さな部屋へ入れて、かう云ふではないか。

「そこにじつと坐つてろ。この上まだフェルヂナンド王などと名乗らうものなら、俺がその根性を叩き直してやるから。」

しかし、我輩はこれが單なる試練に過ぎないことを承知してゐるので、頭を横にふつたところ、宰相は二度ばかり我輩の背中をいやと云ふほど棒でぶん殴つた。我輩は危く叫聲を立てるところだつたが、これは高い位に登る場合の騎士道の風習だといふことを思ひ出して、やつとのことで辛抱した。何分、スペインでは今だに騎士時代の習慣が行はれてゐるのだから。一人きりになると、我輩は國務を執ることにした。その時はじめて發見したことだが、支那とスペインは全く同じ國であつて、ただみんなが無學なばかりに別の國だと思つてゐるのだ。我輩はわざとみんなに「スペイン」と紙に書かせて見ようと思ふ、さうするとそれが「支那」となるだらうよ。しかし我輩は明日起らうとしてゐる出来事にひどく心を痛めてゐるのだ。ほかでもない、明日七時に地球が月の上のつかると云ふ奇怪な現象が生じるのだ。それはイギリスの有名な化學者のウェリントンも書いてゐる。白狀するが、我輩は月が並はづれて華奢でひ弱いことを想像すると、しん底から不安を感じざるを得ない。何しろ月はハンブルグで製造されるのだが、それが頗る出来がわるい。どうしてイギリスがそれに注意を向けないのか、不思議でたまらない。それを造るの



は跛の桶屋だが、この馬鹿野郎、月といふものについてなんの觀念も持つてゐないのだ。こやつ  
タールを塗つた綱を使つて、木質油も一部分にさしたものだから、地球全たいに恐ろしい惡臭が  
漂つて、鼻持がならないと云ふ騒ぎだ。そのために月は大層華奢な球になつてしまつて、どうし  
ても人間が住むわけに行かない、今そこに住んでゐるのはただ鼻ばかりだ。さういふわけで、我  
我は自分の鼻を見ることが出来ない、鼻はみんな月の世界に住んでゐるのだから。ところが地球  
は重いものだから、これが月に乗つかつたら、我々の鼻をみんな粉微塵にしてしまふ。かう考へ  
ついた時、我輩はゐても立つてもゐられぬほど心配になつて來たので、靴下を穿き靴をはいて、  
國務を議する大廣間へ急いで行つた。地球を月の上に乗つからせぬやうにと云ふ命令を警察に向  
けて發するためなのだ。大會議室には頭を剃つた貴族が綺羅星のごとく居流れてゐたが、みんな  
賢い連中ばかりなので、我輩が、

「諸公よ、月を救はうではないか、地球が月の上に乗つからうとしてゐるのだ！」

と云ふが早いか、たちまち勅令實行に飛び出して、月を捉まへようと壁に攀ち登るのだつた。  
ところがその時、宰相が入つて來た。それを見ると、みんなばらばらと、四方へ逃げ散つたが、  
我輩は國王としてただ一人居残つた。すると驚いたことに、宰相は我輩を棒でぶん殴つて、小部  
屋へ追ひ込んでしまつた。スペインでは國民的風習がこれほどの權威をもつてゐるのだ！

#### きさらぎの後ふたゝび巡り來れる同じ年の一月

スペインとは抑ゝいかなる國土であるのか、今に至るまで合點が行かない。國民的風習にして  
も宮中儀禮にしても、全く並はずれてゐる。分らない、分らない、何一つさつぱり分らない。今日、  
我輩は頭を剃られた。坊主になんかなりたくない、聲を限りに叫んだのだが、その効<sup>ど</sup>がなかつ  
た。しかし、頭の上に冷い水をぼたぼた垂らされた時どんな氣持がしたか、もう何としても想ひ  
出せない。こんな地獄の責苦はかつて經驗したことがない。我輩は烈火のごとく憤慨してやつた  
ので、みんなも我輩を抑へつけるのがやつとだつた。この奇妙な風習がどういふ意味をもつてゐ  
るのか、まるつきり譯がわからん！ ばかばかしい無意味な習慣だ！ 今までにこれを廢止しな  
かつた歴代の國王の智慧のなさと來たら、我輩は不可解である。すべての事情を綜合して見る  
と、我輩は宗教裁判の手に落ちたのではないかと想像される。我輩が宰相だと思つたのは、ほか  
ならぬ大審問官かも知れない。だがそれにしても、どうして國王が宗教裁判にかけられるのか、  
やつぱり腑に落ちない。尤も、これはフランス側、殊にポリニヤクのからくりと見られないこと  
もない。まつたくあのポリニヤクは惡黨だからなあ！ 死ぬまで我輩に仇をしようと誓つたに相  
違ない。それで何處までも、何處までも迫害の手を伸しやがるのだ。しかし、やつこさん、貴様



の後ろでイギリスが糸を引いてるつてことは、先刻承知だぞ、イギリス人は大した策士だからな。やつめ到るところでちよこちよこしやがる。イギリスが煙草を嗅ぐと、フランスが嘔をする、これはもう世界中に知れ渡つた話だて。

## 二十五日

今日は大審問官がまた我輩の部屋へやつて来た。我輩は遠くの方からその足音を聞きつけて、椅子の下に隠れてやつた。やつめ我輩がゐないと見て、しきりに呼び立てはじめた。まづ、

「ポプリーシチン！」と呶鳴つたが、我輩はうんともすんとも云はない。

「アクセンチイ・イヴーノギッチ！ 九等官先生！ 士族殿！」

我輩は相變らず黙つてゐる。

「フェルヂナンド八世、スペインの王様！」

我輩は首を突き出さうとしたが、すぐに考へ直した。

『へん、その手は食はんぞ！ 貴様の手口はちやんと分つてらあ。またひとの頭に冷たい水を垂

らすんだらう』

しかし、やつは我輩を見つけてしまつて、棒で椅子の下から追ひ出した。忌々しい棒、叩かれるとその痛いことつたら。とは云へ、その代り今日は一大発見をした。ほかでもない、雄雞はどれでもそれぞれスペインを持つてゐる、尻尾に近い翼の下にあることが分つたのだ。大審問官はぶりぶり怒つて、何とかの罰を加へてやると嚇かしながら歸つて行つた。しかし、我輩はやつが無氣力な憤慨など完全に無視してやつた、やつがイギリスの手先で、單なる機械にすぎないことを知つてゐるから。

## 二百四十九世目 二三四日

いや、もうこのうへ我慢出来ない。いやはや、奴らはひとを何といふ目にあはせるのだ！ ひとの頭から冷たい水をぶつかけるのだからな！ 奴らはひとの云ふことを耳にも入れず、ひとの苦しみを目に留めない、知らぬ顔の半兵衛だ。いつたいおれが奴らに何をしたと云ふのだ？ 何だつて奴らはおれを苦しめるのだ？ この不仕合せな人間にどうしろと云ふのだ？ おれが奴ら



に何をやることが出来るだらう？ おれは何にも持つちやゐない。おれはもうやり切れぬ、あ  
あした數々の責苦は我慢できない、頭が燃えるやうだ、目がまはる。助けてくれ！ 救ひ出して  
くれ！ 風のやうに疾い三頭立の馬車を廻してくれ！ 馭者よ、早く乗れ、鈴よ、りんりん鳴  
れ、馬よ、矢のやうに翔れ、そしておれをこの世界から連れ出してくれ！ もつと遠く、もつと  
遠く、何にも見えないやうに、何一つ目に入らぬやうに。ああ、目の前で空が渦巻く、星が遙か  
に光つてゐる。黒い梢をした森が月と一緒に走る、鳩羽色の霧が足もとに擴がる、霧の中で鉦が  
鳴る、一方は海で一方はイタリヤだ、ほらあすこにロシアの百姓家が見える。はるかに青く見え  
るのはおれの家だらうか？窓のところに坐つてゐるのはお母さんではあるまいか？ お母さん、  
不仕合せな息子を救けて下さい！ 息子の痛む頭に一滴の涙を落して下さい！ みんながどんな  
に私を苛めてゐるか見て下さい！ 可哀さうなこの孤兒みなしごをその胸にしめつけて下さい！ 私ほこ  
の世界に身の置き場がないのです！ 追ひまくられてゐるのです！ お母さん、病氣の息子を可  
哀さうに思つて下さい！……ところで、御存じですか、アルジェリヤの知事の鼻の下にたん瘤  
が出来たのを？

ネー・フスキイ通



ネーフスキイ通に優るところは何處にもありはしない、少くともペテルブルグではさうである。この街はペテルブルグにとつては一切なのだ。都の花ともいふべきこの街はありとあらゆる光輝を備へてゐる。私はたしかに知つてゐるが、この都に住んでゐる蒼白い顔をした官吏なども、如何なる地上の幸福を約束されたとして、ネーフスキイ街を見棄てるやうなものには誰一人ないだらう。年齒およそ二十五歳、立派な口髭と素ばらしい仕立のフロックを着たやうな人達は云ふまでもなく、鬚に白いものが交り、頭が銀の皿のやうにつるつるになつた連中でさへ、ネーフスキイ通には夢中なのである。ところで御婦人がたは？ 勿論、御婦人がたに取つては、ネーフスキイ通は尙さら愉しいに決まつてゐる。またこれが愉しくないなどと云ふものが何處にあらう？ ネーフスキイに一步ふみ込むが早いか、もう早速享樂の匂ひがしてくる。なにかのつびきならぬ用事がかかへてゐる人間でも、ここへ踏み込むや否や、そんなものは一切忘れてしまふ。ここそ人間が用事以外のことで姿を見せる唯一の場所だ、ここへはペテルブルグ全體を擱んでゐる商業上の利害關係や、その他の要件に追ひ立てられて來ることはない。恐らくネーフスキイ通で行き會ふ人は、モルスカヤ、ゴローホヴァ、リテイナヤ、メシチャンスカヤその他の街々を歩いてゐる人達ほど、利己主義ではなさうである。さういつた街になると、歩いてゐる人にしても、箱馬車や辻馬車を飛ばしてゐる人にしても、貪婪、強慾、困窮の相が顔にあらはれてゐる。ネーフス